



故東京帝國大學總長男爵平賀讓
勲章加授、件
右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十八年二月十八日

内閣總理大臣東條英機



内

閣

賞勳局古簿七八

昭和拾八年 三月十八日

昭和 年 月 日 賞 勳 局

旭番 三。三九八四一號

一等男爵

海軍造船中

母軍造船中將

止補セラレ銳意

進艦上一段ノ進

造船史上ニ時代

ヲ劃スルニ至レリ又多年東京帝國大學ニ

賞 勳 局

教鞭ヲ執リ殊ニ昭和七年七月同大學

教授ニ任セラレ船舶工學ノ講座ヲ擔任シ

テ學生ノ指導誘掖ニ努メ同十三年三月

退官セルモ同年十二月同大學總長ニ就任シ

大學統理ノ任ニ當リ克ク廣汎ナル事務ヲ

掌理スルノ外大學各部諸規程ノ改廢理

學部人類學科ノ增設工學部附屬

綜合試驗所東洋文化研究所臨時附

屬醫學專門部及第二工學部等ノ設

置ニ盡カシ特ニ戰時下ニ於ケル學府精神

昭和十八年二月十八日

五

内閣總理大臣

片

賞勳局總裁



故東京帝國大學總長勲一等男爵
平賀讓ハ明治三十四年六月海軍造船中
技士ニ出身以來累進シテ海軍造船中將
ニ至ル其ノ間常ニ要職ニ歴補セラレ銳意
造船技術ヲ研究シ我國造船上一段ノ進
歩發達ヲ促スト共ニ世界造船史上ニ時代
ヲ劃スルニ至レリ又多年東京帝國大學ニ

賞勳局

教鞭ヲ執リ殊ニ昭和七年七月同大學
教授ニ任セラレ船舶工學ノ講座ヲ擔任シ
テ學生ノ指導ヲ誘掖ニ努メ同十三年三月
退官セルモ同年十二月同大學總長ニ就任シ
大學統理ノ任ニ當リ克ク廣汎ナル事務ヲ
掌理スルノ外大學各部諸規程ノ改廢理
學部人類學科ノ増設工學部附屬
綜合試驗所東洋文化研究所臨時附
屬醫學專門部及第二工學部等ノ設
置ニ盡カシ特ニ戰時下ニ於ケル學府精神

刷新高揚ニカハル等功績顯著者ニ候
處本月十七日死去セル趣ニ付此際同日附
以テ旭日大綬章ヲ加授セラレ度此段允裁
ヲ仰ク

内

閣

八五九
六

東京帝國大學總長從三位勳一等男 平賀 義

右ハ明治三十四年六月東京帝國大學工科大学造船科ヲ卒業シテ横須賀海軍造船廠ニ入り果進シテ海軍造船中將ニ至ル、其ノ間造船廠造船科主幹、吳工廠及横須賀工廠ノ造船部部長、艦政本部部長、技術本部部長、技術研究所長兼造船研究部長等ニ歴補シ、其ガ無敵海軍建設ノ爲ニ其ノ心血ヲ盡グリ、殊ニ古鷹、加古、青葉、衣笠級巡洋艦ノ如キハ世界ノ驚異トシテ造船史上ニ一時代ヲ劃セルモノニシテ昭和三年帝國學士院ハ學士院賞ヲ授與シテ其ノ功績ヲ表彰セリ

東京帝國大學ニ於ケル同人ハ明治四十二年九月工科大学講師タリシニ始マリ大正七年十月海軍造船大監ヨリ東京帝國大學工科大学教授ニ兼任シ昭和六年三月一旦兼官ヲ免ビラレシガ尙工学部講師トシテ依然講壇ニ立チ翌七年七月東京帝國大學教授ニ任ビラレ爾來勤続シテ昭和十三年三月ニ至リ依願免官トナレリ、而シテ此ノ間常ニ船舶工學ノ精進ヲ擔任シ深

文 部 省

博ナル識養ヲ傾ケテ學生ノ指導誘掖ニ盡瘁シタルトコロ多大ナルモノアリ、斯テ同十三年十二月長與前總長辭任ノ後ヲ襲ヒテ東京帝國大學總長ニ榮任シ以テ今日ニ至レルモノニシテ其ノ總長就任以來ハ銳意大學統理ノ任ニ當リ克ク大組織下廣汎ナル事務ヲ掌理スルノ外大學各部諸規程ノ改廢、理學部人類學科ノ増設、工学部附屬綜合試驗所東洋文化研究所及臨時附屬醫學專門部ノ設置、第二工学部ノ設置等ヲ行ヒ殊ニ戰時下ニ於ケル學府精神ノ刷新高揚ニ努ムルトコロ夥カラズ諸事業著々進歩シテ今日其ノ人格ト手腕トハ學内職員及學生ノ深ク推服スルトコロタリ

尙同人ハ昭和八年三月帝國學士院會員被仰付其ノ他教育審議會委員、敎學局參與等トシテ我國文化ノ發達ニ貢獻スルトコロ多シ

上述ノ如ク同人ノ業績極メテ顯著ナルヲ確認セラルル處本月十七日病ヲ以テ薨去セルニ付此際時ニ旭日大報章加授ノ榮ヲ與ヘラルル様御詮議相成度

右稟申ス



昭和十八年二月十七日

文部大臣 磯田 邦彦



海軍大臣 嶋田 繁太郎



内閣総理大臣 東 條 英 機 殿

文 部 省

平賀技術中將ハ海軍在職中海軍艦艇設計ニ從事シ別項記載ノ通り常ニ創意ト工夫トヲ以テ列國艦艇ニ比シ優秀ナル艦艇ヲ設計シ傍ラ常ニ後進ヲ指導教育シ以テ帝國海軍製艦技術ノ水準ヲ高メタリ而シテ其ノ間東京帝國大學（工學部）教授トシテ學生ノ教育ニ努メ又一方造船學術ノ研究ニ對シテハ船體摩摺抵抗ニ關スル大規模ナル實驗ヲ行ヒ其ノ成果ヲ造船學界ノ權威タル英國造船協會ニ發表スルヤ同會ハ其ノ學界ニ對スル功績ヲ認メ金牌ヲ贈與セリコレニヨリテ帝國造船學術ヲ世界ニ認知セシムルニ貢獻スルコト大ナリ又萬學工業大會ニ發表セル艦艇設計ニ關スル論文ハ諸外國ニ大ナル影響ヲ與ヘタル等造船學術會ノ進步發達ニ寄與セルコト我國斯界ノ第一人者タルベシ尙宮中ニ於ケル御前講演及御講書始メ御進講ハ前後三回ニ渡リ其ノ榮譽ヲ得タリ即チ

大正十三年十二月 列國軍艦ノ設計ノ大勢ニ就テ御前講演
昭和九年五月 艦艇設計時ニ於ケル船體復原性ノ考慮ニ就テ御前講

文 部 省

演

昭和十五年 一月 御講書始メニ於ケル洋書進講

一、大正十五年十一月十八日勅二等旭日重光章拜授迄ノ主ナル功績

（一）長門、陸奥ノ主要部分ノ案劃

（二）華府會議前ニ於テ天城級巡洋戰艦、加賀級及紀伊級戰艦ノ設計、之ニヨリ爾後建造

（三）赤城及加賀ヲ航空母艦ヘ改裝ノ設計

之ニヨリ爾後建造

（四）巡洋艦夕張ノ設計

從來ノ巡洋艦ノ設計ニ比シ極メテ獨創的ニシテ戰闘力大ナル設計ヲ完成シ以テツレ以降ノ巡洋艦設計ノ指針ヲ示セリ

（五）加古級及妙高級巡洋艦ノ設計

制限セラレタル排水量ニ對シ最モ戰闘力大ナル艦ノ設計ヲ完成シ列強製艦技術者ヲ驚倒セシメタリ

三、昭和二年以降ノ主ナル功績

(一) 海軍技術研究所ノ建設及其ノ整備

大正十四年十二月ヨリ昭和五年十二月迄海軍技術研究所長トシテ其ノ建設及整備ヲ行ヒ以テ海軍技術研究所ノ基礎ヲ確立セリ

(二) 船体操縦抵抗ニ關スル研究

船体操縦抵抗ニ關スル研究ハ英米獨等ニ於テ夫レ夫レ研究シタルモノアリト雖モ其ノ研究ハ比較的小模型、低速力ノ實驗ニ比シテ此レヲ實艦ニ應用スルニハ相當不備ノ點アリタル所平賀中將ハ極ノテ大ナル模型及驅逐艦ノ曳航實驗ヲ案劃シ大正十四年ヨリ昭和八年ニ至ル間ニ於テ實驗及其ノ解析ヲ行ヒ以テ前人未到ノ成果ヲ得タリ
昭和九年其ノ論文ヲ造船學術ノ權威タル英國造船協會ニ發表スルヤ同會其ノ學術ニ貢獻スル所大ナルヲ認メ昭和十年同協會ヨリ金牌ヲ受領セリ
斯クニテ或カ
造船學術ヲ世界ニ認知セシノタル功績ハ大ナルモノナリ

文 部 省

三、昭和九年以降海軍囑託トシテノ主ナル功績

(イ) 昭和九年三月驅逐艦友鶴遭難事件發生スルヤ艦艇一般ニ對シ其ノ復

原性能ヲ檢討スル必要ヲ生ジタルヲ以テ當時豫備役タル平賀技術中將ヲ海軍囑託トシテ起用セラルタリ、然ル所其ノ豐富ナル智識經驗ヲ以テ其ノ改善對策ニ參劃シ制限セラレタル排水量ニ對シ過大ノ戰鬥力要素ヲ充足スルタノ所謂「トツブヘビー」ニ成リツ、アリシ艦艇ニ對シ充分ナル復原性ヲ與フル方策ヲ樹立スルニ獻身の努力ヲ拂ヒ復原性能ニ對スル指針ヲ與ヘ以テ其ノ目的ヲ達成シ自來我が艦艇ハ復原性能ニ對シ何等不安ナキヲ來セリ

(ロ) 昭和十年第四艦隊遭難事件後強度改善對策ヲ實施スル必要ヲ生ズル

ヤ其ノ改善設計ニ參劃シ戰鬥力増加ノ要望ヲ充足スルタノ次第ニ過荷重トナリシ我が艦艇ノ船体強度ニ對シ對策ヲ樹立スルヲ得タリ

(ハ) 第三次補充計畫主力艦ノ基本計畫ニ對シ本艦型ガ從來ニナキ大形艦ニシテ又諸外國ニ其ノ例ヲ見ザルモノナルヲ以テ其ノ蘊蓄ヲ傾ケテ

其ノ設計ニ參制シ以テ此レヲ完成セリ

四海軍艦艇以外ナルモ日本郵船會社ノ依頼ニヨリ超優秀船出雲丸型ノ基本計畫ヲ指導シ此レガ設計ヲ完成セシメ商船設計ニ軍艦設計ノ經驗ヲ取り入レ以テ大型商船設計ニ一大進歩ヲ招來セリ

前記ノ如ク其ノ成果ハ多數ニ及ビ而モ是等ハ悉ク特筆大書ニ値スルモノナリ即チ巡洋艦ノ建造ニ於テハ一紀元ヲ劃スル新計劃ヲ案出シテ世界ノ耳目ヲ聳動シ又長門、陸奥以後ノ主力艦基本計畫ニハ其ノ蘊蓄ヲ傾ケテ我カ優秀ナル造船技術ヲ宇内ニ宣揚シ或ハ又艦船ノ強度安全ニ關シ之ガ改善ニ努力スル等眞ニ我國造船界上ニ一般ノ進歩發達ヲ促スト共ニ世界造船史上ニ一大革新ヲ致セルモノナリ而シテ右ノ眞價ハ今次大東亞戰爭ニ於テ遺憾ナク發揮セラレ既往ニ於ケル帝國海軍ノ赫赫タル戰果又之ニ負フ所歟カラザルモノアルノミナラズ戰爭完遂ノ將來ニ亘リテモ造船技術上帝國海軍ニ容與スル所無クテ大ナルモノアルヲ期シアル次第ニシテ其ノ功績ハ塞ニ卓越偉大ナル者ニ有之

文
部
省

昭和十八年 月

工學博士 平賀 讓氏功績書

162

裏面白紙

工學博士 平賀護氏 功績書

一、経歴

二、教育並ニ學術ニ関スル貢献

イ、學生指導等訓育ニ関スル業績

ロ、工學部内、於ケル業績

ハ、総長トシテ、業績

ニ、學術方面、業績

三、製鐵技術、技術的研究ニ関スル貢献

イ、帝國軍艦設計ニ関スル功績ト是等鋼艦ニ対スル列強、注目

ロ、海軍、技術的研究ニ関スル貢献

四、一般學界並ニ關係方面ニ対スル寄與

五、総括

一、工学博士 平賀讓氏ノ略歴

氏ハ明治三十一年東京帝國大学工科大学入学翌年海軍造船学生ヲ命じられ三十四年一科卒業、直ニ海軍造船中技士トナリ三十八年英國フリニツ海軍大学校一造船学科ニ入学四十一年同校卒業翌年帰朝後海軍艦政本部ヲ員トナリ同年東京帝國大学工科大学講師ト嘱託セル。大正元年海軍造船部ニ造船部ヲ員ニ補せられタルヲ以テ講師ノ嘱託ヲ解かれ、

大正五年海軍造船本部ヲ員トナリ第四部ニ勤務ス。大正七年兼任東京帝國大学工科大学教授トナリ船舶工学科ニ講座ヲ令據ス。同八年工学博士ノ學位ヲ授け、大正十二年欧米各國ニ出張シ同十四年海軍技術研究所造船研究部長トナリ次イテ海軍技術研究所所長トナル。

大正十五年十一月、多年経過技術ヲ研究シ造二優者ナリ成績ヲ擧げ帝國海軍ニ勅セル功績顯著ナリトス。依ツテ旭日重光章ヲ授け購ツレ、御沙汰書ヲ賜リ旭日重光章ヲ授ケラル。同年十二月造船中將ニ任マラル。昭和六年三月待命被仰付、兼任教授ヲ免セラルシガ、其ノニ東京帝國大学

工学部講師ヲ嘱託セラレ船舶工学科ニ講座ニ當スル職務ヲ令據ス。昭和六年三月豫備役被仰付シ、同七年七月東京帝國大学教授ニ任セラレ船舶工学科ニ講座ヲ擔任ス。

昭和八年勅旨ヲ以テ帝國学主院全員被仰付、同九年四月海軍省ニ於ケル臨時艦艇性能調査会事務ヲ嘱託セラレ六月解聘。同月欧米各國ニ出張ヲ命じラル。

昭和九年十一月帰朝、同年四月工学部長ニ補セラル。

同時ニ海軍艦政本部ニ於ケル造船業務ヲ嘱託セラル。同十二年六月勅一等瑞寶章ヲ授ケラル。

昭和十三年三月續ニ依リ本官ヲ元セラル。

昭和十三年十二月二十日東京帝國大學校長トナリ現在ニ至ル

ニ教育並ニ學術ニ関スル貢献

イ 船舶工学科ニ於ケル學生ノ指導ヲ訓育ニ関スル業績

氏ハ船舶工学科ノ主要學課ノ一クモ軍艦構造設計及艦裝ヲ擔當シ極メテ徹底セル理論ニ基ツキ自ラ修驗セル多年ノ經驗ヲ披瀝シテ軍艦ニ関スル講義ヲナシ更ニ學生ノ文法ノ軍艦計画及製圖ヲ自ラ査閲指導セリ。

又常ニ船舶工学科ノ教員會議ニ列席シテ其ノ科ノ學生指導方針・課目・改廢・充實・新設等ニ関シ極メテ適切ノ要ヲ示ル創意ヲ述ヘ講義内容ノ充實ト學生素養ノ向上ヲ指導シ留意シ別ニ船舶工学科ノ研究施設ノ増設・維持ニ不斷ノ努力ヲ致セリ更ニ至誠高潔ノ人格ヲ以テ學生ニ親シク接シ其ノ精神的指導ニ常ニ意ヲ用ヒ卒業生ノ就職等ニ関シテモ努力セル處頗ル大ナリ。

ロ 工学科内ニ於ケル業績

工学科長トシテ在任中ハ學部ニ関スル職務ヲ極メテ公平明瞭ニ裁決シ其ノ處理又頗ル迅速ニシテ終始學部ノタメニ多大ノ努力ヲ拂ヒタル事ハ各人ノ等シク認めル處ナルカ大學ノ全般的事項ニ関シテモ評議員トシテ努力セル處頗ル大ナルモノアリ。

船舶工学科ニ於テ多年ノ要望シテ来リシ船舶試験水槽ニ付テ其ノ設置ノ必要ヲ痛感シ親シク當局者ヲ説キテ遂ニ教員財團海防義會ヨリ其ノ建物及設備ノ一切ヲ奉ケテ寄附サルノ結果ヲ簡スニ至リ。尙近年特ニ研究ノ要ヲ力説サルル推進器ノ空洞現象ニ就テ之ガ実験的研究ノ設備タル空洞水槽ノ設

置ヲ必要ト認ノ是亦當局者ヲ説キテ遂ニ我勇財團海防義會ヨリ其研究施設寄附ノ申込ヲ得ルニ至レリ。

航空工学科ニ於テ是亦多年要望シ来リシ模型試験用風洞ニ付テ其ノ設置ヲ必要缺クヘカラサルモノトナシ前同林義勇財團海防義會ヨリ其ノ建築及設備一切ノ寄附ヲ得ルニ至ラシメタリ。

工學部全般ニ依リ久シク其ノ設立ヲ熱望セラシ且數年來企圖立案セラルシモ容易ニ實現化セラレザリシ綜合試験所設置ノ件モ氏ノ部長就任ト共ニ各方面ニ亘リ要請ナル努力ヲ拂ヒタル結果遂ニ政府當局及民間有志ヨリ允允ナル資金ノ支出ヲ得テ百ヲ當知ノ案畫ニ比シ一層大規模ノ形態ニ於テ實現セシメ遂ニ之ヲ完成コ見ルニ至レリ。

此ノ外丁友會長トシテ又オリムビツヲ競漕艇設計等ニ関シテモ盡力セル處頗ルタリ。

○ハ、總長トシテノ業績（省署）別紙参照

ニ學術方面ノ業績

氏ハ先記ノ如キ論文ヲ發表セルリ何レモ理論ニ基キ徹底的ニ実験ヲ施行セルモノニシテ専門家ノ極メテ貴重ナル資料トシテ認ムニナリ。特ニ第セノ

Experimental Investigations on the Resistance of Long Planks and Ships.

ハ英國造船協會ヨリ賞牌（金牌）ヲ授與セラレタリ。邦人ニシテ此ノ世界的一專門学会ヨリ金牌ヲ受領セルハ氏ヲ以テ唯一人トス。

記

- (11) 最近軍艦ニ於ケル特質鋼材ノ使用
造船協会報第十三号 (大正三年九月)
- (12) 軟鋼鉄及特質鋼鉄ノ力ノ実験 (平賀讓稿) 造船協会報第十三号 (大正三年九月)
- (13) 小試験水槽ニ就テ
造船協会報第四十号 (昭和二年四月)
- (14) On After-war Development of Ships of the Imperial Navy
萬国工業大會 (S.M.C.) 東京大會ニ於テ發表
造船協会雜誌第九十二号 (昭和四年十一月)
- (15) Experimental Investigations on the Frictional Resistance of Planks and Ship-models.
造船協会報第五十五号 (昭和九年十二月)
- (16) Experimental Investigations on the Resistance of Long Planks and Ships.
造船協会報第五十五号 (昭和九年十二月)
- (17) Experimental Investigations on the Resistance of Long Planks and Ships.
英國造船協会報第七十六号 (T.I.N.A. 1934)

各論文ニ付テ要點ヲ特記スルハ

以下各論文ニ就テ其要旨ヲ摘記スベキガ、總ベテ是等ノ論文ハソレ自体貴重ナル研究結果ヲ發表ナルと同時に、夫ニ我國艦船ヲ優秀ナラシムルニ必要ナル基礎的事項ニシテ、特ニ我海軍ノ艦艇性能ノ世界ニ冠タルハ如ク研究ノ成果ガ巧ニ織リ込マレタル結果ニ外ナラザルヲ知ル。従ッテ論文各編間ニ著者ノ聯繫無キ如ク見ユルモノモ、夫ハ相依リ相成リテ我艦船ノ性能増大ニ對スル一貫セル熱烈ナル努力ノ輝カシキ表現ナルモノハ特ニ注意スベキ処トス。

「最近軍艦ニ於ケル特質鋼ノ使用」

本研究ニ於テハ凡ツ特質鋼及普通軟鋼ノ諸機械的性質ヲ詳述シ特質鋼使用ニ際シ考慮スベキ諸性質ヲ十數項目ニ分テ徹底的ニ論ジタルモノニシテ、就中一部分ノ材料ノ降伏シタル状態ニ於ケル強度ヲモ論ジタルハ本論文ノ特徴ニシテ、氏ノ創意的考察トス。結局特質鋼材料ト軟鋼材料ノ併用ニヨリ最モ良好ナル船体構造ヲ得ベク、船体材料ノ寸法ノ小型トナル結果、船体重量軽減セラレ建造費ノ低減ヲ得ル事ヲ实例計畫ニツテ明カトナレルモノナリ。而シテ船体重量ノ軽減ハ實ニ其艦ノ備砲其他攻防性能ヲ増大スル根幹タルハ明カナル処トス。

「軟鋼及特質鋼鉄ノ力ニ就テノ実験」

本実験研究ハ鋼船強度ノ根本ヲナス鉄接手ノ強度ヲ実験的ニ研究セルモノニシテ、ソノ実験ノ計畫ニ就テハ實際ニ船体ニ於テ打タルル状態ニテ鉄接手ノ強度ヲ研究スル方針ヲ採リ、從來鉄接手ニ關スル多クノ実験ハ種々ノ理想の條件ヲ規定シテ実験スルノ例トセ

ルヲ、最モ必要ナル実船ニ於ケル鉄接手ノ強サヲ知ルヲ得サルモノ多ク且條件ノ不整ノタ
メ結果ニ信頼性ヲ欠クコト普通ナルガ本研究ニ於テ斯カル欠点ヲ除キ有用ナル結果ヲ出セ
ルハ氏ノ実験ニ対スル獨創的実船ニ依ルモノトス。而シテ試験片取材数、試験片型式ノ配
置等ニ綿密ナル注意ヲ加ヘ、実験範囲ノ実験ヲ行ヒタル結果偏差少ク充分信頼シ得ル
値ヲ得タルモノニシテ、実験計画上有益ナル資料ヲ與ヘタルモノナリ。

元來船體ハ鋼材、鉄板ニ依リテ形態ヲナスモノナルヲ以テ鉄ノ研究ノ成功ハ直チニ優
秀艦船ノ設計建造ニ極メテ重大ナル意義ヲ有スルヤ明カナリ。

小試験水槽ニ就テ

本論文ハ海軍技術研究所ノ試験水槽が大正十二年ノ大震災ニ依リ破壊壊失セル際、新
水槽ノ完成迄研究継続ノタメ同所ニ設ケラレタル小水槽（長さ百呎、幅六呎、水深四呎）ニ
関シ記述シ且該小水槽ニテ行ヘル実験ニ関シ詳述セルモノニシテ、小型模型艦ヲ用テ、
抵抗測定成績ノ齊一ナルヲ立証シ且海軍水槽及三菱水槽ニ於ケル相似模型艦ノ試験
成績ト比較シテ小水槽ノ成績ノ十分良好ナルヲ結論シ斯カル小水槽ニ於ケル試験ノ極
メテ簡單ニ行ヒ得ル事ヲ艦船設計者ノ個人的指針トナル処頗大ナルヲ述ベタリ

尚大水槽ニテハ殆ト実行不可能ナル水ノ温度ノ変化、水ノ比重ノ変化、水深及水槽幅ノ変
化等ノ抵抗ニ及ボス影響ハ小水槽ニ於テ同率ニ実験シ得ルコトヲ要一ゲタリ。斯カル方面
ノ研究ヲ小水槽ニテ行ハント企圖セルハ今ノ既ノ創志ニ依ルモノトス。因ニ本論文ハ後述アル
研究ノ基礎ヲナスモノナルガ又各方面ニ其後述アルタル小水槽ノ其環境ヨリセルモノナリ。

「平板及模型體ノ摩擦抵抗ニ関スル實驗的研究」

本論文ニ摩擦抵抗ノ根本的研究ニ関スルモノナリ。平板、模型體及實體ノ摩擦抵抗ニ就テハ多年「フルード」氏研究結果ヲ適用サレ、近年幾多ノ權威者ニ依リ更ニ顯著ナル進展ヲ見リルガ所ニ於ケル平板及模型體ノ試驗ハ相當困難ニシテ特ニ實體試驗ノ至難ナルヲ未ダ實用ニ適スル定説ヲ確立シ得テ狀況ナリヤ。而シテ從來考ヘラレタル理論ハ摩擦抵抗ヲ「レールロード」數（ $\frac{R}{W}$ ）^{（ $\frac{R}{W}$ ）}ノ或函數ト見做セルモノナリ。茲ニ長サハ板又ハ船ノ長さ、速度ハ其速サ、動粘性係數ハ水ノ粘性係數ヲ密度ニテ除セル數ナリ、從來行ハレタル研究ハ速度又ハ長さヲ變化シテ其函數性ヲ知ルノ範圍ヲ出デザリシガ是畢竟動粘性係數ヲ任意ニ變化シテ研究スル事ガ極メテ困難ナルニ依リ、氏ハ此點ニ着眼シ動粘性係數ヲ變化セシメテ研究スル事ヲ立案セリ、是全ク前人未踏ノ方面ニシテ氏ノ創意ニ依ルモノトス。而シテ動粘性係數ヲ變化セシムルニハ水溫ノ廣範圍ニ變化スルノ要アルモノナルヲ前段ニ記述セル小水槽ヲ使用シテ意ノ如ク溫度ヲ變化スルコトヲ得タリ斯ク長サ一呎乃至二十呎ノ平板ヲ曳行シ其際板ノ表面性質、吸水、水溫、比重等ヲ變化シテ定ニ廣汎ナル試驗ヲ行ヒ其他各種ノ實體ヲ行ヒ其成績ヲ解釋シテ結局平板及模型體ノ摩擦抵抗ニ関シテ全ク新シキ公式ヲ樹立スルニ至リ、而シテ是ガ成果ハ定ニ次ニ述フル實驗ト相俟テ摩擦抵抗ノ性質ヲ明カニシ、船舶ノ速度算定上重要ナル資料ヲ提供スルモノトス。

「長キ平板及定盤ノ抵抗ニ関スル実験的研究」

本論文ハ平板及模型艦ノ水槽試験成績ニ基ツテ樹立セル摩擦抵抗ノ新公式ヲ証
明スルヲ目的トシ、平板及定盤ヲ用キテ行ハル曳行実験ニ關スルモノトス。平板ハ長サ七
呎、幅六、三吋、排水量三、四噸ノ板舟ニシテ、之ヲ東京湾内ニテ速力一六、二節迄曳行
試験シ、小水槽ノ成績ト對照セリ。定盤ハ長サ二三、二呎、排水量三六、八噸ノ駆逐艦ニ
シテ、之ヲ速力二一、二節迄及二六、三節迄ノ二組、曳行試験ヲ行ヒ、尚長サ一一、五呎、
排水量二九、七噸ノ曳船ヲ速力六、八節迄、曳行試験ヲ行ヒ、夫等ノ成績ヲ水槽
試験成績ト互ニ致スル事ヲ確證セルノミヤラス、新公式カ往年英國ニテ行ハレ
ル軍艦「グレイハンド」号ノ曳行成績ニ適用シ得ル事ヲ示セリ。本論文ハ是等
曳行試験及成績ノ解析ヲ述ヘ、艦船ノ摩擦抵抗及全抵抗カ從來考ヘラレタル
モノヨリ大ナルコトヲ示シ、且模型試験ヨリ定盤ノ全抵抗ヲ求ムル「フルード」氏法則
カ新公式ノ使用ニ依リ一層其眞定性ヲ顯ハス事ヲモ述ヘリ。之ヲ要スルニ斯ガ
長大ナル平板又ハ定盤ヲ上述ノ如キ高速力ニテ曳行研究セルハ、氏ヲ以テ最初トシ
艦船研究ニ就テ先進國タル英國ニ於テスラカ、大規模実験的研究無シ。元來
艦船ノ速度増大ヲ期スルニハ推進抵抗ヲ適確ニ知ルヲ要ス。従ツテ推進抵抗中ノ可成
リノ部分ヲ占ムル摩擦抵抗ノ研究ハ極メテ重要ナル事項ニシテ、本論文ハ其前段ノ
研究論文ト其ニ實ニ氏ノ着眼スル處トナレルモノナリ。

Experimental investigations on the resistance of long planks and ships.

本論文ハ前段論文ト内容同シタモリニシテ英國造船協會ニ發表セラレタルモノナルガ其ノ
美事ナル成果ハヨク大ノ賞讃ヲ博シ、既記ノ如ク同協會ヨリ金牌ヲ受領スルニ至
レルモノナリ。

On the after war development of the ships of the Imperial Navy.

本論文ハ日露戦争後昭和四年迄ノ帝國軍艦ノ發達ノ概要並ニ各種軍艦ノ特
徴ヲ詳述セルモノナリカ其第一次世界大戦後ノ戦艦長門級、加賀級、巡洋艦天龍
及球摩級更ニ巡洋戰艦天城級戦艦紀伊級ノ設計又建造等ニ関シ記述シテ
リテ特ニ巡洋艦夕張及古鷹級ノ設計ニ就テ氏カ如何ニ研究ノ成果ヲ綴リ込
ミ其結果ガ頗ル満足ス可キモノナリシカヲ述ベタルモノナリ畢竟氏ノアラユル方面ノ研
究ノ終局ノ目的カ奈邊ニ存在スルカラ本論文ニ依リ明カニ認め得ルノミナラス華
府會議ノ噸數制限ニ對シテ我海軍ノ優越性ヲ保持スル極小トシテ重大ナル線果ヲ
招来セルコトヲ知ルヲ得ヘシ。

三

製艦技術、技術的研究等。固スル貢獻

イ帝國軍艦設計ニ關スル功績ト是等諸艦ニ對スル列強ノ注目

世界大戦後列強國シテ戰訓ニ基キ大艦巨砲主義ニ傾キ所謂製艦競争ノ時代ハ現出セリ、
 大正九年一月一日續續海軍工廠ヨリ入りテ海軍技術本部第四部設計主任トナリ三萬
 九千噸ノ戰艦加賀、土佐、四萬千餘噸ノ巡洋戰艦天城、赤城ノ設計ヲ完成シ次イテ
 四萬二千六百噸ノ高速戰艦紀伊、尾張ノ設計ヲ了シ、所謂八千噸級最後ノ四萬七千
 五百噸ノ大主力艦ノ設計ヲ進メ、マルト天候ノ華府條約成立シ以上ノ中赤城ト
 加賀ヲ航空母艦ニ變形シテ殘サレタルノミニテ莫、他ハ悉皆廢棄ノ己ムナキニ至レ
 リ、然レ共當時略工シ居リシ世界最初ノ十六吋^砲搭載三萬三千八百噸主力艦長門、
 隆興ノ威力ニヨリ吾ニ一籌ヲ輸シタル列強海軍ハ同氏設計ノ如上諸艦完成シ永年
 特等ノ八千噸級ヲ完備シ得タル帝國海軍ニ如何ナル脅威ヲ感スヘカリシカハ想像ス
 ルニ難カサル所ナリ。

歸リテ華府會議直前即チ大正十年十月本邦官私造船所ニ於ケル起工済ミノ艦
 艇ハ主力艦五隻十九萬六千噸ヲ含ミテ合計五十三隻實ニ三十三萬八千餘噸ニシテ
 當時本邦造船工業ノ盛況ハ言語ニ絶セシカ猶是ヲ劃期トシテ現在ニ至ル迄製艦
 材料ノ如キモ極少部分ヲ外國注文ヲ為スノミニテ殆ド全部内國產出品トナレリ、
 此ノ間ニ所ニテ設計主任ノ重責ヲ負ヘル同氏ノ造船計畫並ニ工業界指導者如何ニ

内国一般工業の發達ニ寄與セシカハ充分之ヲ窺知シ得ヘシ。

此ノ間同氏ハ軍ニ設計ノ巧緻ニミテ走ニス一方ニ於テ大戦ニヨリ招来セシ物價騰貴其ノ後ノ經濟不況狀態ト雖艦艇ノ増大ニ基キ建造費ノ膨脹ヲ常ニ顧慮シ設計ニ建造ニ出來得ル限リノ經費節約ヲ敢行スル如キ努力カシタリ斯クハ如キハ華府會議前既ニ夕張(三千百噸)古鷹(七千百噸)ノ設計ニ於テ如實ニ認メ得ル所ニシテ之ヲ詳言スレハ上ニ記而艦如キハ高價ナル大型艦ニ代フルニ可及的廉價ニシテ然モ同等ニ用兵上ノ要求ヲ充足スル小型艦ヲ以テセルモノニシテ畢竟優秀ナル艦型ヲ製出シ極力製艦費ノ削減ヲ遂行セントスル努力ノ現レニ外ナラス。

大正十一年華府條約締結ヤラシ俄然ハ八艦隊計画ハ廢棄セラレ主力艦建造ハ停止ノ運命トナリシ為メ爾後國防ノ充足ハ航空母艦並ニ補助艦艇ノ整備ニ依ルヨリ外ナキ狀況トナリシカ恰モ好シ前述ノ如キ會議前既ニ經費節約ヲ目的トシテ艦型小ニシテ猶且有力ナル補助艦設計カ同氏ニヨリ完成シ在リシ為メ條約ニヨリ制限セラレタル艦型内ニテ最有力艦ノ設計建造ヲ痛要スル時機ニ際シ其ノ設計方針ハ此ノ目的ニ對シ直ニ以テ適用シ有初ナル結果ヲ收ムルヲ得タリ。此ノ事實ハ我カ國防ノ為頗ル欣快トスル所ニシテ斯クハ華府會議前計画サレタル七千百噸巡洋艦古鷹級ハ世界最初ノ八吋砲六門裝備艦トシテ列強ニ先鞭ヲ著ケ古鷹級四隻ニ次イテ建造セラレタル八吋砲十門裝備ノ妙高級一萬噸巡洋艦八隻其ノ他ノ艦種カ常ニ列強

「リード」しりし點、然も各艦性能、復舊ナル列強、遂に及ハサリシ事實、是等ハ一同氏ノ功績ノ賜ト云ハサルヘカラス。

○ 海軍ノ技術的研究ニ関スル貢獻

大正十二年十一月一日ヨリ十三年七月十八日ニ亘リ歐洲戰役後及華府會議前後、歐米列國艦艇設計ノ狀況ヲ觀察シテ歸朝セル氏ハ大正十四年六月三日海軍技術研究所造艦研究部長ニ轉出シ、專門技術ニ專念スル一方從來蘊蓄ヲ傾ケテ後進ノ指導ニ全カヲ舉ケ、同所々長ニ舉ケラル、迄對彈對雷防禦ニ関スル特殊ノ研究及震災後ノ設備復活ニ努力スル一方、小型水槽ヲ急設シ或ハ廢棄驅逐艦ヲ利用シテ大規模ナル龍体摩擦抵抗ノ研究ヲ完成セリ（其ノ成果ハ別記ノ如ク英國造船協會ニ發表セシテ異常ノセンセイシヨシ）起シ、同會ハ「ゴルドメダル」ヲ寄贈スルニ至レリ。

大正十四年十二月七日海軍技術研究所長トナリテヨリハ只管目黒ニ新築セラルヘキ新廳舎ノ設計並ニ工事ノ鞭達ニ之レカト、昭和五年遂ニ其ノ完成ヲ見テ築地ヨリ移轉ヲ敢行シ、海軍技術研究所ノ威容全リ成ルニ至ル、此ノ間同氏ノ最も關心セシ所ハ研究各部ノ綜合連絡、研究者ノ啓發指導ニシテ、今日同所ノ著々研究成果ヲ舉ゲ、アルハ全リ同氏ノ努力指導ノ賜ナリト云ハサルヘカラス。

一般學界並ニ關係方面ニ對スル寄與、

造船協會ニ関シテハ既述ノ如ク有益ナル研究論文ヲ發表シテ直接間接ニ同學會員

ヲ指導啓蒙セハ勿論同會評議員、理事、監事トシテ前後十六年間努力シ先ニ同會創立四十年式典ニ際シ表敬セシ後同會々長ノ職ニ就キ現在同會ノ名譽員タリ、尚同會ニ當テ存置シ又ハ現存スル各種委員會ニ各員長トシテ努力セルモノ改會アリ。

日本工學會ノ評議員トシテ同會ノ權威ニ參與シ尚同會ノ工業教育制度調査會ニモ參與セル事アリ、昭和七年第二回工業大會ノ際ハ其ノ各員長トシテ大ニ盡力ヲセリ。

此ノ外昭和八年三月勅旨ヲ以テ帝國學士院會員被仰付昭和二年四月學術研究會議會議員ヲ命セシ昭和九年十二月以來其ノ工學部副部長ノ職ニ就キ其後會長ニ推サレ現ニ其職ニ在リ、又昭和十六年帝國學士院日本科學史編纂委員會委員トシカ昭和十七年推サレシ其ノ各員長ノ職ニ在リ、昭和十七年内閣ニ科學技術審議會設置サル、又其各員トナル、尚昭和九年歐米出張ノ際ハ秘型模型試驗關係ノ國際會議ニ海軍、三菱及帝國大學ノ代表トシテ参加セリ。

乙 終結

之ヲ要スルニ平賀讓氏ハ其性格然始一貫至誠ナル言ヲ以テ表現シ得可ク、平素徹底的研究ニヨリテ、ミ事ハ成就セラルト、堅キ信念ハ持シ、事ニ着手スルヤ熱烈ナル態度ヲ以テ之ヲ敢行ス、從ツテ專向的研究ニ於テハ先ニ記述セル如キ貴重ナル研究ノ發表ナリ又海軍艦船ノ設計ニ當ツテハソノ徹底ナル研究ト該傳ナル學識経験並ニ独創的考案ナリ幾多新機軸ヲ出シ艦艇設計ノ第一人者トシテ万人ニ認メラル、所トナリシモノナリ氏ハ亦ニヨリ觀矣程メテ廣ク識見頗ル高ク條理ヲ込メ至誠ヲ盡シテ極メテ適正ナル意見ヲ述ブレヨ以テ衆望ヲ負フニ至リタル事ハ寧ロ當然ノ事ト云フベク工學部長トナリ畢イテハ帝國大學總長トナレル全ク其表ハレト信ズ、而シテ他ニ對シテ極メテ懇切ニ指導請教シ倦ム處ナキハ事々ニ他ノ信賴ヲ蒙リ、尤ヅ以テ氏ノ意見ニ傾聴スル、必要ヲ表ヒヨリ感ゼシメ、是ガタメ衆人ノ意中、不斷ニ氏ヲ推スコトナリ、自カラ廣ク工學界ノ重鎮トシテ仰ガレルニ至ル、現ニ例ヘバ學術研究會識ノ如キ多クノ碩學先輩輩ニ先ンジテ其會長ニ推サレタル如キハ全ク其好適例ナリトス。

(主として教育行政関係) 昭一八、三、六

(昭和十四年四月 大學記念日總長式拝参照)

令主方兩教授ノ休職方異例手續ヲ以テ具申斷行ス

八、自昭和四三、三一
至同、五、三、二九、約一年間、自う經濟學部長ノ事務ヲ兼掌シ、學

(昭和十四年四月 大學記念日總長式辭(一頁参照))

本學職負ニテ苟クモ國體ノ本義ニ照シ國家思想ヲ誤タル言説、

肅正ヲナス（例之土屋教授、近藤教授等ニ對スル處置）

五 軍事教練ノ強化尊重ヲ圖リ剛健ノ氣風ヲ振興ス

學科ノミヲ課シ来リタル從來ノ取扱ヲ一変シ術科教練ヲモ併セテ、
總長、學部長ノ監督ノ下ニ大學自ラ積極的ニ之ヲ學生全員ニ實
施スルコトヲシ、ソノ成績甚タ著ガリ剛健ノ氣風頓ニ顯著トナレリ。

六、土ニ親ミ勤勞ノ風ヲ養ヒ具體ニ即セシメ團體訓練ヲ行フト
 共ニ併セテ食糧増産ニ資スベク學生ノ農耕作業ヲ創設強化ス
 昭和十六年四月ヨリ千葉県檢見川運動場一部ヲ集團的訓
 練道場トシテ農耕作業ヲ開始シ時局下食糧増産ニ寄與
 セシムルト共ニ全體ノ勤勞ヲ通ジテ集團的訓練ヲ行ヒ毎
 日暇及休暇ヲ充テテ教職員學生共ニ參加師弟ノ情誼深フ
 中ニ土ニ親ミ自然ヲ樂シム、作業ニ從事シ全體の和樂ノ
 精神ヲ涵養シ實績ヲ著ケ居レリ。

七、學生薰陶上ニ於ケル家族主義ノ重要性ヲ強調シ最高教育ヘ
 家族主義ヲ導入シ家族連絡會ノ制度ヲ創設シテ入學式その他ノ
 機會ニ努メテ父兄ト接觸シ保チ所謂家族的大學ヲ實現セリ
 昭和十六年三月卒業證書授與式當日ヨリ父兄ヲ招待、同年四月
 ヲリ入學式宣讀式ヲ行シ家族連絡會ヲ招待列席ノ下ニ

- 宣讀式ヲナサシメ尚宣讀名簿ヲ作りテ各自署名セシム
- 昭和十六年三月卒業證書授與式告辭 二―四頁 参照
 - 同 年四月入學宣讀式告辭 一三―一五、二〇頁
 - 同 年四月記念日祝賀式々々告辭 三三、三九―四〇頁
 - 同 年五月卒業證書授與式告辭 五―六頁
 - 同 十七年四月入學宣讀式告辭 二―三頁
 - 同 年四月記念日祝賀式々々告辭 一五、三一―三二頁
 - 同 年十月入學宣讀式告辭 一四―一五、二三頁
- 學部共通細則ニ制定(大學一覽 卷十、章參照)

八、大學施設、全般の擴充改善

1. 第一工學部附屬綜合試驗所、創設(別冊綜合試驗所要覽二頁参照)
 2. 東洋文化研究所、創設(別冊東洋文化研究所、創設参照)
 3. 船舶水槽、建設
 4. 航空用風洞、建設
 5. 臨時附屬醫學專門部、創設
 6. 航空研究所、擴充(電氣部、航空部、測量部等、擴充)
 7. 學生定員、擴大(昭和十、十一、兩年度より第一工學部學生收容定員各二八名宛、臨時増員、昭和十七年度より於て之、電氣、火藥、船舶各學科學生、收容定員、大々増員シテ國家ノ要請ニ即應ス)
 8. 講堂、新設及擴充
- 法學部 政治學政治學史第三講座 (日本國家思想ノ生成、東洋諸國觀中、支那、印度思想トノ比較研究)
- 第二工學部 建築學第六講座 (防空計畫、都市建築、消防)
- 放射線工學講座、火藥學講座

農學部 バルブ學、木材化學講座、水産學第四講座(工船漁業)

畜産學、造畜講座

理學部 地球物理學科ノ設置、地球物理學講座

經濟學部 經濟統制論講座

醫學部 藥品分析化學講座

農學部 農場實習、擴充及強化

礦山部 研究所、整備擴充

天文台 觀測事業、擴張

9. 第二工學部、創設(別冊第三工學部、創設参照)

10. 第一工學部石油工學科、創設(採油工學ニ講座、製油工學ニ講座)

九、淺野侯爵邸跡、買収

大學施設、全般の擴充上重要ナル意義ヲ有シ本部ニ於ケル大學所需敷地ノ割増ノ結果ヲ未ダソノ三分一ノ面積ニ就キテハ目下既ニ建築工事中ナリ

十、學生ノ訓育、教養、体育、厚生ノ部ニ於ケル刷新改善

學生ノ訓育、体育、厚生ノ諸部ニ於ケル全般的刷新改善ヲ斷行シ、
全學會規程ヲ制定シテ從來ノ學部會及運動會ヲ統制一元化シ、
茲ニ全學ヲ一丸トシタル學生組織ヲ創リ以テ大學令第一條ノ
徹底ヲ期ス

○全學會規程 大學一覽 一七八頁參照

○學部共通細則 大學一覽 第三章 第四以下參照

學校報國際ノ積極的活動、大學特設防護團員トシテノ積極的
訓練ノ強化

尚衛生委員會ノ組織ヲ通シテ學生ノ結核對策ヲ樹立スヘク企畫中

十一、國防科學研究會、南方科學研究會ノ創設及ソノ振興

事及ノ推移ニ伴ヒ國防科學研究ノ必要ヲ主唱シテ研究ヲ振興シ、
軍ノ積極的貢獻ヲ計畫中 更ニ南方科學研究ノ必要ヲ認メ
率先医工、理農、經等各學部一教授、助教授ヲ動員シテ南方科學

研究會ヲ創設自ラ會長トナリ之ヲ主宰シテ着々研究ヲ進メ其ノ
研究業績ヲ舉ゲツ、アリ 未ル十月ヨリハ之ヲ官制化シ研究所トシテ
積極的活動開始スルノ基礎ヲ確立セリ

十二、昭和十五年一月御講書始ニ於ケル洋書進講

十三、昭和十五年六月以來學術研究會議會長トシテ研究會議ヲ指導シ我國
學術ノ向上ニ貢獻セリ

十四、昭和十三年頃以來東亞文化協議會副會長トシテ事實上同會ヲ主宰シ
日華兩國ノ學者ヲ指導シ對支文化工作ニ貢獻セリ

十五、農林省及農業振興部聯盟、依屬ヲ益ケテ農學部附屬農場内ニ熱
帯農業員養成所ヲ創設シ十二月一日ヨリ五十名ヲ收容シテ南方ニ領
地要員ノ養成ヲ開始ス

附記

一、昭和十六年七月多年本邦造船業進歩發達ニ貢獻シタル功績
著大ナルニ因リ造船大臣ヨリ表彰サル

二、大正十三年四月ヨリ十二月マデ造船省嘱託、三菱重工業株式會社技
術顧問トシテ太平洋航路ニ用ヒラルベキ帝國最大最速ノ客船
ニシテ有隣ノ際軍用ニ充リバキ船約二艘ノ設計ヲ行ヒタリ

三、海軍関係ノ功績ハ之ヲ省略ス

四、其他

○帝國學士院會員トシテ學術上ノ成績顕カラス

○學士院賞(昭和三年四月)ヲ受ケ

○造船界ニ於ケル人材ノ養成ニハキ極メテ功大ナリ

○ロンドンニ於ケル英國造船學會ヨリ造船界ニ於ケル功績極メテ

顯著ナル理由ヨリ金牌ヲ贈ラル

(註一、本金牌ハ外國人ニシテ之ヲ贈ラレタル者世界ヲ通ジテ

一二名ニ過ギザル程度ノモノナリ)

[illegible]

ク

東京帝國大學
內閣

宮内省

贊助局

賞勳局

同

資助局

海軍省

文
部
省

南海
本軍
部校

内閣

同

同

宮内省

內圖

文部省

同

内閣

宮内省

三一四	六	三	免本職補海軍技術研究所造船研究部 長兼職 如故	同	一五	二、二五	敘勳二等授瑞寶章	同	一	七、二	敘從四位	同	一	一、一	免海軍技術研究所造船研究所長	同	一	一、一八	授旭日重光章	同	一	一、一	一任海軍造船中將	同	一	一、一	四駐紮高等官一等	同	三	一、一	四	昭和三年勅令第百八十八號ノ旨 ニ依リ大禮記念章ヲ授與セラル	同	同	六	三、二〇 三、二〇 三、二〇 免兼官	同	同	四、一五	敘正四位（特 _レ 命）	同	七	七、三〇	任東京帝國大學教授	敘高等官一等	同	七	七、三〇	履 歷 書	同	八	三、八	同	九	四、二四	同	五	五、五	同	六	六、七	同	一	一、九	同	一〇	四、一	同	一	一、一八	同	二	六、三	敘勳一等授瑞寶章	同	八	一、六	敘從三位	同	八	一、四	滿洲國へ出張ヲ命ス 八月十八日出發 九月十日歸朝	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	宮内省	文部省	賞勳局	
-----	---	---	-------------------------------	---	----	------	----------	---	---	-----	------	---	---	-----	----------------	---	---	------	--------	---	---	-----	----------	---	---	-----	----------	---	---	-----	---	----------------------------------	---	---	---	-----------------------------	---	---	------	------------------------	---	---	------	-----------	--------	---	---	------	-------------	---	---	-----	---	---	------	---	---	-----	---	---	-----	---	---	-----	---	----	-----	---	---	------	---	---	-----	----------	---	---	-----	------	---	---	-----	--------------------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--

東京帝國大學總長 平賀 讓述

式辭及告辭
(昭和十四年)

目次

一、記念日祝賀式々辭（四月十二日）	一
一、卒業生に與ふる告辭（三月三十一日）	一五

記念日祝賀式々辭

本日、東京帝國大學創立六十二年の記念日を迎へ、教職員學生諸君と此の一堂に會して記念式を舉げ、茲に式辭を申述べますことは、私の光榮且欣幸とする所であります。此の機會に過去一ケ年の主なる出來事を顧み、併せて所感の一端を述べたいと存じます。

先づ 皇室に於かせられまして、益々御繁榮に涉らせられ給ふことは、國民の齊しく幸慶とする所であります。殊に去る三月二日 清宮貴子内親王殿下御誕生遊ばされ、皇室の彌榮を拜し奉りまして、國民は舉つて歡喜致した次第であります。

聖上に於かせられましては、此の未曾有の時局に當り、日夜萬機を御總攬遊ば

され給ふ中にも、文教に就て深く、聖慮を注がせ給ふことを洩れ承りますこと
は、洵に恐懼感激に堪へざる所であります。

支那事變は茲に第三年に當ります。皇軍は廣東、漢口を攻略して後、既に海南
島の要部をも手中に收め、御稜威の下に、陸には大陸の治安に任じ、海には西太平
洋を制壓して居ります。我が國は皇國の基礎を一層確立し、更に世界の平和、人
類の幸福に貢獻せんが爲に、東亞新秩序の建設に着手致したのであります。實
に我が大和民族有史以來の大業であります。今や我が國をめぐる國際關係は極め
て重大であり、又歐洲内部の深刻なる波瀾に基いて世界の情勢、實に測り知る可
からざるものがあります。我が國民たるもの舉國一體となり、不退轉の決意を以
て萬難を克服し、此の回天の大業を成就しなければならぬのであります。從軍す
るもの、銃後の護りとして立つもの、苟くも國民たるものは、擧げて悉く、其の
全力を國事に盡すべきの秋であります。我々、職を本學に奉ずるものは、更に覺

悟を新たにして、大いに帝國大學の使命達成に粉骨碎身致さなければなりません。

最近一年間の本學に於ける重要なる出來事を顧みるに當り、先づ第一に申上ぐ
べきは、從軍將兵の内に、幾多の我が帝國大學出身者があり、又奉職中の職員、
在學中の學生もありまして、報國の誠を盡して居ることあります。其の内に
は、既に幾人か名譽の戦死を遂げられた方があります。我々は出征將兵に對し、
滿腔の感謝の意を表すると共に、名譽の戦死者に對しては、謹んで深厚なる敬弔
の忱を捧ぐる次第であります。

次に、昨年十一月退官致されました前總長長與博士は、多年教授として盡瘁せ
られ、學勤極めて高く、更に傳染病研究所長として、又醫學部長として業績顯著
であられ、昭和九年末全學輿望の下に總長に就任せらるるや、能く全學を統督
し、一意、大學使命の達成に努力せられまして、學園精神の保持、國家思想の涵
養、學生の教養並に福祉増進、研究施設の擴充、時局に對應して學部及び研究所

に於ける喫緊の諸研究の促進等に極めて適切有效の處置を採られました。然るに病氣の故を以て、豫定よりも早く退官せられましたことは誠に遺憾であります。其の功績は永く本學史上に残るものであります。

長與前總長に續いて總長事務取扱の重任に當られました佐藤農學部長が、一ヶ月半の短時日間なりしにも拘らず、能く全學の意思を代表して諸般の行政に善處せられましたことは、大いに感謝すべきであります。其の佐藤博士も定年の故を以て去る三月末教授を退官するに至りました。博士は三十有二年間一日の如く教職に盡され、我が國農學並に農政史上多大の功績を挙げられました。

更に、何れも定年の故を以て、醫學部に於て眞鍋、井上兩教授、文學部に於て塩谷、池内兩教授、理學部に於て田中教授が退官されました。是等の諸教授は、固よりそれ／＼專攻の學問に於ける碩學でありまして、内外の敬重する處、誠に惜むべきであります。長與前總長を始め、以上諸教授多年の學勤、又本學に對す

る功績に對し、深甚なる感謝の意を表し、諸君と共に國家の爲に一層の御自愛を祈り度いと思ひます。

又過去一ケ年に、名譽教授佐々木、岡田、入澤、田代、櫻井の五博士の、幾多の學勤を挙げられ、本學に功勞あつた方々が、御逝去になりました事は、誠に哀悼に堪へません。中にも櫻井博士は學界の耆宿であられて、嘗ては約一年の間、本學總長事務取扱の任に當られました事を追憶致す次第であります。

次に、復興事業に就て顧みまするに、過去一ケ年間に竣工したものは、醫學部内科講堂、工學部綜合試験所の一部、航空研究所の擴張、柔劍道場、學生控室の一部其他で、又工事中のものは、醫、工、理及農の諸學部に亘つて居ります。震災復舊新營工事中、竣工のものは全學で六割強、工事中のものを加ふれば八割弱となり、未着手のもの尙二割餘もありますが、總括的に着々と復興の成り行くのは御同慶の次第であります。尙政府の支出及三菱社の寄附に依る工學部綜合試験

所、海防義會寄附の同學部風洞室等の事業が、本年開始せらるることは、時局と併せ考へて甚だ喜ぶ處であります。又學生體位向上施設として、千葉市検見川に於て十萬坪の土地が、去る三月購入されましたことは、長與前總長が特に學生の保健上の遠き慮に出でられたものであります。

研究に就きましては、理論的のものと、應用的のものと兩者併行して進みつ、ありますが、直接、時局に對應し其の緊要なるものとして、着々と効果を擧げつゝある例と致しましては、資源或は代用品に關するもの、研究、傳染病研究所の活躍、或は長距離用航研試作機の成功の如きものがあります。

工學部に於ては、夙に生産力擴充の國策に鑑み、學生増員の必要を痛感して種々計畫する處ありましたが、一昨年末以來考究の結果、遂に應急施設として、本年並に明年の二ヶ年は各百二十餘名、全員の約四割を増員入學せしむることゝなりました。是全く教職員の熱心なる對時局の精神に依るものであります。

今年より、東洋政治思想史に關する講座並に防空建築學に關する講座が増設されることになりましたが、何れも喫緊の學術でありまして、其の將來の發展を期する次第であります。尙、現下の情勢に對應しまして、人文・自然兩科學に於て、國家の緊急とする幾多の研究事項に就て、教職員諸君が、各自の研究室に於て、或は學外の諸機關を通じて、其の達成指導に従事して居られますが、文部省は、本年初めて多額の國費を以て、全國の學術研究を助成せらるることゝなりましたから、諸君の負擔は益々増加することになると思はれますので、一層の御努力を期待致します。

現在の大學制度は、主として大正七、八年頃に制定せられたものであります。政府は教育制度全般の刷新を企圖し、教育審議會を設置して調査審議中でありますが、本學に於ても時勢の推移、學術の發達と共に、大學制度の再檢討を要するものあるを認め、昨年春、長與前總長は大學制度審査委員會を設けられました。

今後私としては、是非共是を活用し、大學制度に就て十分の研究を遂げ度いと切望致して居ります。

昨年七月、荒木文部大臣が大學の振興、學風の向上を計り、大學内部を明朗化せんと趣旨より、大學制度の改革を要望せられましたに就ては、爾來文部當局と共に研究を重ねました結果、十月に至り解決を遂げ、一路、大學の振興に向つて邁進することになりましたのは、邦家文教の爲め賀すべき處でありまして、職を大學に奉ずる者の責務益々重大なるを覺ゆる次第であります。

昨年經濟學部に於ける一教授二助教授が治安維持法に觸るるの疑惑の下に、法の審理を受けることとなり、休職を見るに至り、次で本年に入り國家思想に關する疑惑を匡す爲と、同學部の宿弊を一掃する爲に、二教授の休職手續を執るの已む無きに至り、殊に右の内一教授を除いては、何れも國體の本義に關し、國家思想を誤まる言説、行動ありたりとの疑惑を受けたるに基きますことは、苟くも

教職に在るものとして不謹慎な次第でありまして、實に遺憾に堪へざる所であり
ます。

經濟學部に就て處置を執りましたその波動として、四教授の辭職を見るに至り
ましたが、爾來、最も堅實なる國家意識に基く明朗清新なる學部の再建に努力致
し、蕭々と其の緒に就いて居ります。而して廣く有力の講師を官私大學又は官民
の間に求め、教職員概ね充員されて、新學年の授業は成規通りに行はるること、
なり、學部を挙げ、心一つにして健全なる發達を遂げつゝあります。

續いて、今後私は諸君と共に益々大學使命の達成に努力致し度いと存じます。
大學使命の達成とは、大學令第一條の實行にあることは言ふ迄ありません。私
共は大學の使命を自覺して、國家に須要なる學術の蘊奥を究めなければならませ
ん。學術の蘊奥を究めてこそ、初めて大學は國家有用の材を育成するに必要な
學術を教授し得ると考へます。學術の蘊奥を究めてこそ、世を指導し將來の文化

を創造し得ると考へます。學術の蘊奥を究むるに當り、常に私共の金科玉條としては、今上陛下御踐祚の際「模範を戒メ創造を勗メ」と仰せられたる勅語を仰ぐべきものと拜し奉ります。

凡そ、外來の學問、殊に主として人文科學に屬するもの、中には、唯外國に於てのみ存在し得る思想、即ち其の國の歴史、國民性、慣習等を基として發達したものが少く無いと思ふのであります。斯る基本に立つ所の學問、又は學說を我が國に取り入れ、我が國家に須要なる學問、學說とする爲には、先づ能く是を研究し、第一に國體の本義に照して、其の立脚する思想が根本的に謬り無き事を確かめねばなりません。其の根本にして謬り無くば、更に是を我が國情に應ずる様、十分に咀嚼同化せねばなりません。即ち研究其のものに於て、先づ以て十分慎重なるべし、まして、是を學生に教授し、或は是を以て國民を指導し、若くは國家社會に應用せんとするに於ては、更に深く考慮、自重すべきであります。斯くの

如きは、日本國民として極めて平凡なる常識であるべきと思ひます。然るに、近年の思想上の遺憾なる事件を見ますに、國體の本義が我が國の政治、經濟、社會及思想上の根本であり、最大事實であることを忽略に附せるか、若くは此の最大根本事實にも拘らず、學問は純推理にして現實の事實とは別性質のものなりとするの觀念に基くものなるやに考へられます以上、茲に、此の點を特に一言致さざるを得ないのであります。

外來の學問は、先づ是を十分に研究し、其の研究の對象が我が國體精神を以て咀嚼され、同化されて、我が國家に須要適切なる學問學說となつて後、初めて教授し、發表し得るものであります。此の心を以て廣く智識を世界に求め、外國の文物を輸入し、研究し、捨つべきは捨て、採るべきは採り、以て我が文化を援け、更に綜合的文化の創造に努めなければならぬと考へます。而して人文・自然科學何れの部門に於ても、我が國固有の學術が、更に一層尊重されねばならぬ

ことは、申す迄ありませんが、然も亦、徒らに自己満足、若くは排他的となつて、包容と發展とを忘るることは、決して國家を隆昌ならしむる所以ではないのであります。

學生諸君の本分は、國家有用の材たるの抱負を以て靜に學修し、思索し、研究し、而して其の間に人格を陶冶し、國家思想を涵養するのに在ります。大學が此の目的に向つて學生の指導に努力するのは勿論であると共に、諸君自ら心懸け、自ら努力せねばなりません。これこそ、諸君の矜持であり、責任であると考へます。而して今日の時局に於て、安んじて學業に没頭し得らるることにつき、畏れども皇恩の辱けなきを膽に銘じ、十分に時局を認識し、何時にても筆を捨て劍を執つて、勇躍、國難に赴くべき覺悟を固めつゝ、一層發奮自肅せられんことを希望致します。人格の陶冶は固より大學の基本的使命でありますが、特に全學を擧げて、國家思想の涵養に努力致し度いと存じます。肇國の大義に基き、悠久にして窮り無き

國體の本義を辨へ、國家を重しとし一身を輕んじて、國家の隆昌を圖るの精神を、私は國家思想と考へます。國家思想の涵養には、國體の本義を明徴ならしむると共に、日本國民が世界に誇りとする萬世一系の 皇室に對し奉り、筆にも口にも現し得ざる尊崇敬愛の念を培ふことに心懸けねばなりません。

謹んで教育勅語を拜しまするに、「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル」と仰せ給へる 聖慮の宏大にして優渥なる、實に感激の至りてあります。

時局重大、今や曠古の一大創造の時期に直而せる我が國民は、社會層の何れに屬するを問はず、相剋摩擦を克服し、獨善排他の風を戒め、眞に舉國一致、堅忍不拔の精神を以て邁進せねばなりません。私共教職員學生は、共に共に、聖旨を奉戴し、肇國の大義を體得し、各自の本分を盡して國恩の萬分の一に報い奉るべきであります。

是を以て本日の式辭と致します。

卒業生に與ふる告辭

多年螢雪の功を卒へて、茲に芽出度本大學の課程を修了されたる諸君に祝辭を述べ、諸君の社會への門出を祝福することは、私の衷心より欣快とする處であります。本日合格證書を授與致したのは、法學部六二五名、醫學部一六五名、工學部三一〇名、文學部二八三名、理學部一〇五名、農學部二〇一名、經濟學部三四九名、合計二、〇三八名であります。

私共本大學に職を奉ずるものは、今や時局極めて重大なる際に、國家有用の人材たるべき諸君を、斯くも多數社會へ送り出すことを得て、無上の光榮と歡喜とを感じるものであります。諸君は小學校より始めて、今日遂に帝國最高學府を卒業されましたにつけて、第一に 聖恩の鴻大なるに感激し、益々報國の念を深く致さねばなりません。次には、諸君の父母が諸君を今日あらしめんが爲に如何に

苦心されたかを思ひ、父母の厚恩を謝し、彌々孝を盡さねばなりません。忠孝の道は言ふ迄もなく、我が國民道德の基本でありまして、告別の辭を述ぶるに當り、先づ是に就て諸君の心構を新に致し度いと思ひます。

卒業生諸君。支那事變は、實に諸君の在學中に始まり今日に至つて居ります。現に皇軍は、陸に海に空に、盡忠報國の誠を盡して居ります。從軍將兵の内には幾多の我が帝國大學の出身者即ち諸君の先輩もあれば、又奉職中の職員、在學中の學生もあります、其の中には既に幾人か名譽の戦死を遂げられた方があります。我々は是等の出征將兵に對し滿腔の感謝の意を表すると共に、特に名譽の戦死者に對しては深厚なる敬弔の忱を捧ぐる次第であります。諸君の内にも遠からず召集せらるる方々も、多數に達することゝ存じます。我が國は、今や敢然として、我が國家の基礎を一層確立するのみならず、更に世界平和の爲に、東亞新秩序の建設に着手したのであります。此の大業こそは、我が國民が萬難を克服して成就

しなければならぬ所であります。我が國をめぐる國際關係は、極めて重大にして微妙であり、歐洲内部の形勢も亦、幾多の危局を包藏して居りますから、世界を通じての情勢は、實に測り知るべからざるものがあります。而して此の時局の重大さは、遠く將來に亘るべきものであります。私は諸君が、今日の時局に對し、十分の認識を持つて居ることを確信致します。從軍するもの、銃後の護りとして立つもの、苟くも國民たるもの其の心を一にして、各自其の全力を國事に盡すべきの秋であります。又國家が人材を要すること、今日程切なるはありません。私は諸君が決然たる覺悟と抱負とを以て、本學を立つて行かれるものと期待致します。我が帝國大學の傳統的精神は、諸君を教養するに當つて、卒業してから直に實社會に役立つと云ふことを、第一義と致しては居りません。我々の志す處は、諸君が或は實務に服し、或は學術を研究し、心身の鍛鍊と共に經驗を積み、他日社會の如何なる方面に在つても、國士として、指導者として國家を双肩に荷ふに足

る其の根底を、本學に於て培はんと云ふのにあります。従つて諸君は、在學中修め得た處のものを基礎として、夫れ夫れの専門の業務に努力すると共に、常に識見を養ふことに、最大の留意を致さねばなりません。諸君が文理科より成る高等學校に學び、且共同生活を爲し、本學に來つては、七學部併せ有する、最も完備した綜合大學に於て、其の雰圍氣内に學生生活をなした事が、それ自身、不知不識の間に、諸君の識見を養つた事、多大と考へるのであります。即ち是を基として、益々育て、欲しいのであります。交友、讀書、思索、新聞雜誌の閱讀、是等は皆此の見地の上に選擇せらるべきであります。識見を養ふことは、夫れ自身、人格の修養を授け、識見を養つてこそ、世界の大勢、四圍の情勢、世の動き等の認識、未來の見透等に就て、正鵠を得ることが出来るのであります。是は決して博く淺く知るのみにては得らるべくも無く、さりとて、専門の方面に深く入るのみにても達せられず、少くも、適切な諸部門、諸方面に亘りて能く知ると云ふこ

とを要します。さうして長年月に亘り、絶えざる注意と努力に依りてこそ、初めて得らるべきであります。

次に、私は諸君が充分に自己の天賦の性能を磨いて、各人夫れ夫れの特色を發揮せられんことを希望致します。特に附け加へて置き度いことは、寛容の美德を忘れないこととあります。自分獨りを善しとし、妄に他を惡しとすることは最も慎むべきであります。諸君の磨かれたる個性と學問、經驗、識見而して必ず常に國家を重しとして一身を輕しとするの至誠、是に依りて諸君が國家の目的に對し、個々の創造力を育成發揮してあらゆる方面に、あらゆる角度より、活動することに依りて、國家は偉大なる發達を爲し得ること、信するのであります。

私は諸君の座右の銘として、至誠なる言葉を御勸め致します。さうして日常の如何なる行事にも、心の誠と相悖るなきやを反省せられんことを望みます。又剛毅質實が、人間志を遂ぐる上に必要であることも言ふを待ちません。次に、健康

は活動の源泉であること勿論なのでありますから、保健上の注意と共に、精神を緊張して、健康を増進せらるることを希望致します。諸君が多年の學生生活から社會生活に出らると、生活様式が俄かに變化し、爲に、健康を損ふの例尠くありません。中には有爲の材を抱きつゝ、空しく中途に挫折する者あるを見ては、實にその人のみならず國家の上からも大なる遺憾を禁じ得ません。健康は諸君の將來に於ける大成に缺く可からざる要素であることを忘れてはなりません。

諸君が實務に服するに當り、豫て一つの研究事項を選択し置いて、如何に繁劇にして時間を割き得ざる場合にも、猶、胸奥には該研究事項を趣味としてとつて置くこととあります。所謂浮世の多難多事の眞中に、得意の時代にも亦、失意の時代にも、繁忙の時にも、閑暇の時にも、諸君に沙漠の綠蔭に似たる救ひ、慰みを與へると考へます。

最後に、此の際特に申上げ度いのは、功を急ぐなと云ふことであります。功を

急ぐ時は、正しき人もいつの間にか、不知不識に個人的、利己的人となり、或は先輩を陥れ、同輩を退け、或は私黨を作り遂には失敗したる幾多の例證を珍らしと致しません。又是が爲に、自己の職務に對し、去就を輕々しくして、出所進退を誤ることが多いのであります。將來諸君が重要な地位に進めば進む程、益々人事を盡して、功は自ら成るを待つ謙虛なる態度を、採られんことを祈る次第であります。要は、諸君が己を處ふして、自己の職務に對し、最大最善の努力を爲し、而して人に對すること寛容なれば、終局に於て、自ら諸君は必ず國家有用の材となり、諸君の志は達成せらるること疑ひ無いのであります。

是を要しまするに、諸君が幼年より始めて、今日最高學府を修了する迄、就中、本學在學中の學生生活に於て、涵養された堅實なる國家思想及陶冶された人格、修得された學問、是を基底として今後修養、経験を積み、常に肇國の本義、萬邦無比なる國體に感激を持つて、世界的に活動する日本國民として、邁進せら

るることを祈り、諸君の前途を祝福して私の別辭と致します。

三二

〆

以
印
代
勝
寫

總長 平賀 讓述

卒業證書授與告辭

昭和十六年十二月二十七日

東京帝國大學

202

卒業證書授與告辭

本月八日良くも、大詔を降發し給ひ、米、英兩國に對して戰を宣せられ、今や干戈相見え、國家の總力を擧げて征戰に従ひ、一億臣民心を一にして、我々日本人が祖先より承けた大使命の達成に邁進してゐるのであります。戰が長期戰となることは覺悟の上であります。我等は必勝の信念を堅持し、飽までこの乾坤一擲の大戰爭に勝ち抜いて、大東亞新秩序を建設し、以て世界の平和に寄與せねばなりません。この秋に當り、茲に二、二五一名の新卒業生諸君に榮ある卒業證書の授與を行ひ、諸君を君國に捧げるを得ますのは、私の衷心より欣幸とする所であります。私は諸君の光榮と希望とに充ちた前途を祝すると共に、一言所懐を述べて、諸君に對する饒けとせんとするものであります。

本日各學部長から卒業證書を授與致しましたのは、法學部七三五名、醫學部一五七名、工學部

四四一名、文學部二四五名、理學部一〇五名、農學部二一三名、經濟學部三五五名であります。

先づ私は諸君と共に、この國家の興亡を賭する征戰に於て、大御統威の下皇軍が、南はフィリピン、マレー、ボルネオより東はハワイに及ぶ、殆ど太平洋の全域に互る曠古の大作戰に於て、開戦の勢頭より前古無比の大勝を博し、西太平洋の制海空權を確保し、國威を世界に輝かせる武功に對し、衷心より感謝と敬意を表するものであります。

今回卒業の諸君は、本來ならば明春三月卒業の筈を、時局の急迫により臨時の措置として、本年十二月を以て卒業のことと相成つたのであります。抑々一國の教育制度は、これを輕々に改廢すべきものに非ざることは、申す迄もありません。しかるにも拘らず、今般政で修業年限を短縮致されました所以のものは、實に現下の情勢に應じ、速に國防上、次では勞務動員上の要望に應へ、急速にあらゆる方面に多數の人材を送り、國家の總力を強化して、危局を突破せんがために外ならないのであります。私は我が國が未曾有の危局に直面し、有爲の材を要すること最も急なるに際し、今新たに諸君を國家に捧げ、以て國家が大學をして、國家に須要なる學術の理論及應用を教授し、その總奥を攻究せしめ、人格の陶冶と國家思想の涵養とに努めしむる所以のものを

實現するに至つたことに、至大の喜びと力強さを感じるのであります。今日こそは實に諸君が、重大時局下 大君の饒の御極となるの決意を新たにして、多年培つた全能力を發揮し、平素より固めし覺悟と、日頃の本懐とを充たすべき晴の前途の日であります。さればこの日はひとり本學にとつて最も意義深き日であるのみならず、諸君の一生のうちに於ても、最も重大なる一轉機の日であります。同時に諸君を學ばしめるため人知れぬ勞苦を累ね、只管成業の日を待ち侘びられた、諸君の御両親はじめ家族近親の方々にとつて、また大なる喜びの日であると存じます。よつて私は、父兄の方々との喜びを共にし、且つは諸君の前途の感激と誓ひとを新たならしめ、共に榮ある前途を壯ならしめんがため、父兄各位の御臨席を御求め致しました處、各位には時局下といひ、年末といひ、特に御多端の際にも拘らず、かくも多數御臨席下さいましたことは、本學の欣幸に堪へない所であります。父兄各位に於かれましては、多年鶴首待望せられた子弟の今日の晴の姿を面のあたりにせられて、いかばかり御喜び、また御安心のことかと御察し致し、心からの御祝を申し上げる次第であります。

卒業生諸君、諸君は多年の學生生活を顧みて感慨の無量なるものがあるませう。諸君は全國學

生中の精英として、全青年の羨望裡に、我が國最高最大の學府に進み、各自の志す所に従ひ専門の權威に就いて親しく指導を受け、今や業成り世に出づるのであります。諸君は過去の榮華の勞苦を回想すると共に、今日の前途を深く喜びとし、現下の狀態に顧みて、その責務の重大なるを思ひ、嚴肅にして悲壯なる感慨に胸を打たれること多しと思ひます。洵に戰雲世界を覆ふ現下の狀態は、歴史に比類なきまでに多事多難であり、特に我が國が重大なる危局を切り開いて直進邁往せざるべからざるの秋、國家の諸君に期待する所、洵に大なるものがあります。

この重大時期にあつて我等が最も深く心に銘すべき所は、一時的昂奮に驅られ、或は徒に戰勝に陶醉して、各自の分を忘るるが如きことがあつてはならぬといふことであります。諸君は日常茶飯の些事も、國運に係るといふ認識とその責任感の下に、熱誠各自の職域にその分を盡すと共に、何よりも忠良なる日本國民としての自覺に生きるを第一とすべきであります。而して諸君が、如何にして今日あるを得たかに先づ思を致すならば、自らにして諸君の國民としての自覺も高まり、またその盡すべき分も明かとなるのであります。諸君は昨年十月長くも本學に、聖駕を迎へ奉り、龍顏を拜し、聖壽の萬歳を奉唱し奉りたる時の感激の、今なほ新なるものがある

りませう。惟ふに諸君が今日の榮譽を荷うて、國家將來の指導者たるの期待を負ふを得るに至つたのも、偏に聖代の恩澤によるのであります。殊に非常時下、安んじて學業に専念し得たことを顧みるならば、聖恩の鴻大、國體の泰けなきに感奮し、日本國民としての誇りに充ち、愈々匪躬の誠を效さんことを期することと信ずるのであります。また古歌に

銀も黄金も玉も何せむに

まされる寶子にしかめやも

といふのがあります。洵に世の親心を道破せるものと考へます。諸君はこの親心にはぐくまれ、愛くしまれて今日あるを得たのであつて、御兩親は諸君のために、いかばかりか勞苦を拂はれたことかと御察し致します。いふまでもないことでありますが、私が特に附け加へて希望致しますことは、諸君が心からの感恩崇敬の念を以て、御兩親を大切に勞はられたいことであります。諸君の御兩親も追々老境に入られることと思ひますが、御兩親に孝養を盡し得ることは洵に人生至大の幸福といはねばなりません。

皇恩の泰けなきことと、父母、國土の恩とに感激し、感恩報謝の念を固うし、行住坐臥、崇敬

のまごころを以て謙虚、精進すれば、諸君の行は自らにして私を去り、爲すべきを爲して自ら已む能はざるの義となつて現はれ、また大義の爲には生命を惜まざるの盡忠報國の念となるのであります。感恩崇敬の誠こそ一切の創造、發展の力の源であり、實にまた國民道德の大本たる忠孝の道となるのであります。諸君は今後、國家社會のいかなる領域に活動するにせよ、いかなる難關に處するにせよ、至誠一貫、この日本國民たるの本義に徹すべきであります。

諸君のうちには、既に入營の確定した方も定めし多いことと存じます。然らずして或は實務に就かる方も、間もなく入營し、光輝ある皇軍の一員として、遠からず征戰に従ふ光榮を擔ふ人々もまた定めし少なくないであります。諸君は本學入學以來、一旦緩急あるの際、何時にても筆を捨て剣を執るの覺悟を定められたことと信じます。我等が祖先に承くる使命達成のため、またアジア恆久の平和と榮光のため、至仁の大神心を奉じて、生命を君國に捧ぐるは眞に皇國男子の本懐といはねばなりません。諸君のうち、銃後に止まつて職業に従事する人も、その覺悟と決意とに於て、戦線にあるものと何等かはる所のあるべき筈はありません。今後また何時でも、職を抛ち地位を棄て、勇躍國難に赴くの覺悟を固めなければなりません。

銃後に止る人のみならず、入營従軍する人も何れは職業に就かれるのであります。元來職業はこれによつて國民生活の條件を充し、國家の發展を圖るものであります。故に諸君の職に就くことは、それが如何なる職業なると、また地位の高下如何とを問はず、窮極する所國家社會の一員としてその興隆に與ることであつて、殊に現下戰時體制の下にあつては、職業は國家の意志と要請によつて規制せらるるのであります。私は諸君が如何なる職務も國家の命する所としてその職に勵精し、今日までの學校生活に於て得たるものを基礎として、以て將來の大成を期し、職域奉公の誠を效せんことを切望します。現時の社會は、諸君が學窓にあつて想像せしよりも絶無とはいひ難いのであります。その困惑不滿の裏に果して諸君は過當な自負心が潜んでゐないかを反省するの要があります。諸君はよく自重し、與へられたる仕事が如何に取るに足らざるが如きものにせよ、全力を傾注し、託せられたる任務を果すを得ない場合には、懸命の覺悟をもつて精進し、苟くも責任を回避するが如きことがあつてはなりません。これと共にまた、職域に於ける諸君の價值が、諸君の人格的内容を以て定まることに留意せられたいのであります。諸

度國防國家建設の今日には學識の必要を感ずること一層大なるものがあります。併しながら豊富なる知識も高邁なる識見を以て統一することなければ、その用をなし難いのであり、識見を具へた人格により統一された知識は、必然之を實現せんとする意志となり、行動となつて現れずんば已まないものであります。故に如何なる職務に就くも、諸君は、深く茲に思ひを致し、須く先覺の士に教を請ふを怠らず、友との交はりには、また新聞、雜誌、圖書等の閱讀に於て、而して自家の省察思索を通じて絶えず修養に努め、以て識見を長するに力めねばなりません。これ即ち自己の教養を高め、人格を陶冶する所以に外ならないのであります。

戦時の意識が高まると共に、青年の間には愛國の熱情の進る餘り、動もすれば、外面的危機にのみ心を奪はれ、修養研學を抛擲するも已むを得ずと迷斷し、これより招來せらるる内面的缺陷を忘るるの弊なしと致しません。併しながら國難が加重されればされる程、國力充實の必要は一層痛切に感ぜられる次第であつて、諸君が知的精神力を十分に發揮して、その創造力により、益々國力の充實に力め、必要の組織を建て、必需の資材を作り出さねばならぬことは明白であります。殊に大東亞新秩序を確立し、我が國がその指導的使命を擔ふべきことに想ひ到らば、必然日

本精神を基として、優秀なる武力と同時に高度の學術文化の建設に一層力を致さねばならぬのであります。諸君はその召されたると、銃後にあるとの別なく、齊しく勇躍國難に殉ずるの覺悟を固めつつ、沈着冷靜に各自の本分に直進せられたいのであつて、これこそ眞の臣道實踐であり、國家の諸君に期待する所のものであります。

近代の國家生活は如何なる部門に於けるにせよ、經濟、技術等に互り、凡て物の世界と交渉關係する所甚だ大なるものがありますが、現代では動もすれば餘りに物と精神とを分離して考ふるの弊なしと致しません。凡そまごころを以て、心魂を傾注する處、物と精神とは別個のものではなく、兩者が一になるの境地に到達するのであります。私自身多年技術に關係した體驗より申しまして、まごころを以て國家のためにと精神を傾注する處、始めて優秀なる技術も生れ、物も精神の乗り移つた生けるものとなると確信致します。諸君が如何なる職域にあるも、まごころを以て物をも生かすの境地に到らんことを切望して已みません。

諸君のこれからはいられる社會生活に於て、諸君は方めて同情と寛容との心を養ひ、他人の立場を理解し、他を批判する前に必ず先づ自らを反省し、人を責むる前には先づ己を責め、常に廣

き展望と暖き心を以て行動すべきであります。かくすれば、人は自己を生かすと共に他をも生かし、秩序、公徳もこれより生じ、隣保互助の精神に生じ、始めて健全なる社会生活が行はれるのであります。凡そ人はかくの如き心構へを以て至誠事に處し、操守を嚴にし、所信に邁進するの勇氣を藏し、正義を堅持し、而して努めて已まないならば、何事も成らざることはないのです。諸君は須く理想は高遠に、實踐は低きより始め、堅實に正道を進まねばなりません。而して、諸君は甘んじて縁の下の力持たることを決意すべきであり、功を急いではなりません。何事も大事を成就するには、長き忍耐と大なる犠牲とを必要とすることは、諸君の夙に熟知せらるる通りであります。私はまた諸君が、自己の長とする所と短とする所とを辨へ、よく他人の忠言を容れ、明訓淵達、飽くまでも公明にして剛毅、よく熟慮し斷行せんことを望むものであります。次に注意したきは長年の學窓生活より實社会に出た者が、往々にして健康を損じ可憐有爲の材を以て中途に挫折するの例が尠くないことでもあります。精神の緊張と共に保健に留意し、更に積極的に身心の鍛錬に力められんことを切望致します。

卒業生諸君、光輝ある我が國の悠久なる歴史に於て、前古未曾有の重大時局に直面するに當つ

て、諸君がその分に應じ、全力を擧げて報國の誠を效すの秋は、まさに今であります。精銳無比の皇軍は、その善謀勇戦により米、英兩國に對して開戦の勢頭より、既に全世界を震撼したる大勝を博し、今後に於ける戦果に堅き確信を與へてゐるのであります。然りと雖も敵は富強を誇るものであり、その強靱にして執拗なる國民性によつて、容易に屈服を肯ぜず、長期持久戦へと我を導くことは、蓋し疑なき所であります。而して皇國の隆替と、東亞の興廢とは、實にこの一戦に懸つて存するのであります。我等は緒戦の成果に驕ることなく、全力を盡し、聖旨を奉藏して、百難を排し萬苦に耐へ、臥薪嘗膽、國本に培ひ、強き精神力と必勝の信念とを堅持し、如何に長期に亙るも飽くまでも戦ひ抜き、以て光輝ある二千六百年の國史をして彌が上に榮光あらしめ、以て、宸懸を安んじ奉らねばなりません。我等は戦線にあると銃後にあるとを問はず、覺悟は一であります。一死以て吾國に報ずるの決意を以て、大御様威の下、祖宗に承くるの使命達成に勇往邁進すべきであります。この盡忠報國の大精神のある限り、なにもものといへども恐るるに足らないのであります。最後の勝利は必ず我が國にあるのであります。

諸君は、よく我が國今日の偉大なる發展を成就せし先人苦心の跡に顧み、深く感謝を捧ぐると

共、皇國將來の發展は實にかかつて自己の双肩にあることを自覺し、既往本學に於て涵養修得したる人格と學術との基礎の上に立ち、國體の本義に徹し、國に殉ずるの決意を以て邁進し、國家、社會の、將また諸君の一門一家の期待に背かざるやう、最善を盡されんことを切望して已まないであります。

一四

本日諸君を送るに當り、洋々たる邦家の前途を思ひ、萬感交々胸に迫るを感えるのであります。私は茲に神州不滅の信念を明徴にし、諸君が大東亞新秩序の建設に與るの前途を祝福し、諸君の自愛を祈り、以て別辭と致します。

以印刷代謄寫

總長 平賀 讓述

告辭及式辭

昭和十六年

東京帝國大學

211

目次

- 一、卒業證書授與告辭(三月三十一日)……………一
- 一、入學宣誓式告辭(四月八日)……………一三
- 一、記念日祝賀式々辭(四月十二日)……………二五

卒業證書授與告辭

多年榮雪の功成り、めでたく卒業の榮譽を荷はれた諸君に對し、茲にその前途を祝福すると共に、一言惜別の辭を述ぶるを得ますことは、私の衷心より欣快とする所であります。

本日各學部長から卒業證書を授與致しましたのは、法學部六〇一名、醫學部一六〇名、工學部三三三名、文學部二三〇名、理學部一〇九名、農學部二〇七名、經濟學部三一九名、計一、九五九名であります。

顧みよするに、畏くも天皇陛下に於かせられましたは、昨秋、學事御獎勵の思召を以て、軍國多事政務極めて御多端の折にも拘はらせられず、本學に行幸遊ばされ、各般の現狀につき具さに天覽あらせられました。大御心を教育、學術に用ひさせ給ふ御程洵に畏しき畏き極みであります。この光榮は實に本學二十幾年振りの盛事でありまして、あの日全學を擧げて運動場

に 陛下を御迎へ申上げ 聖壽の萬歳を三唱し奉りたる感激は、實に諸君の胸奥に深く深く刻まれて、終生忘れ得ざることを信じます。かくの如きは實に純乎として純なる日本人の魂の感激として、諸君が世に出た後も、諸君の精神生活を培ふ根本になるものと存じます。過去二十年以上に亘り、本學卒業生の落し得ざりし光榮と感激とを胸にして、學窓を去らんとする諸君は洵に多幸なりといふべきであります。

今や我が國が、有史以來の重大時局に直面し、人材を要すること最も急なるの秋にあたり、やがて國家社會の中堅として、更にまた指導者として、國運の進展に寄與すべき諸君を國家に捧げ得ますことは、私共大學に職を奉ずるものとして、至大の光榮と、職責を果し得たる歡喜とを感ずるのであります。されば本日は、本學として特に意義深き日であると共に、諸君自身の一生に取つては勿論のこと、また諸君をして今日あらしめんが爲、日夜苦心せられた御両親はじめ、家族の人々にまつても、同じく記念し特筆すべき日であると存じます。この意味に於きまして、本年より父兄の方々ごその喜びを共にし、ともにともに諸君の前途を壯ならしめ、また諸君の覺悟を新たならしめ、その榮ある前途を祝福せんが爲に、父兄各位の御臨席を御求め致しました處、

各位は御多用中の折にも拘はらず、多數御臨席下さいましたことは、私のみならず本學全職員の洵に欣幸とする所であります。父兄各位に於かれましては、多年丹精をつくし待望せられた、子弟の今日の成業の姿を面のあたりにせられて、いかばかり御喜び、また御安心のことかと御察し致し、衷心よりの御祝を申上げる次第であります。

卒業生諸君、諸君は本日の實社會への首途にあたり、必ずや今日に至る迄の、小學校入學以來二十年に垂んとする螢雪の勞苦を回想し、今日の榮譽を深く喜びとせられるであります。併しながら諸君が自らを反省して、かくの如き榮譽に浴するものが、全國民中果して幾人あるかを考へられるならば、感恩の念も、奮起の情も自らにして起ることゝ考へます。洵に諸君の今日あるは偏へに、聖代の惠澤の致す所なるに想到し、聖恩の廣大無邊なるに感激し、愈々報國の念を深くし、國事に挺身し、同胞の儀表たらんとする覺悟を固くすべきであります。また生れて二十有數年、諸君の今日を成すに至る迄諸君を育て、諸君をして安んじて學窓に學ばしめるために拂はれた父母の日夜の心勞を省みて、その容易ならざる鴻恩に對し、報恩感謝の念を固め、十分に孝養を盡されたいのであります。古人も「ツレ樹靜ナラント欲シテ風止マズ。子養ハント欲シテ

親待タズ」と申して居ります。御両親共健在で、孝養を盡し得る人は洵に幸福であります。更に古人の所謂「身ヲ立テ道ヲ行ヒ名ヲ後世ニ揚ゲ以テ父母ヲ顯ヘス」といふ「孝ノ終」を完うすることが、諸君の將來の務めてなければなりません。その外過去の學窓生活に於ける師の恩、友人の誘掖、先輩の指導等、數へ盡し難い幾多の恩恵に想ひ到らば、それ／＼盡きせぬ感謝を捧げざるべからざる感情の切なるものがあるであらう。

實に諸君の今日の光榮は、諸君自らの辛苦の結晶たるに止まらず、國恩を始めとして、かくの如き幾多の恩澤の致す所であることを、先づ以て反省し、謙虛自戒して、まごころを以て今後に處するの心構へを致さなければなりません。この感恩、崇敬の誠を以てこそ、人は自らの私慾を去り、公に奉じて正しきを行ひ、大義の爲には生命を賭するの尊き精神を發揮するに至るのであつて、これ一切の創造、改善、發展の力の源であり、實にまた我が國民道德の大本たる眞の忠となり、孝となるのであります。國體と共に永遠なる我が忠孝の道について、諸君が實社會への首途に當り、特に心構へを新たにせられんことを切望する次第であります。

支那事變勃發以來既に四年、皇軍將兵が、幾多の艱難辛苦を克服し、陸、海、空に力戰奮闘、

大御蔭威の下赫々たる戰果を收め、國威を遺憾なく發揚せる、その武勳は洵に感激に堪へない所であります。而してその中には本學職員、諸君の同志者たりし卒業生、學生も多數あり、殊に名譽ある戰歿、戰傷の勇士も少くありません。我々は諸君と共に、これ等の各位に對し、衷心より感謝と敬意を表すると共に、護國の英靈に對しては深厚なる敬弔の忱を捧ぐるものであります。

中華民國に於ける東亞新秩序建設の機運は、我が提唱に共鳴せる新政府の樹立となり、日滿支三國間の關係を律すべき締盟の成立を見るに至つたのであります。なほ依然民族協和の大道を覺らず、只管抗日を續くるの勢力が残存し、無益の抗戰を續けつゝあるのであります。而して昨年大東亞共榮圈を安定し、以て世界の平和に資せんとする我が國不動の大國策樹立せられ、尋で日獨伊三國條約の締結せらるゝや、中國に於ける狀態と絡んで、國際情勢は一層複雑微妙を極め、その形勢眞に端倪すべからず、或は未曾有の國難が來るやも測り得ないのであります。否、恐らく國難は已に到來せるものと考ふる方が、正しい觀方でありませう。この難局を打開するに否とは、實に我が國將來の興亡、休戚に關する所でありまして、我等國民たるものは、渾身の力を揮ふてこれを克服してこそ、始めて赫灼たる光明の境地に到達し、我が國の世界史的使命を達

成し得るのであります。私は諸君が既に深くこの情勢を認識して居らるゝものと確信致します。今や諸君は直に社會の實務に従事せらるゝのであります。中には遠からず召されて兵役に服し、或は征戰に従ふの光榮を擔ふ方も少なからうと思ひます。諸君は學生時代を通じて、何時にても筆を投じ劍を執つて、勇躍國難に赴くの覺悟を固めたこと、信じます。一旦緩急あるの秋、戰を抛ち地位を棄て、身命を君國に捧ぐるは、これ正に泰國男子の本懐であります。諸君にして軍に従ふも、或は日常の職務に就くも、常にこの覺悟を、この決意を持して、眞に不撓不屈の努力を致されんことを祈るのであります。

今回卒業の諸君は、昨年にも増して就職の點に於て大に恵まれて居ることは、洵に慶賀に堪へぬ次第であります。これと同時に就職が容易であるといふが爲に、或はまた本學卒業生は、比較的世間から厚遇せらるゝの氣配が見えるが爲に、心驕るが如きことがあつてはなりません。また自己の一旦選びたる職業に對し或る所あつてはいけません。元來大學教育は必ずしも卒業後直に役に立つことを、目標としないのであります。故に、諸君が就職して後實務に携はるや、或は大學教育の効果につき、或は職業の價值につき、疑問を起すことあるやも測り難いのであります。

いふまでもなく大學の任務は、國家に須要なる學術技藝を授け、學術の基礎的教育と、人格の陶冶、國家思想の涵養とをなすにあつて、その目的を將來の大成に置いて居るのであります。大學に於ける學術の基礎的教育に基いて、自ら研鑽を重ね、國家に有用なる創造と發展とを具現することは、道義的精神、國家思想とは別個のものではなく、寧ろこれ等の精神を體得したる人格者であつて、誠心誠意を以てこそ、始めてこれをよくするを得るのであります。而して職業に就くことはそれが如何なる分野に於てにせよ、國家社會に何等かの地位を有し、その運営に參與することであつて、單なる一個人の榮利または榮達の手段ではありません。故に諸君は、たとひその職業が如何なるものなるにせよ、その職業に於て各自の職分を通じて國家の生成發展に與り、國家を擔ふ一人として公に奉ずる次第であつて、この精神を持つて、私情を捨て、最大の努力を以て職務に只管精進し、今日迄の學校生活に於て得たることを基として實際の経験を積み、以て將來の大成を期することこそ大學教育の精神を活かし、國家に忠なる所以であります。殊に高度國防國家の體制下にあつては、職業は個人の立場よりは國家の必要、時局の重大性に規制せらるゝことが大であります。諸君はこの點に鑑み、就職の後に於ても、大學令第一條の精神

を深く銘記し、その職に勵精し、職域奉公の誠を效せんことを切望するものであります。

今や我が國に於ては、現下内外の情勢の下、政治、經濟及社會のよろ／＼の機構の上に、新たな體制を建設することは蓋し必須のものであります。併しながら、新體制を稱するも畢竟、肇國の本義に基いて我が國本然の姿を顯揚し、國憲に格遵し、一億一心の協力態勢を整備し、高度國防國家を確立することに外なりません。個人が努力を怠つて全體の榮ゆべきことは不可能であります。如何に新たな建設の行はるゝにせよ、諸君が各人の分野に於て、國家の使命に伴ふ職責を自覺し、在來の人々にもいや増して、熱意と強き力をもつて各人の職業に盡すことこそ、その核心をなすものであつて、これ實に、新體制確立の目標である皇運を扶翼し奉ることに外ならないのであります。

更に諸君は専門の學術を修めたりとはいへ、漸くその基礎知識を學びたるに過ぎず、且つまた學術の深遠にしてその進歩の勢ひ測るべからざるものあるに鑑み、多忙なる社會生活の裡にあつても、常に時間を割いて、勉學、研究を進むるを以て、樂みとすることを切望致します。學術の専門化の勢が旺になると共に、諸君の視野が甚だ狹隘となるの弊もまたなしと致しません。學問

に於ける専門の領域たるや、學問全體の一部分であつて、それ自身孤立し、遊離して存在するものではありません。諸君はよく綜合的の展望を忘れてはならないのであります。これと同じく諸君の今から送るべき實社會の生活も、全國家、全社會の一部分たるに過ぎませんから、よく國家、社會の全面的觀察に努めねばなりません。更に進んでは世界の大勢に關して正しき見透しをなすことが必要であります。凡そこれ等は學を研ぎ知識を擴め、修養に努め、以て識見を高めてこそ始めて可能なのであります。諸君の大に努むるあらんことを祈る次第であります。即ち先覺の士に教へを請ふことを怠らず、友との交りに於て、また新聞、雜誌、圖書等の閱讀に於て、而してまた自己の考察、思索を通じて、想を練り思ひを潛め、修養に努め、以て識見を高むるに努められんことを切に望むものであります。而してこれ實にまた諸君の人格の向上を圖る所以であります。現下時局下に於ては、外部への關心と情熱とを要望せらるゝこと甚だ多いのであります。が、このことは諸君の内面的の力の充實を怠る必要とするものであり、諸君は職業への努力、學問の研究、修養に於て、益々眞摯にして深かるべきを要することを忘れてはなりません。そも／＼人の人として存在するのは、他人と何等かの關係に於て存在するのであり、他人あつ

てこそ自己あるのであります。諸君は今後の生活に於ても、よくこの理を稽へ、寤る暇に自らを反省し、自己批判に立脚して、廣き展望の下に行動すべきであります。各人自らの反省と批判とは、またその自覺となり自重となり、同時に他人に對する理解となり、同情となり、その尊重となる所以であります。かくの如くして人は他人の立場に身を置いて處するに至り、社會生活も何等支障なく營まれ、社會生活の根柢をなす正義、相互信頼、秩序、禮節、公德は皆これより生まるゝものといふべきであります。諸君はこの故に、社會の一員たる各人の任務と、價值とについて慎重に考へ、確たる人生觀、國家觀に基き自己の何たるかを眞に自覺し、自らを重んずると共に、他を重んじ、信念を固め、流俗に動かさるゝことなく、操守を嚴にし、しかも事にあたつては、千萬人と雖も吾往かん底の勇氣を持たねばなりません。

諸君の長とすることとの相異なるは、その面の異なるが如くであります。諸君は自らの長所短所に省察を加へ、その長を伸ばし短を矯むるに努め、他人の忠言を聴くに各かであつてはなりません。而して何事を爲すにも功を急ぎ、或は焦慮するが如きことがあつてはなりません。諸君はよく下積の勞苦に甘んじ、「縁の下の力持」たることに、眞の臣道實踐の意義を見られてあります。

う。古語に「艱難汝ヲ玉ニス」といふことがあります。隱忍自重以て職分に勤み切磋琢磨、勉めて修ます、以て實力を蓄へることが將來の大を成す所以であります。諸君はこの心掛を以つて常に正義を堅持し、信念に忠に、剛毅にして、潤達、明朗の氣象を養ふと共に、よく人を容れ、熱慮斷行、至誠以て終始するならば、如何なる大事をも成し得るものと信ずるのであります。

次に長年の學窓生活より實社會に出ると、生活様式の激變により健康を損じ、空しく中道に挫折するの例は世上尠くないのであります。精神の緊張と共に保健に留意し、進んで積極的に健康の増進、心身の鍛錬に努められんことを切望致します。

卒業生諸君、本日諸君を送るに當つて惜別の衷情洵に切なるものがあります。諸君は彼の世界大戦中、またはその直後に生を享け、ワシントン會議、ロンドン條約、滿洲事變等の動きの中に成長し、友那事變中に本學に入り、今次の歐洲戰爭中に、就中大東亞建設の大業が未曾有の大國策として決意せられたるの秋に、學窓生活を終る次第であつて、定めし感慨の無量なるものがあるであらう。洵に諸君の生れてから今日に至る過去廿有數年間の、世界各國の榮枯盛衰、時勢の變轉は、實に極りなきものがありまして、その裡にあつて、我が國の偉大なる發展は實に驚

異に値するものがあります。諸君は、その職分に必死の努力を致し、よくこの大業を成就せし先人苦心の跡に顧み、深く感謝を捧ぐると共に、本學に於て涵養せられたる堅實なる國家思想、陶冶せられたる人格及専攻せる學術の基礎の上に立ち、常に帝國の本義、萬邦無比の國體に深く思ひを致し、一身を顧みずして君國に報じ、公に奉ずるの決意を以て、現下國體の充服に邁進し、大東亞の建設、延いては世界の新秩序と平和建設とに力を致し、國運の隆昌を圖り、以て國家社會の、將また諸君の一門一家の期待に背かざるやう、最善を盡されんことを切望致します。私は茲に諸君の自重加餐を祈り、その前途を祝福し、以て別辭を致します。

入學宣誓式告辭

本日茲に入學宣誓式を舉行し、新たに入學せる諸君の宣誓をうけましたことは、私の欣快に堪へぬ所であります。幾多の英才中より選拔されて、入學の宿望を達した諸君を迎ふるを得て、私は衷心より御同慶の意を表すると共に、この機會に於て所懐の一端を披瀝し、以て大學生活の第一歩に於て、諸君の注意を喚起致したいと考へるのであります。

そも、入學宣誓式は、諸君をして入學當初に於て先づ大學學生たる本分を自覺し、將來國家の指導者たるの抱負と決意とを鞏固にし、自重自肅、以て皇運を扶翼し奉るの覺悟に徹せしめんとする所に、その目的を有するのであります。この式は、嘗ては本學の最も重要な行事の一つでありましたが、制度の改變によつてしばらく中絶して居ましたのを、その意義の重要なるに鑑み、本年から復興したのであります。しかのみならず本日の式に、家庭連絡者各位の御列席を請

ひ、學生をして、獨り私其教職員に對してのみならず、家庭連絡者各位の面前に於て、宣誓を行はしめることと致し、且つまた子弟入學の御役びをともにせんぞ致しました處、御多用中の折柄にも拘はらず、多数御列席下さいまして、この式の意義を一層深からしめることを得ましたのは、私始め今學の大に欣びとする所であります。

謹んで惟みまするに、我が國は萬世一系の 天皇相繼いで君臨せられ、君臣の本義は永遠に明かなるに共に、その間親子の如き情誼を湛へ、即ち「義は君臣にして情は父子なり」といはれる所以でありまして、君は子の如くに民を愛撫して訓へを垂れさせ給ひ、民はまた君に忠に、親を慕ふが如き至情を以て仕へ奉るに共に、家にあつては各自の父祖に孝を盡し、以て萬古不易な美風を發揮し來つたのであります。これ即ち我が國が家族國家たる所以であり、萬國に比類なき我が國體の精華であります。されば我が國の家庭生活に於ては、父子の情と義とを基として、親も子もその祖先を敬慕し、祖先の太宗たる 皇室に對し崇敬奉仕するの眞の忠に達し、爰に忠孝一本の道が具現せらるゝに至るのであります。故に家庭を離れては國民の教育はなく、如何に成人せる學生と雖もその教育にあつては、學校と家庭とは、密接不離の關係を以て協力して進むべ

きものと確信致しまして、今回新たに家庭連絡者の制度を設けたのであります。本學に於ては今後出來得る限り家庭との連絡を密にし、以て父兄のまごころを我々の心とし、また父兄は我等教職員の心をその心として、相寄り相助けて學生、子弟の指導にあたり、學生は師に従ふと共にこれを仰ぐこと親の如くし、教職員、父兄及學生渾然一體となつて一大家族たるの實を擧げたいと考ふるのであります。かくの如くなれば、我が國風の精髓である家族的精神は學園の内外に漲り、人間味豊かな人倫關係の上に、最も適切な最高教育が行はるゝに至り、且つ從來動もすれば陷らんとした個人主義の弊を矯めることとなるを考へます。家庭連絡者各位に於かれても、よく本學教育の精神を察せられて、今後十分の御協力を御願ひ致す次第であります。なほ式後、各學部長より種々の事項について、御懇談申上げることとなつて居ります。なほ今年から、卒業證書授與の際に父兄の方々を御招待することに致しましたのも、全くこの趣旨に基くものであります。

新入學生諸君、諸君は全第一に、謹みて「教育ニ關スル勅語」の 聖旨を奉戴することを、誓つたのであります。そも、我が國教育の根本が帝國の精神に淵源することは、今更申す迄もない所であつて、この精神を紹述し、我が國教育の準繩となし給うたのが、「教育ニ關スル勅語」

であります。尚にこの勅語は「古今ニ通シテ諸君之ヲ中外ニ施シテ皆ラス」と仰せられました通り、悠久窮りなき我が國の歴史を貫き、中外に光被して、人類の福祉と世界平和とに寄與すべき大業を昭示し給うた千古不磨の聖訓でありまして、永世に搖ぎない國體の精華に基く我が國教育の根本精神と、國民の履踐すべき大道とは、茲に炳として明かにされたのであります。この大訓の聖旨に副ひ奉り、その徹底、顯現を期することが、我等の務めでなければなりません。次に諸君は大學令の定むる所に遵ふことを誓つたのであります。大學教育の核心は蓋し大學令第一條に示されて居る通りでありまして、これに基き諸君は國家に須要なる學術の理論及應用の教授をうくると共に、常に自らの人格の陶冶と、國家思想の涵養とに、精進すべきであります。これ等は勿論教職員が全力を擧げて勉むる所でありますが、諸君自身が自ら進んで啓發するやう、心掛けることが最も大切であります。諸君は既に高等學校に於て、本學に於ける教育をうける素地を築いて來たものと信するのであります。諸君が諸君の母校を辱しむることなきを期待致して居ります。人格の陶冶と國家思想の涵養とは、第一條の後段に掲げられて居りますが、位置の前後によつて輕重はないのは勿論であります。我が國民の如何なる教育と雖も、その根柢を

人格の陶冶と國家思想の涵養とに置かぬものゝないことは、今更いふまでもありませんが、國家の指導的人材を育成する大學に於ては、特にこの點に重きを置くのであります。諸君は造次顧沛の間にも高潔、雄渾なる人格の陶冶と、國體の本義を體し、國家を重しとし、一身を輕しとして國家の隆昌を圖る精神の涵養とに努めなければなりません。即ち諸君は今日迄の教養の上に、今後教授せらるべき學術を通じ、或は教室の内外に於て教官に親炙してうける感化により、更に進んでは交友、讀書、思索等によつて修養をつむことに努力すべきであります。

一國の文化は一面國家の歴史的、傳統的なるものを繼承して益々これを發展せしめると共に、他方また板に新たなるものを攝取して、これ等を綜合融化してこそ始めて眞の生成發展を遂げ得るものであります。随つて我が國固有の學術を尊重すると共に、廣く知識を世界に求めることが肝要であります。但し外來の思想、學術、制度等を我が國にさり入れんとする場合には、徒らにその拘欄たる外殼、或は整然たる體系等に心を奪はるゝことなく、國體の本義に照しその根柢の謬りなきことを確かめ、然る後にこれを同化し、醇化することが大切であります。これには深遠なる學術の素養に加ふるに、慎重なる考慮を以てすべきでありますから、學生諸君は深く思を茲

に致し、自重自戒しなければなりません。團體に反するの思想の、これを根絶せしむべきことはいふを俟たない所であります。これと同時に、所謂全體主義思想もまた大に検討を要するものと考へます。國家主義思想と稱するものにして、單に抽象的であつてその行動に於て却つて日本精神に戻るが如きもの、或は獨善排他的にして矯激なるものは十分にこれを戒め、正を疑ひ中を執つて苟くも大義名分を認まることを切望致します。

諸君は、學術の權威から黨閥をうけるのでありますが、教授の本旨は學術の基礎知識を植ゑつけ、研究の方法、態度と精神とをよく會得せしめ、これを基として更に研鑽を重ね、一段の創造と發展とを期するにあつて、即ち諸君自らの啓蒙力を培ふことに重きを置いて居るのであります。蓋し本學傳統の精神は、卒業後直に職業に従立つことを自途とするものでなく、本學に於て育成せられたる教養の上に、研鑽と經驗とを加へ、以て他年の大成を期するにあることを銘記せられたいのであります。更に轉近學術の進歩に伴ひ、専門的分科の勢が愈々旺なのであります。が、これ等を高い見地から綜合することは、専門の堂奥を極める上にも、また識見を増して將來の大をなすためにも極めて必要であります。而してこのことは、常に専門外の教養を心掛け、こ

れを身につけて、始めて可能となるのでありまして、綜合大學の長所は實にこの點にありと信じます。併しながらこれ等は、専門の深くして學術の進歩の急なれば急なるほど、言ふは易けれど行ふことの難いのに鑑み、私は諸君が大に勵み努められんことを期待するのであります。昨年から本學に全學講義を設け、人文科學の學生に自然科學の講義を、自然科學の學生に人文科學の講義を聴かしめることゝ致しましたのは、全くこの理由によるのであります。

學科の外に教養があつて、諸君は必ずこれをうくべきことになつて居るのであります。諸君はこれによつて益々心身を鍊り、一旦緩急あらば筆を投じ劍を執つて義勇公に奉ずる覺悟を固むべきであります。更にまた本學年より設置せらるゝ東京帝國大學特設防護團の一員として、諸君は事有るの日内は大學を護り、外帝都の教授に赴くべきであります。

諸君は今日本學に入つて、こゝに五千の教職員、八千の學生を擁する學園の一員となられたのであります。が、かゝる龐大なる學園に於て、その道徳的水準を高め、教育を完きものと爲すためには、是非其嚴肅なる一定の秩序なしには不可能のことです。諸君は秩序の維持を、常に學則または外部的の規律に服従するを以て終れりせず、禮節を重んじて上下の別を辨へ、相互

に信頼して親和協調し、我等の學園をして、和氣溢るゝ一大家族となすに努められんことを望むのであります。なほ學外に於ても、諸君が最高學府の學生として、進んで社會公德を實踐し社會に範を示されんことを祈る次第であります。

本年度より在來の學部會、運動會等の學内諸團體を再組織し、全教職員、學生生徒を打つて一丸とした新組織を作り、東京帝國大學全學會と名づけたのであります。これは只今述べた全學一家族の精神により、師弟一體となつて一致團結を圖り、事業を通じて自己が全體の一員としての自覺を深くし、全生活に互る教養を高め、心身を鍛鍊し、統制ある集團的訓練を實施して、高度國防國家の確立に貢獻するを目的とするものであつて、諸君の全員がこれに入會すべきことに致してあります。即ち教室に於ける教育と相俟つて、諸君の國民的性格の鍊成と指導的人物となるの基礎を築くためのものに外ならないのであります。

昨年十月、天皇陛下には畏くも學事御獎勵の思召を以て本學に、行幸遊ばされたのであります。陛下には戦時下御政務極めて御多端の折にも拘はらせられず、運動場に於て特に全教職員、全學生生徒の奉迎を受けさせ給ひ、尋で長時間に亘り、學内各般の事項につき、天覽の榮を

賜はり、諸君の先輩たる代表學生の實驗及製圖をも、天覽あらせられました。教育學術に垂れさせ給ふ、大御心の程はたゞ、感泣の外なく、全學一同恐懼感激、皇恩の厚きに酬い奉らんと思ふ努力致して居る次第であります。諸君は諸君の大學がかくの如き榮譽をうけたることを深く肝に銘じ、行住坐臥、苟もこの榮譽を辱しめることなきやう努むべきであります。

諸君の今日あるは、諸君がよき素質を享け、よく努め、また健康にも恵まれたるが故であるに相違ないのであります。併しながらこれ畢竟聖代の恩澤に外ならぬのであります。諸君は非常時下の今日安んじて學術に専念し得ることに思を致し、無窮なる皇恩に酬い奉らねばなりません。更に襁褓の裡より諸君を日夜苦心養育せられた父母の恩は、筆舌につくすを得ないものがあり、また諸君が物心ついてより今日に至るまで、啓蒙薫化につくされた恩師先輩、互に切磋琢磨した朋友等に想ひ到らば、心からの感謝を捧げずには居られなないであります。殊に天賦の才能、健康に於て敢て諸君に劣ることなきも、諸君の如く恵まれた條件を缺くが故に、可惜有爲の材を抱きながら、勉學の機を得なかつた多數の人々に思を廻らせば、報恩、感謝の念の自らに生ずるを覺えることゝ信じます。諸君と同年輩の多くの人々が、召されて征戰に従ひ國防の第一戰

を擔當し、或は骨を異域に埋めた人々の上に深く思を致し、心からの感謝を捧げねばなりません。殊に護國の英靈に對しては、衷心より哀悼の意を表すると共に、誓つてその遺志の達成に努むべきであります。私は諸君が報恩の念を固くし、責任を重んじ、諸君に對する國家の至大なる期待に鑑み、只管努力せられんことを望むものであります。洵に感恩、崇敬の念と、至誠の心こそ、實に人間人格修養の中心をなすものであります。

今や興亞の大國策は既に確立せられたりといへ、前途測るべからざる幾多の難局が横ばり、加ふるに國際情勢は愈々複雑を極め、その歸趨の如何は眞に豫斷を許しません。この混沌たる動亂の世界に於て、先づ東亞共榮圈を安定し、延いては各國家、各民族をして、各々その處を得しめ、共存共榮の世界を具現し、世界永遠の平和を確保すべき不易の新秩序を建設し、皇威を四海に光被せしむるは、これ實に我が國の世界史的大使命であります。併しながらこの使命の達成たるや、洵に容易の業ではなく、殊に最近の世界情勢の推移は國歩の艱難益々甚しきものを加ふるに至り、この難局を打開するに否やは、實に我が國將來の興亡、休戚に關する所であつて、我等國民たるものは一大覺悟と渾身の努力を以つてこれを克服しなければなりません。國家が諸君

の努力に期待すること極めて大なる所以であります。

私は諸君が今から本學に於て學ぶにあたり、徒らに入學の悦びに耽り、これに溺るゝが如きことなく、深く現下内外の情勢を洞察し、諸君の本分と使命とを自覺し、不斷の努力によつて、一段の向上を図り、國體の本義に徹し、國家有用の材たるべく、眞に根柢ある至誠の人格を鍊成し、高邁なる識見を持して、寛宏にして節度あり、剛毅、潤達にして進取の氣象を養ひ、唯今茲に宣傳せる通り負荷の重任に應へんことを切望して已まないであります。

諸君が本學に學ぶについての必要なる心構へ及心得等に關する詳細に互ふことは、後刻各學部に於て、學部長より指示することになつて居ります。私は大綱につき諸君の留意を促し、諸君の健康を祈り、以て今日の告辭と致します。

記念日祝賀式々辭

本日本學六十四周年の記念日を迎ふるにあたり、教職員、學生諸君と一堂に會して祝賀の式を
舉げ、所懐の一端を披瀝することを得ますのは、私の洵に欣快とするところであります。

先づ私は諸君と共に謹みて、聖壽の萬歳を壽ぎ奉り、賀祥の無窮を頌し奉ると共に、爛榮え行
く皇室の御繁榮を祝し奉る次第であります。

畏くも、天皇陛下に於かせられては、事變下格別御多端なる御政務に日夜御精勵遊ばされ、時
局に對し深く御軫念あらせらるゝと洩れ承り、洵に恐懼感激に堪へません。我等は益々奉公の誠
を竭し、宸襟を安んじ奉らんことを期すべきであります。

顧みまするに、昨年は紀元二千六百年を迎へ、生を皇國に享け、この盛代に逢へるの感激に浸
りましたが、同時にまた「教育ニ關スル勅語」頒發五十年にあたり、且つ大東亞共榮圈を確立

する不動の大國策の樹立せられた海に意義深い年でありました。これと共に本學にござりまして光榮限りなき年でありました。即ち 天皇陛下に於かせられては十月八日、畏くも學事御獎勵の思召を以て本學に 行幸あらせられ、特に運動場に於て全學教職員、學生生徒の奉迎を受けさせ給ひ、前後實に六時間の長きに亘り、天機殊の外麗しく御巡覽遊ばされ、本學の誇とする研究業績をはじめ、代表學生の質験、製圖の作業さへ、天覧の榮を賜はつたのであります。教育學術に輝かせ給ふ 大御心の程畏しきも畏く、眞に感激の外ありません。これ實に本學として二十幾年振の盛事でありまして、我等は齊しくこの光榮に感奮し、無限の感激を胸にして全學を挙げ和衷戮力、愈々その本分を盡して 皇恩の萬分の一に報い奉らんことを誓つたのであります。爾來その熱誠の各方面に現はれ、眞摯なる努力の見られますことは、私の衷心より欣びとする所であります。今日、當日の光榮を思ひ出してすたただ／＼感激に咽ぶ次第であります。

今や興亞の大國策は茲に樹立せられ、日支事變を完遂し、大東亞共榮圈を確立し、延いては世界永遠の平和を建設せんとする大事業は著々として進捗しつつありますが、重慶政府の迷夢は未だ醒めず、國際情勢の推移は複雑にして變轉極まりなく、國歩の艱難眞に甚しきものがあります。

226

す。しかもたゞこの國難を突破してのみ、始めて永遠の平和に到達し得るのであります。我等國民たるもの心を一にし不退轉の覺悟をもつて時局に對處し、希望と確信をもつて、概に建設者たるの態度を失ふことなく、二千六百年來培はれたる傳統の力を發揮し、如何なる苦難をも耐へ忍んで各人その本分を盡し、國運の興隆に努めねばならないのであります。

五年に亘る聖戰に於て、我が忠勇なる皇軍は、陸、海、空に力戰奮闘し、大御稜威の下赫々たる國威を輝かして居ります。我等はこの武勳に感激措く能はざると共に、その勞苦に對して衷心より感謝を捧ぐる次第であります。これ等從軍の將兵の中には本學の出身者、奉職中の職員、また在學の學生もあり、しかもその中の幾人かは名譽の戦死を遂げられたのであります。私は諸君と共に、異境に骨を埋めたる英靈に對しましては、衷心より哀悼の忱を捧げ、また傷痍の勇士に對しましては、その快復の一日も速かならんことを祈り、遺族各位に對しましては、心からなる弔意と感謝の意を表するものであります。本學に於ても、附屬圖書館内の一室に本學關係戦歿者の英靈を祀り、忠魂を永へに傳へ、遺烈を繼繼に留めんと、目下準備を急いで居るのであります。

過ぎし一ケ年間に於て、淺野、有坂の兩名譽教授が薨去せられ、また在官中の醫學部奥教授及工學部の山内教授が遠逝せられました。これ等の方々には或は學界の耆宿であり、或は各學科の泰斗として本學の誇りとした所でありまして、中にも奥教授は長くも昨秋、行幸のみぎり、その研究につき、天覽を賜はり、御説明の榮譽を荷ふことゝなつて居りました處をその光榮に浴せずして逝かれたのであり、また山内教授は造兵學の權威であつて、時局下、教授の蘊蓄とその研究に期待するもの愈々大となつた折柄に逝かれたのであります。かくの如き諸大家を喪つたことは、洵に邦家のため痛惜の至りに堪へぬ所でありまして、私は諸君と共に深厚なる哀悼の意を表するものであります。

去る三月十九日工學部谷村教授が退官せられ、三月三十一日には定年の故を以て、工學部田中、山内兩教授、文學部加藤、藤懸兩教授及農學部、學部長蘭部教授、木村教授が退官せられました。これ等の方々の方々の學術研究に於ける、將また後進の育成に於ける、或は行政上の功績は、我が國、學界に遺された學績と共に洵に偉大なるものがあります。私はこの機會に於て各位の學勤と本學に盡された多年の功績とに對し、本學の名に於て満腔の敬意と感謝とを捧ぐると共に、各位の御

自愛を祈り、今後もなほ後進に對する指導と誘掖とを惜まらるゝことなく、邦家のために盡されんことを切に望むものであります。

過去六十有餘年の歴史を有する本學は、今日に至る迄既に六萬有餘の卒業生を國家社會の各方面に送り、我が國の指導者層の多くは、これら本學出身者によつて形成されて居るのであります。國運の興隆に寄與すること洵に大なるものがあるものであります。學術研究に於ても、本學は本邦最高最大の學府として、時代の進運を指導してよくその成果を挙げ、愈々精彩を加へつてあります。また時局下國家喫緊の事項については學内に於ける研究はもとより、學外に於ても官私各方面に亘り多數の重要な研究に關與し、多大の貢獻を致して居ります。傳染病研究所、航空研究所、地質研究所及天文臺等に於ても齊しくその研究及事業を通じて時局に協力し、著しい寄與をなしてあります。併しながら國家社會の要求と學術の急激なる進歩とに應じ、講座の増設、諸施設の新設乃至は擴充を要するものが多々あるのであります。この方面も著々實行致しつつあります。

昨年度に於て、工學部に放射線工學、農學部にバクテリ學、木村化學、經濟學部に經濟統制論の三

講座が開設され、本年度には醫學部に藥品分析化學、農學部に畜産製造及食品化學並に工船漁業學の諸講座の新設を見る豫定であります。

海南島に於ける熱帯森林の研究は著々その緒について居ります。

本學の營繕事業については、工學部第三號館は殆ど竣工を見、工事中の重なるものとしては、附屬醫院外科病室、理學部第一號館、農學部第三號館及航空研究所の擴張等があります。工學部綜合試驗所及風洞は何れも昨年全く工を竣へ、目下大にその機能を開揮しつつあります。また昨年より四年間に亘り譲渡を受けることとなつた隣接の淺野侯爵家土地は、昨年その四分の一に當る三千六百餘坪を購入し、以下豫定通り進捗のこととなつて居ります。

綜合大學の特色は、それ／＼専門に分化せる諸學科を包括する諸學部が、更に一段高い體系に統制せられ、各分科相互に密接なる聯關を保つことによつて、學術の研究に於ける専門的分化と、高次の綜合といふ一見對蹠的のものとを相互補足的の關係に於て統一しつゝ、眞の學術の發達を圖るにありと考へます。今や全學にこの機運の益々旺に動きつゝあることは、明かに看取されるのであります。學生諸君の學修に關してもまたこの精神を採入れてあるのであります。更にこ

れを強化して、一段の綜合的教養を與へ、識見を高らし、眞に綜合大學に學ぶの實を擧げしめんがため、昨年度より全學講義を開設致しました處、我等の前期に達はず良好の成績を擧げつゝありますことは私の欣びとする所であります。

從來我が國の大學に附置せられた研究所の大多數は自然科學方面のものでありましたが、由來文化の進歩は諸種の領域が相關聯して始めて成果を擧げ得るものであつて、學術に於ても自然科學と人文科學とは鳥の兩翼の如き關係にあり、一方のみの偏重は蓋し一國文化の正しき進展を圖る所以でないこと、いふを俟たぬ所であります。而して東洋文化に關する研究の促進は、最近の國際情勢に鑑み、殊に大東亞其榮國の確立せられんとする今日、眞に喫緊の要務といはねばなりません。この目的を以て本年度に、本學に東洋文化研究所を設立せらるゝこととなり、その準備も著々進捗致して居ります。本研究所は主として人文科學の領域から東洋文化の綜合的研究をなすものであります。必要に應じ自然科學方面の参加をも豫期して居るものであります。將來全學的の綜合研究を行ふものにまで進展せしめんことを期待致して居ります。これが今後我が國と東亞及南洋諸國との親善に力を致し、大東亞新秩序の建設に寄與すること大なるべきを確信す

るのであります。

本學は毎年二千有餘の卒業生を世に送りつゝありますけれども、何れの部門に於ても人を要する
こと益々急でありまして、殊に國防及生産力擴充に伴ふ指導的技術者の必要は、愈々急を告げる
に至り、これが對策は現下の最も緊要なる問題の一つであります。本學はこの急に應ずるため、
さう敢へず十四年度、十五年度に於て自發的に、工學部學生の臨時増員を行ひ來つたのでありま
すが、これは要するに一時的應急處置に過ぎません。しかも技術者の不足は益々甚しく、もしそ
れ大東亞建設の明日を慮りますならば、蓋し技術者の補充は國策の最先端にあつて然るべきもの
と考ふるのであります。更にまた科學振興の國策に應ずるためにも、またしかあるべきものであ
りまして、科學振興調査會もその必要を決議し當局に建議致して居ります。本學はこの國家の急
に應へんがため、新工學部の急造創設を決定し、以て速に多數の優秀なる卒業生を國家に送るこ
この計畫を鋭意進めて居りました處、追加豫算が成立し、國費千二百七十餘萬圓を以て本學に第
二工學部を設立することに決定せられたのであります。新工學部は十學科、六十數講座より成
り、毎年の入學者定員は現在工學部の三百三十九名に對し四百二十名たらしめる規模のものこ

し、本年より四年間を以て完成する豫定になつて居りますが、我等は茲に多大の困難を覺悟しつ
ゝ、明年四月には定員通り入學せしめんとして、目下極力準備を進めて居ります。併しながら一
年間で土地を求め、建築及設備を行ひ、殊に必要な教職員を整へますことは洵に至難の事業で
ありますから、私は全學力を一にしてこれを達成し、新學部をして現工學部に匹敵し、更に清新
味の加はつたものに致したいと熱望致して居ります。これにつきましまして私はこの際、その敷地が
千葉縣及千葉市の協力によつて、千葉市新市域内にある北方郊外に定まつたことを發表し得るの
を幸と致します。地所は廣袤十四萬餘坪、土地平坦、海に近く、交通、衛生その他四圍の状況等
良好であり、且つ千葉市が近く工業都市たらんとして築港事業の一部の既に開始せられた等の事
實に鑑み、更にまたその他諸種の事情等をも綜合致しまして、第二工學部の最も適切なる敷地と
してこれを選定致したのであります。現在の交通系統を以てしては本學より約一時間十數分を要
しますが、逐つては多少短縮されることゝ考へます。なほ地元たる縣及市當局は保健、教養等
の點から周圍の地域を學園の環境として遺憾なからしむるやう計畫、準備を進めることになつて
居り、また交通、上下水道、電氣瓦斯及防風林等を始め教職員、學生の居住等に至るまで適切な

施設を行ひ、その他諸般の便宜を供することゝなつて居ります。なほ私は縣及市が、本學部創設についてのみならず、永く將來に互り多大の好意を以て、直接間接にこの學園に對し、便益と援助を與へられることを確信致して居ります。私は茲に縣及市の特別の御協力に對し、厚く感謝の意を表する次第であります。

昨年、本學は紀元二千六百年の奉祝記念事業として、本學を中心とする學術の發達及現状の全貌を大觀し得る如き記録を編纂出版することゝしたのであります。これを「東京帝國大學學術大觀」と名づけ、各學部、各研究所及天文臺に於て、それらの事項を分擔執筆することに致しました。これは眞に出版せる「東京帝國大學五十年史」の姉妹篇と見るべきものであつて、大體原稿も出來し、不日上梓の運びとなつて居ります。本書出版の曉には學術日本の發達及現状の略全貌を窺ひ知ることを得、我が國學術の振興に大に貢獻するものと信ずるのであります。

次に本年四月の新學年より新たに實施したものは種々ありますが、第一に入學宣誓式で、家庭連絡者の制度とを擧げることが出來ます。前者は即ち學生の入學の感銘を一層深くし、學生たるの自分を自覺せしめ、最高學府に學ぶに當り、今後の決意と覺悟とを鞏固にせしめる所以のもの

であり、嘗て本學に行はれた所のものを復興したものであります。後者は我が國の國民道德の大本たる忠孝一本の道を、本學教育に具現せんとする意圖よりしたものであります。蓋し我が國は皇室を宗家と仰ぐ家族國家であつて、家庭に於ける孝の道は、同時に我等國民全家族の大宗家にあります。皇室に對する忠となるものであります。されば忠孝の道を體得せしめんとする教育は、家庭より遊離せる害のものではないのであります。私は家庭連絡者の制度により、學園と家庭と緊密不可分の連絡を保ち、教職員は父兄の心を心とし、また父兄は教職員の心を以て己が心とし、渾然一體となり、家庭と學園とは一家族をなすことゝなつて、學生は師を仰ぐこと親に事ふるが如くし、また親の心を體して勵み勉め、これによつて情味津津たる人倫の上に、最も適切なる最高教育が行はれ、學園内に忠孝一本の道が活かされるのを期待致して居るのであります。

次に今回東京帝國大學全學會及東京帝國大學特設防護團を設立致しました。即ち全學會とは、全學教職員、學生生徒を網羅して一體とせる新組織でありまして、これは學生の全生活を通じて、師弟俱に愈々心身を鍛へ、教養を高め、在來我が國民に於て甚だ缺如せる嫌のあつた所の統制ある集團的訓練を實施し、全員の一致團結と相互協力とを強化し、一層國民的性格の鍊成に努め、

高度國防國家の確立に寄與せんとするものであります。また防護團は非常の際に於ける實際警防に従事せしめんとするものであつて、平素より訓練を実施することにより、集團的精神を涵養すると共に、一朝事ある際は獨り學内のみならず、學外への警防にも應援し、またそのために本學各専門の權威を擧げて、防空上必須の事項に關する研究の成果を、最も有効に活用することを攻究し、一般防空方策の確立にも資せんとするものであります。全學會には農耕部を設けましたのは、檢見川運動場の一部を名實ともに具はる立派な農場たらしめ、重大時局下の食糧増産に寄與すると共に、全學一體の勤勞を通じて集團的訓練を行はんとするに由るものであります。

次に學外國體にして、政治的色彩あるもの及政治的實踐性を有するものへは學生の参加を禁ずる規程を設けたのであります。近時往々學園生活を政治にまで延長し、學生自らの力によつて政治の途をひらかんとする主張を耳にするのであります。併しながら學生時代の實踐は、専ら全力を盡して學業に勵み、心身の修練に努め、識見を高うすることにあつて、學業を餘所に政治運動に携はることではありません。若し學生の政治的實踐なるものありとせば、これは學園にあつて國家の意圖に服従し、只管勉學に努め、國民としての道を修め、以て他日の大成を期するの基礎

を養ふべきであると信ずるからであります。

茲に本學に設けました、大學制度臨時審査委員會は、諸般の事項に互に慎重審議を盡したのでありますが、委員各位の熱心なる御努力により豫定の事項に關する審議を終りましたので、これを解散致しましたが、審議の結果中本學限に於て實現し得るものは、著々實施しつつあります。全學講義、研究生制度等は即ちその一二の例であります。また他方これを教育審議會及文部當局の參考に供しましたが、昨年教育審議會に於ける高等教育に關する件の答申中「大學に關する要綱」の決定には有力なる資料となつて居ります。私はこの機會に於て委員各位の多大なる御努力に對し、感謝の意を表する次第であります。

教練は一昨年來學科の一部に代ふるに、術科を以てすることゝなつて居り、更にその術科は野營教練によつて代へることゝなつて居りますが、爾來その成績は甚だ良好であつて、私は今後これに益々重きを置きたいと考へます。

本學學生の思想は中正、穩健であつて、各自十分に時局を認識し、報國の念に燃え孜孜として學に勉め、その本分を竭すことに精進しつつあると認めます。たゞ尚に遺憾なことには、極めて

少数ではありますが、或は思ひべき思想に感染せざるやに疑はるゝものが今なき跡を絶つに至らないのであります。私は全學的協力によつて、かくの如き不祥事を根絶せしめんことを期するものであります。

學生の健康については近來十分に留意せられ、また本學内に於ける保健衛生の設備も漸次整備せられ、學生諸君の自覺と相俟つて漸次良好となりつゝあります。私は全學會の活動によつて更に一段の向上を見んことを期待致します。

要するに過去一ヶ年を顧みますに、全學一體となつて、よく國家の動向に即應し、著々として使命の達成と、學園の振興とに精進しつゝあつたといふことが出来るに確信致します。併しなから前に述べた如く、時局は愈々緊迫し、國歩の前途至大の艱難が横はつて居りまして、我等の使命は愈々重大となりました。私は振つて本學の使命達成に邁進し國家の附託に應へんことを諸君と共に誓ひたいと存じます。

そも／＼大學に職を奉ずるものゝ使命は歸する處、國民としての眞の自覺の上に、國家の歴史と現状及動向と理想とにつき確たる認識と識見とを拂しつゝ、學術の蘊奥を究め國家に貢獻する

と共に、その成果を教授し、學術を通じて、或は教室内外に於ける人格的接觸によつて、國家有用の人材を育成するにあると信じます。されば大學は國家最高の智能であり、國家の理想を實現する方途を生む源であるといはねばなりません。随つて大學に於ける學術蘊奥の攻究は、深遠なる學識と不斷の勵精、獨創的思考とを必要とし、更に眼界を廣くし識見を高うして、常に高度の綜合的立場に立つを忘れる、眞に國家の理想を實現せんとする熱意に燃え、よつて以て始めてこれをよくするを得るのであつて、かくの如くしてこそ大學は眞に國家の附託を完うするものといふべきであります。

以上申しましたやうに、大學が鬱然たる學術の淵藪であると同時に、人格の陶冶と國家思想の涵養とを定からしめるためには、私は大學全體が我が國人倫の道を根柢とする、情操の豊かな雰囲気の中に生きることが最も大切であると考えるのであります。精神教育を強調することの必要なのはいふまでもない所ではありますが、若し情操を無視し、活動進歩の源泉である人間性を没却せる抽象的觀念の教育に終はるが如きことあらば、眞の人を作る所以ではありません。私が昨年大學を一大家庭と考へるとき、大學の自治の精神も家族精神に基づかねばならぬことを力説

致したのも、要するにこの理由からであります。また今年から卒業證書授與の際に父兄を招待しましたこと、或は家庭連絡者制度を設けたこと、更にまた入學宣誓式を復興して家庭連絡者の列席を求めましたこと等、皆この精神によるものに外ならないのであります。全學會の使命の一つもまたここに存するのでありまして、鍛錬部の事業として農場に土に親しみ協同の作業を通じて勤勞の悦びを味ふが如き、或は近く實施の運びとなつて居ります教養部の映畫會等も、その例であります。私はこの學園の雰囲気津々たる情味が加はり、美はしき實を結ぶに至らんことを衷心切望する次第であります。

近時科學の振興が強調せらるゝのは當然過ぎるほど當然といつて然るべきものと考へます。何となれば、我が國が高度國防國家にならんとし、更に進んで大東亞共榮圈を確立せんとする有史以來の大國策の遂行にあつては、我が學術の飛躍的發展に依つ所なければ不可能であるからであります。随つて大學の使命は愈々重大となつた次第であります。

我が國の學術は、維新以來短時日の間に實に驚異に値する發達を遂げたといへ、これを世界の水準に照すとき、なほ未だしの感あるものが決して少くないのでありまして、若し國民中、我

が學術は外國に學ぶものなし等と考ふるものありとせば、蓋し非常なる偏見といはねばなりません。元來文化そのものは國民の特殊なる歴史的傳統を地盤とすることなければ、徒らに他國文化の模倣、修得に終り、眞の國家の自主的發展を見ること不可能であると同時に、他方新なるものゝ攝取、醇化がなければ傳統も固定し、萎縮するを免れないのであります。ましてや、外國に於ける學術の進歩は益々急でありますから、一日も注視を怠つてはならないのであります。我等はよく我等の傳統を基本として、これに生きることにまた、常に新なるものを採り入れて、これを成長し發展せしめなければならないのであります。これ私が常に、我々は國體の本義が我が國政治、經濟、社會及思想上の根本であり、最大事實であることを體し、何れの部門に於ても我が國固有の學術を益々尊重すると共に、廣く知識を世界に求め、十分にこれを研究し、我が國體精神に照して取捨し醇化して、以て我が文化を生成發展せしめ、更に綜合的文化の創造に努むることの必要なるを力説する所以であります。

今や緊迫せる國際情勢の下に於て、皇運を扶翼し奉り、國運を隆昌ならしめんがために、我が國本然の姿を顯揚し、一億一心の協力態勢を整備するやう、高度國防國家が確立されんとするに

四二
あたりまして、政治、經濟及社會のあらゆる機構の上に、新たな體制の建設せらるゝことは必然の勢であります。而して新體制の精神は、從來各方面に箇々別々に存在して居た機構を、できるだけ限り共同の目標に向つて邁進せんとする協力體制に組織し、これを一元的に統制、指導して、奉公の誠を竭さしめんとするにあるものと考へます。随つて、新組織による國家奉仕の効果は、在來のものに比し大いに優るものでなければならぬのであります。舊體制が幾多の缺陷を有するにせよ、その機構の下に各人の各分野に於ける創造の努力が、我が國に於て高度に發揮し得られたことは否むべからざる事實でありまして、明治以降近世我が國の偉大なる發展は、その重なる理由をこの事實に歸すべきであると考えざるを得ないのであります。故に新組織は各人がその分野に於て、國家の使命に伴ふ自己の職責を自覺し、在來の人々にいや増す所の創造の努力を以て、その職務を盡し、よくその長を伸ばし得て、しかもこの創造の努力が、最も有效なる國家奉仕となるが如きものでなければならぬと考へます。

私は大學に於ての新たな組織或は改革もまた總てこの精神に基いて導かざるべきものと信じます。過去一ヶ年に於ける新施設について、前に申述べました所のものも、この趣旨によることに

234
努めたのであります。私は、皇運扶翼臣道實踐の道は、如何なる時と處たるかを問はず、國家に對する各自の使命の自覺と、職分奉公の誠を竭すことにありと確信する次第であります。

本學卒業生が國家、社會の何れの部門に於きましても、常に各階層に於て重きをなし、如何にその思想、言行、實績が、國家社會の動向を定め、國運の進展に關することの大なるかは、今更いふを俟たない所であります。故に、凡ゆる方面に何等かの革新を必要とする大轉換期の今日に於て、つらく、世相に鑑みまするべき、私は本學に於ける教育の責任の愈々重大であることを痛感致しまして、眞に胸の痛むのを覺ゆる次第であります。教職員各位、學術總興の攻究と人材の育成、この兩つの重大なる職分に對し、時局下、更にこの上ながらの御盡瘁を切に祈る次第であります。

學生諸君、諸君の本分は國家有用の材たるべく他日の大成を期するにありまます。諸君は常に『教育ニ關する勅語』及び『青少年學徒ニ賜はりたる勅語』の聖旨を奉戴し、學修に精進し、心身を鍊磨し、進取の氣象を養ひ以て負荷の重任に應へんことを期するに足る素地を作るにありまます。今や世局の重大なることは古今に絶するものがありまして、國家が諸君に期待する所今日

より切なるはないのであります。諸君はよく現實の情勢を直視し、諸君の責務の重大なるに深く思ひを致さねばなりません。諸君は今日の時局に於て安んじて學業に没頭し得らるゝことについては、申すも畏きことながら、皇恩の辱さを肝に銘じ、よろしく皇國の前途に思ひを致し、何時にても筆を捨て、劍を執つて勇躍國難に赴くの覺悟を固めつゝ、自奮自勵、よくその本分を盡されんことを切望致します。

全學教職員各位並に學生諸君、時局は愈々重大であります。我等は、悠久にして窮りなき國體の本義に徹し、世界に誇るべき萬世一系の皇室に對し奉り尊崇敬愛の念を増ふと共に、常に一身を君國に捧げ、公に奉ずるの覺悟を養ひ、聖旨を奉戴して粉骨碎心以て各人の本分を盡し、この難局を打開して國恩の萬分の一に報い奉らんことを期すべきであります。これを以て今日の式辭と致します。

以印國代勝寫

總長 平賀 讓述

告辭及式辭

昭和十七年

東京帝國大學

236

目次

一、入學宣誓式告辭(四月一日)	一
一、記念日祝賀式々辭(四月十二日)	一五

入學宣誓式告辭

本日茲に入學宣誓式を舉行し、新入學生諸君の宣誓をうけましたことは、洵に欣快に堪へぬ所
であります。私はまづ諸君と共に、乾坤一擲の大東亞戦争に於て、大御凌威の下前古無比の大勝
を博し、國威を世界に輝かせる皇軍將士の赫々たる武勳と勞苦とに對し、衷心より感謝と敬意と
を表するものであります。今や未曾有の戦果と共に、新たなる世界歴史の黎明は始まり、世界新
秩序の建設は硝煙の間より既に著手せられつつあります。國家の人材を要すること今日より急な
るはありません。この秋に當つて全國幾多の英俊の中より選拔され、入學の宿望を達した二千八
百十三名の新入學の諸君を迎へ、私は諸君に御祝ひを申し上げると共に、聊か所懐の一端を披瀝
し、以て諸君の注意を促さんとするものであります。

新入學生諸君、本日は諸君が我が國將來の指導者たらんとする抱負を懷いて、各自の志す専門

二
の領域に於て學を修めんとする、その第一歩を踏み出すの日であります。この晴の首途に於て、
全學教職員と一堂に會し宣誓の式を挙げ、畏くも聖旨を奉戴し、皇運扶翼の決意を愈々鞏固に
し、大學令の定むる所に遵ひ學術を研鑽し、身心を練り、負荷の重任に應へんとするの覺悟に徹
せんことを誓ふは、洵に意義深きことであつて、諸君の感銘もまた一入と信ずるのであります。
されば本日、宣誓は當に本學教職員のみならず、本學と一體となつて諸君の育成に協力せられる、
家庭連絡者各位列席の下にこれを行ふこととし、且はこれによつて子弟入學の御悦びをも共に致
したいと考へました處、家庭連絡者各位には御多用中にも拘らず、かくも多数御列席下さいまし
て、この式をしていやが上にも意義あるものとなすを得ましたことは、私はじめ全學の大に欣び
とする所であります。

諸君で惟みまするに、我が國は、畏くも萬世一系の皇室を宗家と仰ぎ奉る、一大家族國家であ
りまして、君に對する忠はまた父祖に對する孝となり、家庭生活に於ける父祖への孝は祖先の大
宗たる皇室に對し奉るの忠に達し、君臣の本義は永遠に明かなるに共に、その間親子の如き情誼
を湛へ、忠孝一如の美風を育し來つたのであります。これ洵に萬古不易の我が國體の精華であり

ます。而して我が國の教育は先づ何よりも、この家族國家の核心をなす忠孝一如の道を如實に體
得せしむるを、その第一義とすることゝなされてまいりました。されば家庭生活と離れた國民の教育
はなく、如何に成人せる學生といへども、その教育にあたつては、學校と家庭とは渾然一體とな
つて、何等隔てなき協調、協力に於て進まねばならぬのであります。これ本學に於て家庭連絡者
の制度を設けた所以であります。私はこの制度を活用して、できうる限り家庭との連絡と協力を
を密にし、以て父兄のまごころを我等の心とし、また父兄は我等教職員の心をその心とし、學生
をして師を仰ぐこと親の如くならしめ、各位の子弟の教育は即ち陛下の赤子の育成であること
の重責に深く稽へ、教職員、父兄及學生の三者一體となつて、眞に忠孝一如の教育の實を挙げた
いと考へて居ります。かくの如くにして我が國風の精髓をなす家族的精神は學園に漲り、諸々た
る和氣の裡に敬愛の誠に充ちた、人間性の本質に基く教育の行はれんことを期するのであります。
家庭連絡者各位に於かれまして、よくこの精神を察せられて、今後十分の御協力を御願ひ致す
次第であります。

新入學生諸君、諸君は國家の期待と近親、故舊の輿望とを雙肩に擔うて、今や本學に學ぶに至

つたのであります。諸君の今日あるは、諸君がよき素質を享けたる上に、多年餐雪の功を累ねたるが故であります。これ畢竟聖代の惠澤に外ならぬのであります。殊に我が國が世界の強國と砲火の間に相見ゆるの今日、多くの人々が召されて征戦に従ひ、中には諸國の英靈となつた人々も少からざるに、諸君のみ安んじて學業に専念し得ることに深く、思を致さねばなりません。更に諸君は同年輩の多くの人々が、自らの生活を支へ、或は家族の生活をも支へて居る間に、家庭の恩恵によつて最高學府に學び得るのであります。諸君の今日あるは無窮なる 皇恩をはじめとし、鞠育多年、幾多の辛勞を累ねられた父母の恩及先人の恩澤の致す所なることを先づ以て肝に銘じ、感恩、崇敬のまごころを以て今後に處すべきであります。忠孝の道は實に感恩、崇敬のまごころに始まるのであります。これ私が諸君に第一に切望する所のものであります。このまごころを以てしてこそ、奮起の情も、自肅の念も油然而して起り、私を滅し公に奉じ、大義のために身を命を賭する、偉大なる精神を發揮するを得るに至るのであつて、これ洵に一切の努力、創造、發展の根源であります。我等は今次の戦役に於いて絶大なる戦果の背後に、皇軍の精神力の偉大にして崇高なるものの言語に絶するあるを見て、眞に感激と讃嘆とに堪へないのであります。

四

その根柢をなすものは實にこの感恩、崇敬よりする、私を滅したまごころであるといはねばなりません。諸君は本日教育に關する 聖旨の奉戴を宣誓したのであるが、若しも諸君が身を以て大御心に歸一し奉り、熱誠ただこれに生さんとするまごころを缺くが如きことあらば、諸君の宣誓は單なる空言に終り、負荷の重任に應へんとする諸君の抱負を抛棄するものといふべきであります。私は諸君が常に本學に在る間のみならず、一生を通じて常にまごころを以て事に處し、絶えず激勵たる元氣と緊張とを保ち、氣力を旺盛にして、一段の努力をなすことを望んで已まぬのであります。

大學教育の核心は蓋し大學令第一條に示されて居る通りでありまして、これに基き諸君は國家に須要なる學術の理論及應用の教授を受くると共に、常に人格の陶冶と國家思想の涵養とに精進すべきであります。諸君は行住座臥、常に國體の本義に徹し、一身を輕しとして國家の隆昌を圖る精神を涵養し、高潔雄大なる人格を陶冶し、國家須要の人物となるに力めねばなりません。大學に於ける學術の理論及應用の教授の本旨とする所は、その基礎的知識を植ゑ、眞に研究の方法、態度及精神を體得し、これ等を基として、更に研鑽を重ね、無限の成果を生むべき創造的能力を

五

六
培ふにあります。蓋し國家が諸君に期待する所のものは、諸君の實力による國家の發展、より高き文化の建設にあるのであります。されば本學の教育方針は、卒業後直に役に立つことを目途とするものでなく、卒業後、本學に於て受けたる教養の上に、更に刻苦、精勵して研鑽と経験を加へることによつて、以て他日の大成を期し得るやう、その基礎を作るに在ることに留意せられたいのであります。

我が國は今や一には自存自衛のため、一には肇國以來途らざる大使命達成のために、舉國、國運を賭して戦ひ、大御蔭威の下未曾有の戦果を擧げて、大東亞新秩序の建設に邁進し、皇威を四海に輝かしつつあります。而してこの大建設たるや、諸君の最高、最善の學術的能力の發揮を今後に待たずしては、到底不可能であります。殊に大東亞に於ける指導者としては、先づ東亞諸民族の心服をかも得なければなりません。これがためには武力の優越に加ふるに、高度の文化を伴はねばならないのであつて、事實、優秀なる武力そのものも、新鋭なる科學と根柢ある思想とを必要とするものであります。そも／＼國家は、その國家の歴史的、傳統的なるものを繼承して、益々これを發展せしむると共に、他方新なるものを攝取して、これ等を綜合融化してこそ始め

て眞の生成發展を遂げ得るのであり、實に我が二千六百年の歴史はこれを證明してゐるのであります。往古より佛教、儒教の攝取、醇化及近世科學の修得、發展の如きは其の顯著なる實例であります。随つて、今や我が國の歴史的使命の實現に對し、東洋固有の文化の研鑽は勿論、近代西洋文化、科學、技術の攝取は不可缺の要件であつて、永遠に及る皇威の伸張、文化の進展は、これなくしては考へ得られないのであります。若しこの秋に當り、偏狹固陋なる排外的獨善の傾向に累せらるるならば、國家永遠の發展は到底望むべくもありません。況してや、學術の世界は日進月歩にして、その廣大、深遠なること測り知るべからざるものがあります。我等はまた常に外國にも學ぶの心がけを忘れてはなりません。學ぶとは模倣若くは依存するに非ずして、これを攝取し、醇化し、更に自主的に發展せしむることあります。しかしながら我が國民の道は、先づ國體に基いて各自を陶冶、形成することであり、如何なる文化、如何なる學術といへども、國體の本義に照して、その誤なきことを確めて後、始めてこれを攝取し醇化するに非ざれば、決して我が國運の發展に寄與するものではありません。國體に反する思想は、これを根絶せしむべきは勿論であります。これと同時に所謂全體主義思想もまた大に検討を要するものがあります。國家主義思想

想と稱するものにして、似て非なる假面を被むるもの、抽象的にして却つて日本精神に悖るが如きもの、感恩のまごころを缺くが如きもの、或は獨善排他的にして矯激なるものもまた少くないのであります。これ等に關しては、諸君に既に高等學校に於ても、十分訓へ戒められた筈であります。過去の例に倣するに、遺憾なることには入學の際、既に左傾的或は右傾的の、危險、矯激なる思想に染み居たりと疑はれるものも皆無ではなかつたのであります。諸君はよく思をここに致し、十分なる戒心をもつて自事すると共に、適切なる指導に俟つて、正を履る中を執り、苟も國民としての本分に悖り、日本精神を汚すが如きことなきやう切望するものであります。

諸君の専門に於ける研鑽は、その深遠なることの望まじきはいふ迄もないのであります。然るに學術の専門化の勢は益々旺となつたがため、若し専門外の教養を心掛けることを怠るならば、動もすれば諸君の視野を狹隘ならしめ、識見を局限する惧があり、且また學術の眞の堂奥に到ることも不可能となります。識見と自主性とは、如何なる方面の研究、創造にも最も必要なるものであります。私は諸君が學問の領域に於てのみならず、また識見を培ふ意味に於ても、努めて他學科、他學部の人々と接觸せんことを望むのであります。高等學校に、文科、理科と志望を異にする

者が、同一の學窓、同一の寮舎にあつて固き友情を結び、將來世に出でた後々迄もこの友情によつて、各種の職業層を結ぶを得るに、唯かに我が國高等學校制度の誇るに足る特色であります。これと同様に自己の専攻する専門外の高き教養を體得し得、なほこれ等異なる専門に學ぶ人々が、他山の石となつて互に切磋琢磨し、且、永く一生を貫いて盡きざる、美はしき交友關係を築くを得ることは、實に綜合大學のみが享有する長所であります。私は諸君の學園生活が、かくの如くして、師弟の接觸及同窓の砥礪によつて、溫情溢るる間に十分なる精神的訓練を積み、秩序と禮節とを重ね、上下の別を辨へ、廉恥の心を養ひ、忠恕、寛容の徳を磨き、相互に信頼して親和協調し、學園をして和氣藹々たる、一大家族となすに力め、よく公徳を守り、潤達、剛毅の裡に國士として恥づることなき品性を養はんことを切望致すのであります。從來動もすれば高等學校時代に於ては、清潔、整頓等の美風につき無關心なる者が少からざるを見ただけであります。たゞひ些事なりと雖も放任に流れ、或は公徳に悖るが如きことあつては、大事を託するに缺くるものなることに、留意せられたいのであります。

そも、國運の發展を圖り、諸般の文化の建設に於て、知識の力の要求されること今日に若く

はないのでありますが、如何なる知識も、強き意志によつて統一されぬ限り、これを止しき行爲に實現することは不可能であります。諸君は常に不屈の意志を養ひ、文弱に流るるを戒め、尚武の氣象を振作するに力め、名利に昏迷することなく、世俗に媚びず、正義のために毅然として邁進する勇氣を養はなければなりません。本學に於ては、豫て力をこれに注ぎ、種々企畫し實行して居るのであります。戰時學生自衛五條が作られたのもその一つであります。諸君は、これを熟讀して深く自ら戒め、これに替ることなきを期せねばなりません。また本學は夙に教練を強化し、全學生は必ずこれを受くることに致して居りますが、諸君はこれにより益々心身を練り、一旦緩急あらば、筆を投じ劍を執り、義勇公に奉ずるの訓練に徹すべきであります。なほ東京帝國大學特設防護團及同全學會堂にこれ等と表裏一體をなす報國隊があつて、教職員及學生の全員がこれに入るべきこととなつて居ります。檢見川運動場に於ける農耕作業等の如きは必ず全員交互に参加せんことを希望致します。これ等は何れも全學一家族の精神により、師弟一體となつて一致團結を圖り、全體精神の涵養に力め、自己が全體の一員たるの地位と責任とを自覺せしめ、統制ある集團的訓練を行ひ、心身を練り、堅忍不拔の志操を振勵し、且、全生活に亘り高雅なる趣味を養ひ

教養を高め、教室内に於ける教育と相俟つて、國民的性格の練成を期するものであります。

茲に特に本年の入學學生に對し留意を促したいことは、既に公示の事實である學年短縮のことです。諸君は一學年に相當する學業を半箇年に修得せねばならぬのであつて、そのため本年に限り夏季休業もこれを廢し、毎週の授業時間も増加し、幾分の補充をなし得たりとはいへ、これを以て平常の効果を擧げんことは、事實極めて無理なのであります。教職員は最善の方法を盡し、全力を擧げて諸君の教育に當りますけれども、何を措いても最も大切なことは諸君自らの奮起、努力であります。私は教官指導の下に、できうる限り學力の低下を避くるやう、諸君自らの奮勵を切望して已みません。

なほこの際特に第二工學部について一言致しますが、本學は國運發展の要請に應へんがため、一昨年来新工學部の急速創設を決定し、昨年二月追加豫算の成立と共に直に地所を千葉市に定め、工を起し、僅かに一箇年の短時日を以て略諸般の準備を完了し、本日豫定の通り四百二十二名の新入學生を迎へたのであります。第二工學部は純然たる東京帝國大學八學部の一つであつて、その規模、教授力、學生の素質等一切を擧げて第一工學部に匹敵するものとしたのであります。大

東亞戦争たけなはにして、既に大建設の緒期に入れる今日、私は第二工學部の誕生を眞に時機を得たるものとして、國家のため衷心より慶賀するものであります。本學部は完成を三年後とする關係上、當分種々の不便、不利を免れ難いのは已むを得ざる所でありますが、ここに入學せる諸君はよくその創設せられたる所以と、國家の諸君に期待する所に鑑み、他の七學部の學生と和睦び、相親しみ、東京帝國大學たる一大綜合大學の學生として、切に自重、奮勵せんことを希望する次第であります。

新入學生諸君、今や忠勇義烈なる皇軍は、雄大無比なる作戦に世界戦史に比類なき大戦果を擧げて居るのであります。然れども敵は世界の強國であり、今や全力を擧げて戦備に汲々として、最後の勝利を豪語して居るのであります。勿論戦は長期に亘ること必然といはねばなりません。随つて世界の新秩序を確立せんとする我等の大使命達成は、洵に容易の業ではなく、國民たるもの、眞に一大覺悟と渾身の努力とを以てせねばなりません。最高學府に學ぶ諸君の任務は益々重大であり、國家の諸君に期待する所極めて宏大なる所以であります。諸君は常に、かの鉄をも熔かす炎熱の下、或は朔風凜冽の下、幾多の艱難辛苦を物ともせず、死生を度外して君國のため勇

戦しつゝある忠勇なる同胞勇士の身を想ひ、心からの感謝と捧げ、これに恥づる所なきやを省み、眞に粉骨、碎心の覺悟を以て力め、殊に骨を異域に埋めた護國の英靈に對しては、衷心より哀悼の忱を表すると共に、その心を心として、必死の努力を以て職分に盡すべきであります。世局を憂ひ、思を國家の休戚に馳せるは、正に諸君のなさねばならぬ所でありますが、それと同時に諸君はよくその緩急、輕重を辨へ、學生たるの本分を忘るることなく、何時にても一旦召さるれば直に勇躍戦場に赴き、一死君國に報ずるの覺悟を固めつつ、しかも常に沈着、冷靜に勉學せんことを望んで已みません。蓋し冷靜にして沈着なる心境からこそ、明知と、達識と、眞の勇氣とが生れ出づるのであります。私は諸君が深く現下の情勢を洞察し、諸君の本務と使命とを自覺し、不斷の努力によつて一段の向上を圖り、國體の本義に徹し、國家有用の材たるべく、眞に根柢ある至誠の人格を練成し、高邁なる識見を持して、ただいま茲に宣誓せる通り、負荷の重任に應へんことを切望して已みません。

諸君が今後の學修について、必要なる心構へ及心得等の詳細に亘ることは、後刻各學部長より指示することになつて居りますから、家庭連絡者と共に聴取されたいのであります。私はこゝ

に大綱について諸君の留意を促し、諸君の健康を祈り、以て今日の告辭と致します。

一四

記念日祝賀式々辭

畏くも宣戰の大詔を拜してより四箇月餘、本日ここに本學六十五周年の記念日を迎へ、教職員、學生諸君と一堂に會して、意義深き祝賀の式を挙げ、所懐の一端を披瀝し、諸君と共に思を新たにするを得ますことは、私の甚だ欣幸とする所であります。

先づ私は諸君と共に、謹みて寶祚の無窮を仰ぎ奉り、彌榮え行く皇室の御繁榮を祝し奉る次第であります。

畏くも天皇陛下に於かせられては、肇國以來の重大時局に際し、格別御多端なる御政務、御軍務に御精勵遊ばされ、邦家の隆替を日夜御軫念遊ばさるるご洩れ承り、洵に恐懼、感激に堪へません。我等は益々奉公の誠を竭し、只管宸襟を安んじ奉らんことを期すべきであります。

願ひますれば、我が國は東亞新秩序建設の大旗の下に、支那大陸に戰ふこと既に五年に垂んとし、而して客年十二月八日には、畏くも米、英兩國に對する宣戰の大詔を渙發あらせられ、國民

の露ぶべき所を昭示し給うたのであります。大東亞戦争はその意義に於て、またその構想、作戰に於て、まさに青史に類を絶するものがあります。今や大御稜威の下赫々たる戦果に舉げられ、砲煙の霏れゆくところ、建設は著々として行はれ、萬邦をして各々その處を得しめ、兆民をして悉くその地に安んぜしむる、我が帝國の大精神は世界的に顯現せられつつあります。この盛況にあつて、身を以てこの大業に參するを得る、我等の光榮は蓋し何物にも譬ふるを得ないものがあります。

しかしながら我等の敵とする所は、世界經略の傳統を誇り、金力、物資の豊富を恃む二大強國でありまして、眞に乾坤一擲の大決戦であります。この戦が勢ひ長期に亘る持久の戦たるべきことは、十分に覺悟すべきでありまして、我等國民たるものは鐵石の團結と、不退轉の覺悟とを以て、如何なる艱苦にも堪へ、最後の勝利を得る迄戦ひ抜かねばなりません。而してこの戦の目的達成は、單に武力戦のみに期すべきではないのであつて、戦捷に續く建設の大事業こそ、一億國民に課せられたる、重大なる任務であります。我等は必勝の信念を以て、二千六百年來培はれたる傳統の力を發揮し、國運の興隆を圖り、皇軍の武勳を空しからしめざるやう、有終の美を

濟すに力めねばなりません。

この征戰に於て、忠勇なる皇軍は、あらゆる困苦缺乏に堪へ、勇戦奮闘、國威を中外に宣揚して居ります。我等はその武勳に感激増く能はざると共に、その勞苦に對して、衷心より感謝を捧ぐる次第であります。殊に我が將士が平時より隱忍自重、必勝不敗の信念を固め、黙々として一意練武に精進し、その一度征進につくや、命を國毛の輕きに比し、死を見ること歸するが如き盡忠の赤心は、眞に讃嘆に堪へず、深く敬意を表する所であります。支那事變以來、從軍の將士の中には本學の出身者、奉城中の職員、また在學中の學生もあり、しかもその中の幾人かは名譽の戦死を遂げられ、大東亞建設の礎となられたのであります。私は諸君と共に、護國の英靈に對しましては、衷心より哀悼の忱を捧げ、また傷城の勇士に對しましては、一日も速にその恢復を祈り、遺族各位に對しましては、心からの弔意と感謝とを表するものであります。仍ち我等はその微衷を顯現せんがため、本學關係戦歿者の英靈を祀り、忠烈遺芳をここに留めんとする施設が完成致しましたので、昨年十月遺族の方々を招待して、全學の感謝と哀悼とのうちに、嚴肅なる慰靈祭を行ひ、神鎮る英靈の偉勳を偲び、遺志達成の誓を新にしたのであります。

過去一箇年間に顧みますのに、本學に功勞多からざりし、石原久、長興、横手、山内及白鳥の五名譽教授と醫學部服部教授とが長逝せられましたことは、洵に哀悼に堪へません。これ等の方々は、各専門の領域に於ける碩學でありまして、その遠逝は邦家のため、殊に時局下學界多事の折柄、痛惜の至りといふべきであります。中にも長興名譽教授は病理學の泰斗として重きをなし、殊に昭和九年十二月より本學總長として、公正にして毅然たる態度と、寛容、溫慈の人格とを以て、熱誠本學を統督し、大學の使命の徹底に力められ、功績甚だ大なるものがあつたのでありますが、不幸病のため、昭和十三年十一月總長の職を退かれたのであります。しかしながらその後といへども、學界及社會的事業に關與せられ、貢獻せられた所極めて多大でありましたが、今や幽明境を異にし、再びその溫乎たる人格に接すべくもありません。洵に悼みてもなほ餘りある次第であります。

定年の故を以て、昨年四月醫學部朝比奈教授が退官せられ、去る三月三十一日同じく定年の故を以て、工學部に於て、西松、草間、丹羽、横山、竹村の五教授、文學部に於て長井教授、理學部に於て柴田教授、航空研究所に於て岩本教授が退官せられました。これ等の方々の學術の研究、

247

後進の育成、將又行政上の功績は甚だ大なるものがあつて、内外の著しく敬重する所でありました。私はここに各位の學勤と、本學に盡された多年の勤勞と功績とに對し、滿腔の敬意と感謝とを捧げ、今後もなほ後進のため、途らざる誘掖、指導を與へられんことを切望するものであります。なほ昨年より今年に亘り、工學部の渡面教授、文學部の今井時郎教授、理學部の竹内教授、經濟學部の北岡教授、航空研究所の和田教授が、或は退官せられ、或は他に轉任せられましたが、これ等の方々に對し、また同様の敬意と感謝とを表するものであります。

本學に於ける學術研究は、引續きその成果を擧げつつあつて、殊に時局下國家緊急の事項について、學内は勿論、學外に於ける公私各方面に於て、時局の進展と共に益々多大の貢獻をなしつつあります。昨年度に於て農學部に水産學第四講座及畜産製造學講座が増設せられ、本年度には、第一工學部に火藥學第三講座が、また理學部に地球物理學一講座が増設せられる豫定であります。その他學生増員に伴つて、第一工學部及理學部に教官の相當數が増員せられました。傳染病研究所、天文臺等に於ても新事業開始に伴ひ、教授、技師の充實もまた實現せられつつあります。

ここに注目すべきは、昨年新設せられた、東洋文化研究所が、著々その事業を開始致しましたことと、本年四月一日より在來の工學部が第一工學部となり、別に第二工學部が創設せられ、本學の七學部はここに八學部となり、本學の大擴張を實現したことであります。

かねてより本學に於きましては、アジア及南洋に亙る地域を含む、東洋文化の総合的研究を目的とする、東洋文化研究所の設置を計畫したのでありますが、その豫算が十六年度に成立しましたことは、昨年の記念日に述べた所でありまして、爾來萬端の準備も整ひ、昨年十一月官制の公布を見、所長以下所員も任命せられ、新たな抱負を懷いて、著々研究に精進して居るのであります。本研究所は初めから、南方問題の研究をも包含して居たのでありますが、大東亞戰争勃發と共に、資源に關するものと相並んで、人文科學の全領域に亙り、大東亞の文化を総合的に研究するの緊急なることはいふ迄もありません。私は本所の活動によつて、大東亞に於ける文化的建設に必要な、人文科學の原理的研究、史的研究と共に、現勢に關する綜合的研究が行はれ、建設の最高、最重要問題の解決に寄與する所大なるを信ずるものであります。

そも／＼支那事變勃發以來、生産力擴充を初めとし、國防國家の急速なる建設に伴ひ、科學の

振興と、指導的技術者の養成とが焦眉の急とせられたのは、まさに當然の歸結であつたのであります。本學は夙にここに鑑みる所あつて、昭和十四年度より、多大の困難を排し、進んで工學部學生の臨時増員を行ひ、國家の要請に應へつたのでありますが、かくの如きは要するに一時的、應急的の處置に過ぎません。況してや、近き將來に於ける南方發展を想像致しますれば、工學部學生の大増員は、實に國家非常急迫の必要と見ねばなりません。よつて一昨年、新工學部の急速創設を企圖したのでありますが、幸にして昨年二月、十六年度豫算に於て承認せられることになりました。而して僅かに一年間の準備期間を以て、敷地を千葉に選び、在來の工學部に劣る所なきものの創設を決意、實行致したのが第二工學部でありまして、かくの如き時局下に於て、計畫遂行の困難が如何に大なるものなるかは蓋し想像の外であります。幸に關係各位の熱誠と努力によつて、最も苦慮致しました教授力も完備することを得、第一流の人々を迎へ得ましたことは、洵に喜びに堪へません。一方建築、設備等の工事に於ても、資材等の入手極めて困難にして、且輸送力その他甚だ逼迫せる折柄にも拘らず、その衝に當られた人々の晝夜兼行の努力によつて、略豫定の進捗を見まして、四百二十二名の新入學生を收容し、本月一日より、開始するを

得たのであります。本學はこれにて新たに一學部を加へ、八學部を擁することとなり、最高最大の學府たる威容を更に一段と加へた次第であります。本年十月になりますと、新入學生は第二學年に相當するものとなり、別に同数の新入學生を迎ふることになるのであります。本學の豫定よりかくの如き半箇年の繰上はその準備に於て、再び多大の困難に遭遇する譯であります。關係各位の努力によつて、是非これを克服致さねばなりません。なほ新學部は、何分完成を三年後とする關係上、諸般の施設に於て十分なるを得ない點もあり、また多少遠隔の地にあること等によつて、當分種々の不便もあつたことと察せられますが、關係者の努力と各方面の援助によつて、これ等の不利、不便も豫想以上に速に除去されるものと信じます。私はこの機會に於て、新學部創設及工事遂行に關し、初めより多大の支援を與へられた、文部、陸、海軍並に企院當局の各位、また敷地決定の當初より多大の援助に預りました、千葉縣、市及諸官廳當局に對して深く感謝の意を表する次第であります。

惟ふに、大東亞に於ける建設が將にその緒につかんとするの際、第二工學部及東洋文化研究所の開設は、眞に時期を得たものであります。私は本學が國家に寄與すること愈々多きを加ふる

を見て、諸君と共に御同慶に堪へない次第であります。

紀元二千六百年の奉祝記念事業として計畫致しました、東京帝國大學學術大觀は、編纂委員長及各委員をはじめ、執筆に當られた各位の熱心なる御努力によつて、今や殆ど完成を見んとして居ります。本書に對する世の期待は甚だ大であります。出版の時は學界をはじめ知識層に影響、裨益する所少からざるものありと考へられ、本書編纂の意義の甚だ大なるを慶賀致すものであります。

次に營繕關係について申し上げます。竣工せるものとしては、農學部第三號館、附屬醫院外科病室、航空研究所研究室及實驗室等を主たるものと、その他第一工學部、附屬臨時醫學專門部等の諸建物を合して、總坪數四千九百六坪に達して居ります。なほ現在工事中のものに、理學部第一號館、附屬醫院外科病室及研究室等があります。本學震災復興工事は今日迄に全體の七割二分の竣工を見、未着手のもの約二割であります。一昨年より四年間に互に譲渡を受けることとなつた、隣接の淺野侯爵家の土地は、豫定通り本年はその四分の一に當る三千六百餘坪を購入し、明年度に於て、残りの四分の一を購入すれば全部終了することとなります。その他航空研究所、

傳染病研究所に於ても事業の擴張と共に、それと隣接地を購入し、臺灣演習林に於ても新たに作業用地を購入致しました。第二工學部については、全豫定地積約十五萬坪中、十一萬二千餘坪の購入を終り、建物は總坪數一萬三千七百五十餘坪中、二千七百七十餘坪は三月末竣功し、来る十月の新學期には、更にこれに劣らぬ程度に竣功せしむる豫定であります。

昨年十月、現下國防上及勞務動員上の必要より、非常臨時の措置として、修業年限を六月以内短縮せられることとなり、本年三月卒業豫定のは、三箇月を短縮して昨年十二月末を以て卒業せしめ、なほ明年三月末卒業のものは、これを本年九月末に卒業せしめることとなつたのであります。本學に於ては、學年中途に於ける突然急速の繰上りしたため、學生の修學方針に困惑を生ぜしめざるやう、また學力低下を來たさざるやう、種々の困難を排して、直に臨時學年曆を制定すると共に、教職員の努力と學生の奮起をもとめ、最善の方途を講じたのであります。本年卒業のものは、昨年より更に三箇月を短縮せられるのであつて、教職員、學生の勞に洵に察するに餘りあるのでありますが、この際我等は全力を擧げてこれを克服し、努めて學力の低下を避け、以て大學教育の効果を完くせねばなりません。これがため、教育内容に慎重なる檢討を加へ、休

業日の廢止、毎週學修時間の適當なる補充等を考へ、これと共に保健、衛生に缺くるが如きことなきやう、十分なる考慮を拂ひつつあります。なほ本年十月には、六月を短縮された高等學校の卒業生を入學せしむることとなりまするについては、我等はここにも十分なる考慮を拂ふ必要があります。

昨年設立致しました、東京帝國大學全學會及同特設防護團員にこれ等と事實一體となす報國隊は、爾來その事業を進め、大に發展しつつあつて、教室内の授業と相俟つて、學生の訓育、陶冶に資する所大なるものがあります。防護團はたゞ如何なる事變勃發するも、よく内には本學を護り、外には學外の救援に十分協力し得る體制を整へて居ります。報國隊の學外業務に協力せるものは、平素の訓練と、その體得せる高き教養とによつて、よく東京帝國大學學生たるの榮譽を高めて居ります。全學會の農耕部は、各學部の教職員、學生が休日毎に交はに松見川に赴き、師弟の情誼の深ふ中に土に親しんで、自然を樂しみつつ、作業に従事し、豫想以上の作物の收穫さへも擧げて居る有様であります。本作業は食糧増産と、保健と集團的訓練とに資し、全體的和樂の精神を涵養するに甚だ力ありと信じます。

本學の教練は益々これに力を注ぎ、その強化を圖りましたが、その成績良好でありまして、學生の心身の錬磨に寄與するもの多であります。今後必要なる器材、設備の充實を圖り、更に一層の效果あらしめんことを期する次第であります。

本學學生の思想は、中正、穩健であつて、十分時局を認識し、賦身報國の念に燃えつつ、しかもよく自重し、安逸、荒怠を戒め、長期建設の使命に對する責任を自覺して、學に勵み、本分を竭すに精進しつつありと認めます。健康に關しても十分の留意が拂はれ、その關心も高まり、且また本學のこれ等に關する施設の充實と相俟つて、漸次良好となりつつあります。

客年十二月八日、畏くも米、英兩國に對する宣戰の大詔の渙發を見ますや、本學に於きましては、直に全學が謹んで、誓言を奉戴し、如何なる艱難をも突破し、宸襟を安んじ奉る覺悟に徹せんがため、大詔の奉讀式を舉行し、全學一體となり一死報國の誓を新たにしたのであります。而してなほ學生が聖旨に格道して、戰時下に處すべき覺悟を以て學生たるの本分に悖ることなきやう、戰時學生自戒五條を制定致しました。私は學生諸君がこれに則り、自ら戒め、皇軍の戦果の餘りに偉大なるに押れ、皮相なる安易感に促はれる如きことなく、或はまた學業をよそに分を忘

れ、常規を逸するが如きことなく、學生たるの本分に徹せんことを期待するものであります。

私は乏しきを本學總長の重任にうけて以來、その責任の重大なるを痛感し、如何にして大學の使命を達成し、國家の付託に應ふべきかについて、日夜心肝を碎き、夢寐の間にもなほ且思ひをこれに廻らしつつあるのであります。今や大東亞戰爭は一面戰爭、一面建設の段階に入り、國家が有爲の人材と、學術の力とに俟つもの愈々多きを加へ、我等の使命は益々重大となつて参りました。私は諸君と共によく大學の使命を達成し、以て天業翼贊の一途に邁進せんことを期するものであります。

大學の使命はいふ迄もなく、國家の要請に應へて、有爲なる人材を育成すること、學術の蘊奥を攻究することにあります。由來、大學に於ける學術の研究は、基礎的研究と、眞理の探求とが、その眞の生命であり、更にこれに應用の方面も加はつて、完璧を期するにあることはいふを俟たないのであります。随つて、現實の要求に解決を與へんとするものと、他方眞理のために眞理を探求せんとする、この兩端の間に諸般の研究が行はれるものと考へます。その何れたるにせよ、十分なる識見を以て、國家が將來に於て、若くは現實に於て、必要とする所のものをよく認

融し、よく豫見し、洞察して問題を遠慮し、研究に着手すべきを要請するは同様といはねばなりません。私が常に研究者に深き識見を要望するもの、一つはこの點にあるのであります。

そも／＼國家は、その國家の歴史、傳統、統制なるものを繼承して、益々これを發展せしむるに共に、他方新たなものを攝取して、これ等を綜合、醇化してこそ、始めて眞の生成、發展を遂げ得るものであり、實に我が二千年の歴史はこれを證明して居るのであります。随つて今や、我が國の歴史的使命の實現にあつては、東洋固有の學術、文化の研鑽は勿論であります。これと共に能ふ限り、廣く知識を世界に求めて、これを攝取、醇化し、以て我が國獨自の學術の建設に資すること、甚だ必要であります。しかしながら今日の如き、外國文化の輸入の殆ど不可能なる實情の下に於ては、これは望み得ないことでありますから、我々はここにこそ、寧ろ發見される學術の底力を振ひ起して、以て獨創的研究に邁進するの覺悟に徹しなければなりません。如何なる場合に於きましても、私は諸君が學術の研究に於て、國民としての眞の自覺の上に立ち、國體の本義が我が國民の格趨すべき根本義なることを體し、國家の理想と動向とにつき、確たる認識と意見とを保持して研究に邁進し、以て國家の寄託に背くことなき成果を擧げられんことを切

望して已みません。殊に大東亞に於ける指導者としては、先づ東亞諸民族の心服を勝ち得なければなりません。これがためには、武力の優越に加ふるに、高度の文化を伴はねばならないのであつて、事實優秀なる武力そのものも、新鋭なる科學と、根柢ある思想とを、必要とするものであります。即ち學術的能力の發揮を俟たずしては、到底大建設の遂行を期し得ざること明瞭であります。

惟ふに、南方進出が、我が國發展の必然の勢たることは、夙に識者の唱へた所であつて、殊に支那事變の推移、世界情勢の變化と共に、南方が我が國の生命線たることは、何人にも痛感せらるるに至つたのであります。しかるに我が國の學界が果して將來を慮つて、その用意をなしたかご問はるれば、遺憾ながら、その要求を十分充たすことが、できないやうな實狀といはねばならないと考へます。試みに、この大東亞建設にあつて、その最も重要な問題の一、二を擧げれば、日本民族が南方進出、南方永住に適するや否やを正確に判斷し得る研究ありや、假に適せざるものありとせば、これを適正ならしむる衣食住、衛生、遺傳等に關して、邦人の手に成つた何等かの學術的研究ありや、或は統治の上より見るも、或はその民族と共に居住する生活の上より

見るも、最も必要な南方諸民族の文化、經濟、慣習等について、十分なる研究ありやと借問すれば、その答は若干の部分のものを除いては、何れも恐らく消極的ならざるを得ないであらう。かくの如きは勿論、現地に於ける研究に幾多の困難ありたるに基くこと多しといへども、學者が過去に於て、國家の將來必要とする所のものに對する認識と洞察とを缺きたるの責は、これを免れざるものと考へざるを得ないのであります。私は大學の使命に對して、つく／＼、學者が大なる識見と、國家の動向に關する認識とを持つことの必要を痛感する次第であります。

かくして私は、大東亞に關する諸般の研究の急進着手を必要とする現狀に鑑み、特にこの際諸君の奮起を促がすものであります。最近本學に於て、その氣運の澎湃たるものあるを見るのは、洵に喜に堪へない所であります。大東亞研究の如き大規模の研究については、個々學者の研鑽の必要なのはいふ迄もありませんが、綜合研究の必要はまた切實であります。私はここにまた、綜合大學の享有する大なる長所を感ぜざるを得ないのであります。私は諸君がその長所を十分に利用せられんことを切望致します。而して我等は、再び今日の悔を繰り返すの惧れなきやう、單に目前の現實のみに眼を奪はるることなく、絶えず世界の狀勢の變化及國運の進展に留意して、

基礎的な若くは將來の洞察に基く研究にも力を注がねばなりません。

次に大學が、人格の陶冶と國家思想の涵養とを完からしむるには、私は何よりも學内の雰囲気と、師弟の人格的接觸によることとが、最も必要にして有意義なりと考へるのであります。大學に於ける學術の理論及應用の教授並に實驗、製圖、演習等は、何れもこの目的に合致するものであることは明かですが、更にこの間、情操的要素を介して、全人格の陶冶が最も有效に行はれることが緊要であります。元來教育そのものが、徒に觀念論や、口舌の上のみを以て、その目的を達し得るものではありません。常に情味と親切とを以てすることが最も大切であります。この兩つを缺いて如何にしてか、人を動かすことが出来ませうか、苟も文教に與るものが、最も留意すべきはここに在り信じます。

私は諸君と共に、本學の教授力を強化するに努めましますと共に、大學をして一大家族たるの實を擧げ、學園をして、皇室を宗家と仰ぎ奉る一家族となすに努め、學園生活に於て忠孝一如の道を體得せしめ、且は全學、父子、兄弟の睦が如く、恩愛、崇敬のまごころを以て和睦び、互に親切を旨とし、寛宏、忠恕の徳を磨き、和氣溢るる内に高雅なる趣味を養ひ、全體的精神を涵養し、

よく上下の別を辨へ、自己の全體生活に於ける地位、責任を自覺せしめ、秩序の重んずべく、規律に服すべき所以を悟らしめんとするに力めました。また全體的行動、實踐を通じて、自己の本分を辨へ、只管本分に精進すべきを體得せしめ、且統制ある集團的訓練と相互の切磋とによつて、心身を練り、不屈の意志、堅忍不拔の志操を養はんことに力を致したのであります。卒業會の設置、家庭連絡者の制定、卒業の際及入學宣誓式に於ける父兄の招待、教授の強化、戦時學生自戒五條の制定等は、何れも重きをこの目的達成に置いたものであります。最近の卒業及入學の際に於ける、父兄列席者が、實に學生數の八割六分に達せるが如き、また當日學内が、如何に饒々たる風色を以て溢れたるかを見れば、父兄が我等の志に共鳴されたことも明瞭であります。私はこれ等が何れも、教室内の教授と相俟つて甚だ效果ありしことを信じ、今後益々これに期待するものであります。而してこれは何よりも先づ教官各位の率先垂範と、學生諸君が、諸君の地位と國家に對する使命との自覺による、自奮自勵に俟つこと最も大であつて、切に諸君の努力を望む次第であります。

私が現下特に學生諸君の留意を促したきことは、我が國が大東亞戰爭の進展と共に、その發展

の新たなる段階に立つに至つたことであつて、諸君が特に世界的大國民としての性格涵養の一層必要なるを自覺し、自己を責むるに嚴に、他を容るるに寛なる精神を養ふべきことでもあります。我等は徒に資源の利用にのみ心を惹かれ、眩惑されて、大東亞の盟主としての、高邁なる識見と、知性と、徳性を涵養するを怠つてはならないのであります。大東亞の建設に當つて、學術の力の要望せらるるは當然であつて、これなくしては、東亞諸民族の心脈をかも得るに足る建設は不可能であり、今後一層我が學術の飛躍的發展を圖らねばなりません。我が國の學術は維新以來、短時日の間に驚異的發展を遂げたやうではいへ、これを世界の水準に比するに、なほ及ばざるもの少くないのであります。若しも諸君が、米、英の勢力を東亞より驅逐せるに心驕り、徒に依り自大となつて、我が學術は外國に學ぶものなし等と考ふるに至るならば、蓋し非常なる偏見といはねばなりません。我等は常に、我が國固有の學術を尊重すると共に、國體の本義に照らし、その取捨には慎重なるべきこと勿論であります。學び得べき限り、十分これを外國に學ぶの心掛けを忘れてはなりません。而して我等は大東亞の指導者としては、いふ迄もなく利を先にすべきでなく、義を先にせねばならぬのであります。諸君は須く雄大なる國民的氣魄と、他國民、他民

族に仰望せらるる徳風を養ひ、以て他日の大成を期し、肇國の精神の具現に邁進すべきであります。

三四

今や世界の地圖は一變せられ、新たな歴史は始まり、我等の使命は愈々重大となりました。しかしながら偉大なる事業は決して一朝一夕に成るものではありません。我が國が今日の發展をなすに如何に、多年に亙る周到なる用意と、精神的、物質的に如何に多くの準備を必要とし、その背後に、先人の偉大なる、努力と苦心との存したかに、深く思をめぐらさねばなりません。學生諸君、諸君はよくこの點に鑑み、戦時下の今日、安んじて學業に没頭し得らるることについて、皇恩の厚さを肝に銘じ、國家の諸君に對する期待の如何に大なるかに稽へ、恒に 聖旨を奉戴し、よく時局を認識し、何時にても召さるれば勇躍戦場に赴き、一死君國に報ずるの覺悟を固めつつ、靜に學修し、思索し、研究し、心身を鍛磨して、以て負荷の重任に應へ奉るの素地を養はんことを望んで已みません。

私は大東亞の黎明に當り、本學に於ける教育の責任の愈々重大なるを痛感し、眞に胸迫る思を致します。教職員各位、學術總奥の攻究と人材育成との、この兩つの重大なる職分に對し、切に

この上ながらの御盡瘁を祈る次第であります。

全學教職員、學生諸君、世界の歴史は變轉止むことなく、諸國家の隆替、興亡は常なきの有様を呈せる中に、獨り我が國のみは 萬世一系の至仁の皇室を仰ぎ奉り、大御稜威の下發展に發展を重ね、以て今日に及んだのであります。今や我等は大東亞新秩序を建設し、世界の平和を確保すべき未曾有の大業を完遂すべき秋に際會して居るのであります。我等は悠久にして窮りなき國體の本義に徹し、世界に冠絶せる皇室に對し奉る、尊崇敬愛の念をいよ／＼深くすると共に、常に一身を君國に捧げ、公に奉ずるの覺悟を養ひ、聖旨を奉戴して不撓不屈、堅忍不拔の雄乎たる決意を持して、粉骨碎心以て各人の本分を竭し、皇運の扶翼に邁進せんことを期すべきであります。

これを以て本日の式辭と致します。

三五



以印刷
贗寫

昭和十七年十二月
東京帝國大學全學會第二工學部會誌第一號別刷

第二工學部創設經過の概要

東京帝國大學第二工學部

27

目次

一、第二工學部設立決定に至る迄の経過	(一)
二、計畫の大要	(二)
三、計畫實施の準備機關	(三)
四、創設事業の實施	(四)
五、開學當時の狀況	(五)
勅令の公布	(六)
講座及教官	(七)
建物、敷地及設備	(八)
六、開學後の進捗狀況	(九)
建物及設備	(一〇)
第二年度の講座増設	(一一)
教職員及學生の現在數	(一二)
學生諸施設	(一三)
交通	(一四)
七、結言	(一五)

第二工學部創設經過の概要

一、第二工學部設立決定に至る迄の經過

昭和十二年支那事變の勃發以後、事變處理の完遂と國防の充實とを目的とする生産力の擴充が要望せられるに至り、之に必要な高級工業技術者の數も劇的に増大して來たので本學に於ては全國各大學に率先して工學部に昭和十四年及び十五年の二回約百三十名宛收容人員を臨時に増員して國家の要望に副ふ處置を講じた。而して其後緊急の必要に應じて決定した大學各部の在學年限臨時短縮處置に據り、昭和十四年入學者は昭和十六年十二月末に、又昭和十五年入學者は本年九月末に卒業し、大東亞戰爭開始直後特に工業各方面に技術者を必要とする時に當り、夫々の職域に於て増員の効果を發揮したのである。乍併此の臨時收容人員の増加は元より間に合せの處置であつて、永續して實施し得ざる性質のものであつたのみならず、増員數も亦時代の要求に應じ得る程度ではない。是に鑑み本學では昭和十五年五月頃から工學部を恒久的に擴張する計畫を樹て、且又之と併行して別個に新工學部（假稱第二工學部）を設置する計畫を以て種々企畫し、兩々相俟つて本邦大學の工學部收容人員を劇的に増加する端緒を開くこととし、昭和十六年度新規事業として之に必要な豫算を要求したのであるが、兩案共當時は政府當局の賛成を得るに至らなかつた。然るに昭和十六年一月に至り國際間の情勢は愈々逼迫し、海陸軍を始めとし政府の關係當局者間でも急遽第二工

學部設置案を實施する必要を認むることとなり、昭和十六年度追加豫算案中にその設置に必要な臨時費第一年度分三百八萬圓、總費額一千二百七十萬二千圓の四ヶ年繼續事業として帝國議會に提出し、同年三月正式に右豫算案の成立を見た。

此の豫算案の提出は僅かに旬日の間に決定したのであつて、此は企畫院、文部、海軍、陸軍、大藏各省の關係諸官と本學の關係諸官との相互信頼と緊密なる聯絡並に迅速なる決斷とに因るものであつて、若し詳細未定に至る點迄各關係官廳間の打合せを済ませた後でなければ決定せずと云ふが如き舊套を墨守しつゝ、花再交渉に日を費したならば、本計畫は假令實現するとしても次年度以後に決定を延期し國家の念に應じ得なかつたであらう。

二、計畫の大要

本計畫は昭和十六年度以降四ヶ年の繼續事業として、左記年度別の臨時部豫算を以て着手し、土木、船舶、航空機、航空原動機、造兵、電氣、建築、應用化學、冶金の九學科各四〇名、機械工學科六〇名、合計四二〇名を毎學年の收容定員とする新學部を設置し、昭和十七年四月に開學して第一回入學者を收容せんとするものである。即ち本學内既存の工學部の毎學年收容定員三七八名（昭和十七年四月）に比し更に四二名を増加し、本邦最大の學生收容数を有する工學部となるべきことの外、一帝國大學内に二個の工學部を置くことになる點並に豫算決定後僅かに一ヶ年の準備期間を以て急速に開學すること等前例の無い事業である故に、その實現には多大の困難を伴ふべきものであることは言ふ迄もない。

第二工學部設置臨時部豫算

種別	昭和十六年度	昭和十七年度	昭和十八年度	昭和十九年度
臨時部	117,700,000	310,800,000	310,800,000	310,800,000
合計	117,700,000	310,800,000	310,800,000	310,800,000

備考 其後昭和十七年四月入學者は同年九月末を以て第一學年を終り十月より第二學年として教育し且十月より新に第二回入學者を收容することに決したる結果昭和十七年度豫算には右表の外に追加豫算として新費及設備費二百六十萬圓を第三年度以降より繰上げ計上することに改訂せられた。

第二工學部用建物は鋼材、セメント等の資材不足の現狀に鑑み本造二階建以下に限定せられ、且防火の必要上建物相互間の間隔を大にするを要するため自然敷地の所要面積は相當に大となり、本部所在の構内には勿論之と比較的近距離に其の敷地を求め得ざりしのみならず、直ちに建築に着手し得るためには、地内に障害物の介在する土地を選定し得ない等の關係を顧慮し、數ヶ所の候補地の内より特に地元の熱心なる希望をも參酌して、千葉市彌生町に約十五萬坪の土地を選定し千葉市に於て右土地を所有者より購入し、學園として必要な諸施設をなしたる上本學に賣渡さしむることに決した。

次に建物、附帶諸設備、實驗研究用設備等に必要なる資材中物資動員計畫に準據して割當配給を實施し居るものに關しては、陸軍及海軍に於て各々の所要量の半量を分給して夫々軍需資材としての配當量中より割當證明書を發行すべきことを約し、工事の促進を援助することになった。

三、計畫實施の準備機關

昭和十六年二月初旬第二工學部設立に要する創設費を昭和十六年度追加豫算として帝國議會に提出することが閣議の決定を見たに付、工學部長丹羽重光教授は總長の命を承けその設立の準備に必要な諸事項を協議するため工學部教授中より左記十二名を招致し二月十九日に第一回の非公式協議會を開催した。

山本 武藏 青木 保 内田 祥三 草間 偉 厚木 勝基 瀬谷 象二 湯淺 龜一 宗宮 尚行
中西不二夫 池田 謙三 眞島 正市 小野 鑑正

此の協議會は丹羽工學部長を議長とし、宗宮教授を幹事として其後三回に亘り開かれ、現工學部との關係、教官選定の方針、建築、設備、入學者選拔方法、學科課程及時間割作成の方針等に付基本的専門事項に關して意見を交換し第二工學部の設立に就いては現工學部各學科共同して全力を挙げ必要なる協力をなすべきことを申合せた。

越えて同年三月半賀總長を會長とする左記構成の第二工學部設立準備委員會が本學内に設置せられ、總長の諮問に應じ第二工學部設立に關し必要なる準備事項を調査審議することになった。

會長 建長 平賀 謙

委員 教授 田中 芳雄 同 寺澤 寛一 同 穂積 重遠 同 丹羽 重光
教授 坂口 康藏 同 簡部 一郎 同 内田 祥三 同 佐野 秀之助

教授 瀬谷 象二

文部省専門學務局長 永井 浩

同 會計課長 柴沼 直

同 文書課長 有光 次郎 (昭和十六年七月八日)

同 専門學務局學務課長 伊藤 日出登

本學 庶務課長 横山 俊平

同 會計課長 木村 甲一 (昭和十六年六月三十日後任進藤 小一郎)

同 營繕課長 清水 幸重

幹事 技師 吉田 實 書記官 岩倉 武嗣 事務官 石澤 貞義

附記 昭和十六年四月一日間部教授の兼任として鈴木 文助教授、更に同年十一月八日同教授の兼任として三浦 伊八郎教授が委員を委嘱せられた。

又此の準備委員會に左記の構成による専門委員會を附置し、専門的事項を調査審議することとなり、同年三月二十一日附を以て總長から夫々委嘱せられた。

委員長 教授 丹羽 重光 (昭和十六年四月一日内田 祥三教授と兼任)

副委員長 教授 瀬谷 象二

委員 教授 田中 芳雄 同 山本 武藏 同 青木 保 同 内田 祥三

同 草間 偉 同 厚木 勝基 同 佐野 秀之助 同 西 健

同 湯淺 龜一 同 宗宮 尚行 同 中西 不二夫 同 池田 謙三

同 眞島 正市 同 小野 鑑正

常務幹事 助教 堀川 節雄 同 關野 克 (昭和十六年六月三十日岩倉武蔵書記官追加)

尙専門委員会には左記の如く各科一人宛の専門幹事を置き専門委員の指示の下に調査立案の分擔を委嘱せられた。

助教 堀川 武雄 同 谷下 市松 教授 加藤 弘 助教 林 毅

同 八田 桂三 同 阪本 捷房 同 關野 克 同 佐々木 六郎

同 友田 宜孝 教授 志村 繁隆 助教 谷 安正 同 吉澤 武男

同 岡 宗次郎

備考 林助教の兼任として谷一郎助教 (昭和十六年十一月十五日)、佐々木助教の兼任として小川正義助教 (昭和十七年二月四日) 夫々委嘱せられた。

専門委員及専門幹事は屢々會合して夫々の所掌事項を熱心に處理し、建物坪数並に設備費の各科配分及室割、設備品の企画註文等に必要なる諸準備を遂行し眞に全學協力の實を擧げた。

以上の外總長の諮問に應じ第二工學部の教授、助教等の人事に關し調査する爲左記の構成の下に第二工學部人事調査委員会が設置せられた。

會長 長 平賀 謙

副會長 教授 内田 祥三 同 瀧 藤 象二

委員 前教授 田中 芳雄 教授 小野 隆正 同 山本 武藏 同 青木 保

同 草間 勝 同 丹羽 重光 同 厚木 勝基 同 西 健

幹事 庶務課長 横山 俊平 (昭和十六年六月三十日岩倉武蔵書記官追加)

人事調査委員会に於ては慎重に教授、助教等の候補者として推薦すべき者の人選を進め昭和十七年一月末には左の如く合計六〇名に達する教授、助教候補者を選定した。

教授	兼任	専任	合計
七	二八	三五	六〇
助教	兼任	専任	合計
二	二二	二五	四九

四、創設事業の實施

上記諸機關により決定せられた事項を實施するに、建物及附帶諸施設の詳細なる設計、工事の契約、監督等は清水營繕課長の指揮の下に同課員之に當り、實驗研究等の諸設備の購入契約並に建物、設備等に必要なる資材の入手幹旋其他一般の庶務事項は湖蘇教授指導の下に岩倉書記官以下第二工學部設立準備事務室の諸員が之に當つた。

斯くて昭和十六年八月十三日敷地現場にて敷地祭を舉行し、逐次建物及附帶設備の工事に着手したのであるが、時恰かも獨り開戦、英米蘭諸國の我邦に對する經濟斷交等相繼いで起り、遂に昭和十六年十二月八日米英兩國に對し宣戰の大詔が頒發せられるに及んで建設に必要な資材、運輸、勞務等が極度に不如意となり、工事の進

延するものが提出した。併しながら本學關係者一同は萬難を排して徹底的努力の下に飽く迄初志を貫徹することを決意し、遂に豫定通り開學することに進捗を見たのである。

尙又第二工學部の入學者を如何にして選拔すべきかに付、學内關係諸機關、特に第一工學部に於て最も慎重に考慮審議の結果、第一、第二兩工學部に對する入學者素質を成るべく均等ならしむることを目標として兩工學部に併置する學科に就いては當分の間入學志願者をして孰れか一方への選擇志願を認めず、兩學部收容人員の合計を採り、之を最も公平と考へたるゝ方法により本學に於て兩學部に配分することに決した。

五、開學當時の狀況

(一) 勅令の公布

第二工學部設置の準備が進捗したるに付昭和十七年三月二十四日附勅令第二百十五號を以て「大正八年勅令第十三號帝國大學及其ノ學部ニ關スル件中改正ノ件」を公布せられ、「工學部」を「第一工學部」に改められた。即ち本學既存の「工學部」は爾後「第一工學部」と稱することとなり、設立準備期間中假稱として取扱はれて居た「第二工學部」なる名稱は正式に決定せられたのである。

又之と同日附の勅令第二百十四號を以て「東京帝國大學官制中改正ノ件」並に勅令第二百十六號を以て「東京帝國大學各學部ニ於ケル講座ニ關スル件中改正ノ件」を公布せられ、第二工學部開設に伴ふ教授以下の諸官の定員の増加と各學科の講座數が決定せられた。

(8)

右の三勅令は孰れも昭和十七年四月一日より施行せらるゝこととなり、茲に本學第二工學部の設置が公式に確定したのである。

(二) 講座及教官

第二工學部の講座設置年度計畫は第一年度三三、第二年度二二、第三年度一五、として承認せられ、第一年度の内譯は左の通り設置せられた。而して昭和十七年四月一日、専任教授二五名、兼任教授四名、兼勤教授一〇名、専任助教授二〇名、兼任助教授二名が任命せられ、諸教授が初代第二工學部長に補せられた。

土木工學	三講座	機械工學	三講座	船舶工學	二講座	航空機體學	二講座
航空原動機學	二講座	造兵學	二講座	電氣工學	三講座	建築學	三講座
應用化學	三講座	冶金學	二講座	應用力學	二講座	應用數學	一講座
應用物理學	二講座	應用電氣工學	一講座	工業分析化學	二講座		

(三) 建物、敷地及び設備

舊總課及第二工學部設立準備事務室の諸員が百方手を盡して促進を圖つたに拘らず、前述の如き事情に因り開學當初使用し得た建物は延坪約二千坪に過ぎず、又敷地内の道路、省線電車、京成電車等との交通關係、宿舍の供給等も甚だしく不便な状態に在つたが、豫定の通り昭和十七年四月一日に開學し茲に本學は既設の七學部の外に新に一の學部を加へることになつたのである。

(9)

269

工業分析化學の實驗に必要な建物、瓦斯、水道、排水の工事は著しく竣工遅延したため第一工學部の快諾を得てその設備を共用することとなり、兩學部學生は日曜にも登學するとか、實驗時間を延長する等の不便を均等に忍んで學修に努めつゝある。

(四)

第二工學部は以上略述した通りの経過によつて不完全年に見え角開學する運びとなつたのであるが此の短期間の準備を以て此の規模の學部を開設し得たのは平賀總長の下に丹羽、内田兩工學部長以下工學部教授、助教授、登録課、庶務課、會計課等の本部關係諸官等が互に緊密なる協力を傾注した結果である。

六、開學後の進捗状況

(一) 建物及設備

前述の如く極めて不便な状態で開學したのであるが其の後資材、勞力、輸送等の困難は依然として緩和せられず特にセメント、瓦斯水道用管等類の入手困難は著しきものがあつたが本年十月の第二年度開始も目標に迫つてゐるので關係者一同あらゆる手段を盡して建築の促進を図つた結果十月一日迄に主要建物十五棟延五千七百坪の竣工を見、幸うして第二年度の間に合はすことが出来た。其の後更に竣工せるものを加へ現在十七棟延六千二百坪、工事中のもの及び入札済のもの合計十五棟延四千二百餘坪である。

次に今春來工事中の瓦斯供給管及附帶装置は漸く十月に入つて完成せられ電も角本學内まで瓦斯が供給せられるこ

とになつた。實驗設備の完成と相俟つて本格的に使用せられるのも間近のことであらう。又研究及實驗用設備品に就ては既に今迄に納入せられたもの約百五拾萬圓、更に本年度中に納入の見込を以て契約済のもの約百四拾萬圓、來年度以降納入の豫定を以て契約せるもの約百八萬圓である。

(二) 第二年度の講座増設

第二年度開設の講座数は二十一講座であつて十月三日勅令第六六三號を以て左の通り改正公布せられ茲に本學部の講座は五十四講座となつた。

土木工學	二講座	機械工學	三講座	船舶工學	三講座	航空機體學	二講座
航空原動機學	一講座	造兵學	二講座	電氣工學	二講座	建築學	二講座
應用化學	二講座	冶金學	一講座	應用力學	一講座		

又右に伴ふ教職員の定員の増加は十一月二十日に至り勅令第八百七號を以て官制改正が公布せられた。

(三) 教職員及學生の現在數

第二年度講座開設等に伴ふ教職員は未だ其の全部の任命を見ないのであるが本學部教職員の現在數は左の通である	
教 授	四五名(内兼任七名、兼勤八名)
助 教 授	三二名(内兼任四名、兼勤一名)
講 師	四一名(内専任一七名)

授業擔任及授業補助 一五名(第一工學部、航空研究所の教授又は助教)
計 一三三名
書記官 一名
學生主事事務補助 一名
助手、書記其の他担任官 七八名
嘱託職員補人 二二八名
合計 四四一名(内専任三九六名、兼任、兼勤等四五名)

學生は本年四月入學者四二一名、本年十月入學者四二六名(内陸海軍學生四名)合計八四七名で來年十月更に一回收容すれば總員千二百六十餘名となる見込である。

(四) 學生諸施設

本學部は市街地から相當の距離にある關係上學生の福利施設等については開學前から相當考慮する所があつた。その内食堂及賣店は本年四月當時既に竣工してゐたが、一時之を實驗室等として利用するの已むなき事情にあつたので暫定的に學生食堂は本館内に又賣店は講堂の一隅に之を設けた。併し本年九月實驗室の一部が移轉を了したので、右施設は本來の建物に移轉し更に整備充實を急いでゐる。賣店の販賣品目も最近までは文具、洋品の一部等

に過ぎなかつたが十一月中旬以降書籍の販賣を開始し更に達次品目を追加する豫定である。

又醫務室は今年四月來暫定的に本館内の一室に之を設け本館の附屬醫院から四名の診療醫が交代勤務してゐるが更に目下中央講義室裏に約九十坪餘の醫務室建物を建設中で來春迄に竣工の見込である。

次に本學部の地理的状況から學生の宿泊については少からず不便が豫想せられたので開學準備當時から考慮する所があつたが、千葉市の繁華により民間會社をして本學部附近に本學部學生の爲専用の宿舎を建設せしめることになつたが之は本年四月には間に合はなかつた。併し同會社の厚意により既に他の用途に充てる爲建設した建物を提供してくれたので之に百數十名を收容し、更に千葉市の繁華で本學部に比較的近い民家に分宿せしむるの手段を講じ幸ひに學生の希望を充たすことが出来た。而して前記學生用宿舎は八月末竣工を見たので直ちに二年生の一部を收容し、更に十月新入學者の一部をも收容して現在二百七、八十名に達してゐる。本宿舎は一棟三十室のもの六棟で之が經營に就ては會社は本學部と協議の上その方針を決定することとし、本學部としても出来得る限り之に援助を與へ宿泊學生の便益を圖ることとした。時局柄本學部所有の學生宿舎を直營することは學部當事者としても極めて望ましいことではあるが、之が早急實現は困難であるから取敢へず右宿舎をして學部當事者の熱意と宿泊學生の自治的生活による協力により本學部學生訓育の上に於て重要な施設たらしめたいものである。

(五) 交通

省線は本年十月一日から本學部前に西千葉驛が開設せられ、又京成電車は本年十一月三日から帝大工學部前驛が正

門前に移轉を了し昇降を開始したので相常便利になつた。

(七) 結 言

以上述べたる如く本學部の創設も第二年度に入り愈々之が完成に向つて邁進することになつたのであるが何分にも資材其の他幾多の困難が豫想せられ、今後建築及設備の整備充實には並々ならぬ苦心を要すること言を俟たざる所で茲に我等の學園建設の爲に教職員各位及學生諸君の熱誠なる協力を希望して止まぬ。

(第二工學部長 瀧藤 榮二)

266



昭和十七年三月

東京帝國大學工學部附屬綜合試驗所要覽

267

268

東京帝國大學工學部附屬綜合試驗所要覽

目次

一 總 說	一
二 設立ノ経緯及ビ経過	二
三 官 制	三
四 建物及ビ主要實驗設備	三
五 固定設備室、中間試験室及ビ一般研究室	五
六 職 員	六
七 研究概況	七

一 總 說

本所ハ東京帝國大學工學部ニ附屬セル研究機關ニシテ東京帝國大學總長ノ監督ノ下ニ於テ工學部長、所長トシテ其ノ事務ヲ掌理ス

本所ノ目的ハ次ノ如シ

一 工學部ニ於テ所屬學科ヲ異ニスル教授、助教授ガ二名以上協同シテ行フ綜合研究ノ遂行、又ハ工學部勤務ノ教授、

助教授ガ主体トナリ他學部勤務ノ教授、助教授ト工學ニ密接ナル關係アル事項ニ就キテ行フ綜合研究ノ遂行

二 基礎的研究ヲ終リ之レヲ工業化セントスル場合ニ行フベキ中間試驗研究ノ遂行

三 本所ノ適當ナリト認ムル研究ノ受託

四 本所ノ適當ナリト認ムル試驗、檢定ノ受託

五 本所ノ適當ナリト認ムル修理、製作ノ受託

而シテ第二項以下ハ必ズシモ綜合的ナルヲ要セズ單獨ニ之レヲ行フヲ妨グザルモノナリ

以上ノ如ク本所ハ專ラ工學學勤務教官ノ研究機關ニシテ學生ノ教育、指導等ニハ關與セザルモノナリ

本所ノ機構ハ次ノ如シ

本所ニハ現在專任ノ助教授、助手、書記等ヲ置キ本所ノ業務並ニ事務ニ從事セシム

本所ノ管理ニ關シ所長ヲ補佐セシムル爲ニ管理委員會ヲ、又工學部各學科ト本所トノ連絡及ビ學術ニ關スル所長ノ諮問機關トシテ專門委員會ヲ、更ニ本所ニ備ヘ附クベキ圖書、雜誌類ノ整備ニ關スル所長ノ諮問機關トシテ圖書委員會ヲ夫カ設置シアリ

本所ニ於ケル綜合研究、中間試驗研究、受託研究等ノ研究期間ハ何レモ二ケ年以内トシ特別ノ場合ニハ其ノ期間ヲ延長

シ得

二 設立ノ経緯及ビ経過

東京帝國大學工學部ハ多數ノ専門工學科ニ分レ各々其ノ専門ノ分野ニ於テ深奥ナル學術理論ノ攻究並ニ其ノ應用ニ就キ研鑽ニ致メ幾多ノ業績ヲ擧ゲツツアリ 然リト雖最近ニ於テ工業ノ進歩ハ各専門工學ノ充分ナル連絡綜合ヲ必要トシ又理論的研究ヨリ進ンデ之ヲ實際化スルニ到ル中間研究或ハ學外ヨリノ委託試験研究ヲ必要トスル場合益々多キヲ加フルニ到レリ

本學部ハ夙ニ此處ニ視ルトコロアリ 既ニ昭和九年ノ頃當時工學部長タリシ田中芳雄教授ハ本學工學部ニ經費百萬圓ヲ以テ右ノ目的ヲ遂行スベキ試験研究機關ヲ設立センコトヲ企圖セシモ豫算其ノ他ノ關係上容ルル處トナラズ 後平賀讓教授部長トナルニ及ビ此ノ計畫ヲ引繼ギ實現ニ力メシ結果昭和十二年ニ至リテ時ノ政府ニ依リ經費四十五萬圓三ヶ年繼續事業ニテ附屬綜合試験所ノ創設ヲ承認セラレタリ 然ルニ右經費ニテハ其ノ規模本學部最初ノ計畫ニ及バザル事甚ダ遠ク遺憾ニ堪ヘザリシ處幸ニモ株式會社三菱社々長岩崎小彌太氏ヨリ八十三萬四千圓ノ寄附ヲ得又本學教授三島徳七氏ヨリ本所設備ノ援助ヲ目的トスル奨學金五萬圓ノ寄附ヲ得、總額百三十三萬七千圓ヲ以テ建物ノ建設及ビ設備ニ充ツル事トセリ

而シテ三菱社ヨリノ八十三萬七千圓ニ就テハ之レヲ以テ建物及ビ附屬實驗設備ヲ完成ノ上、東京帝國大學ニ寄附スル事トシ此ノ目的ノ爲ニ總長ヲ會長トシ三菱社代表者及ビ本學關係者ヲ委員トスル建設委員會設ケラレ之レニ建築委員會及ビ設備委員會ヲ附置シ建築及ビ設備ニ關スル事項ヲ擔當セシメタリ 而シテ昭和十二年九月工ヲ起シ十三年十一月國費ニ依ル建物ノ一部竣工シ、十四年七月三菱社寄附ノ大部分同年十二月寄附ニ依ル増築部分、更ニ十五年三月國費ニ依ル

殘部竣工シ同年九月ニ至リ全建物ノ完成ヲ見ルニ到レリ 一方實驗研究設備ハ十五年三月ヲ以テ國費支辨ニ係ル全部ヲ又同年九月ニハ三菱社寄附ニ依ル設備ノ全部ヲ完成セリ

而シテ昭和十四年十月廿四日ヲ以テ東京帝國大學官制中ニ東京帝國大學工學部ニ附屬綜合試験所ヲ置キ工學部長タル教授ヲ以テ所長ニ補スベキ旨公布セラレ、同年十二月廿八日東京帝國大學教授工學部長丹羽重光附屬綜合試験所長ニ補セラレタリ

次デ十五年一月十八日教授田中芳雄、同内田祥三、同佐野秀之助、同瀧藤象二綜合試験所管理委員ヲ依囑セラレタリ

三 官 制

昭和十四年十月廿四日勅令第七百二十五號ヲ以テ東京帝國大學官制中次ノ如ク改正セラレタリ

第九條 工學部ニ附屬綜合試験所ヲ置ク

綜合試験所ニ綜合試験所長ヲ置キ工學部長タル教授ヲ以テ之ニ充ツ

綜合試験所長ハ總長ノ監督ノ下ニ於テ綜合試験所ノ事務ヲ掌理ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

四 建物及ビ主要實驗設備

(イ) 建 物

本所ハ東京帝國大學構内ニ位置シ總延坪二、一〇二・五二坪、内一、四三九・九六四坪ハ株式會社三菱社ノ寄附

ニヨルモノニシテ昭和十二年九月起工、昭和十五年九月竣工セリ
其ノ建築概要次ノ如シ

建築面積 五五五・九一三坪
建築延面積 二、一〇二・五一二坪
建物階數 地上四階、地下一階
建物高サ 周圍空壕床面ヨリ四階扶壁上端迄 二二・一三米
精造 鐵筋コンクリート造
外装 主トシテ スクラッチタイル貼、一部人造板石貼等
内装 櫛フロアリングブロック敷、人造石塗研出、モルタル塗等
壁 プラスター塗、一部タイル貼、壁紙貼、ペンキ塗等
天井 セメント劑吹付仕上
建具 外部窓ハ全部鋼鐵製、出入口扉其他ハ木製
暖房給水其他 暖房ハ眞空式低壓蒸氣暖房トシ給水ハ東京市水道ヨリ高架水槽ニ揚水シタル上各室ニ配給ス
其他排水設備、瓦斯設備等ヲ有ス
電氣設備 東京市電氣局高壓電氣ヲ引込ミ地階變電室ニテ低壓變電シ電燈、動力及ビ實驗用ニ備フ
其他電話、電氣時計、電鈴裝置ヲ設ク

設計監督

設計監督ハ東京帝國大學工學部附屬綜合試驗所建築委員會之レニ當レリ 但シ國費ニヨル部
分ハ東京帝國大學營繕課ノ擔當ニ係ル

(ロ) 主要實驗設備

設備

物性、熱、音響、光等ニ關スル物理研究設備
X線廻折及ビ分光裝置一式 低溫室、恒溫恒溫室設備
一米風洞 風洞用三分力天秤 精密壓力計
一般材料試驗設備 構造疲勞試驗設備 電氣熔接設備 計器試驗檢定設備 電氣試驗檢定設備
備 工作器具機械試驗檢定設備 溶解、鍛冶、熱處理設備一式 機械工作設備一式 交流三
百キロワット變電設備一式 五十キロワット直流電流發生用電動發電機 實驗用動力配線施
設 金屬組織研究用顯微鏡設備一式 工業化學分析設備一式 纖維強度測定裝置 耐火材料
試驗設備 燃料試驗檢定設備 試驗用ゴム練裝置 ゴム試驗裝置一式 ホモゼナイザー 水
壓機 眞空乾燥蒸發裝置 遠心分離機 攪拌式高壓罐 防毒面試驗檢定設備一式 選鑄試驗
檢定設備
鑄石處理ニ關スル設備 寫眞暗室用諸設備

五 固定設備室、中間試驗室及ビ一般研究室

(イ) 固定設備室

固定設備室ハ夫々研究ニ必要アル固定設備ヲ有スル部屋ニシテ本所ノ一般研究室ヲ利用シテ研究ニ從事スル者

及ビ各種受託試験、檢定業務ノ遂行者ハ常ニ必要ニ應ジ此等ノ設備ヲ共通ニ使用シ得ルモノナリ
其ノ種別次ノ如シ

機械工作場 木工場 硝子細工室 低溫室 材料試験室 運轉試験室 鑄石處理室 鍛冶室 熱處理室 電氣
熔接室 電氣應用共用固定室 工作機械器具試験室 燃料試験室 寫真暗室 ゴム試験室 物理試験檢定室
一般分析共用固定室 天秤室 硫化水素室 顯微鏡試驗室 恒溫恒濕室 計器試験檢定室 放射線試験室 電
氣試験檢定室 化學機械及ビ製造化學ニ關スル固定室 化學試験檢定室 防毒試験檢定室

(ロ)

基礎的研究ヲ終リ之レヲ工業化セントスル場合ニ行フベキ規模ノ工業試験ヲ實施シ得ル様設備セル部屋ニシ

テ希望教官ヨリノ申請ニ依リ貸與ス

(ハ)

一般研究室

綜合研究、受託研究若クハ科學研究ヲ行フ教官ニ必要ニ應ジテ貸與スルモノニシテ各室毎ニ瓦斯、給水、排
水、動力用配線設備ヲ備ヘ一單位(約七・五坪)ヨリ八單位ニ至ル廣狭ノ別アリ

六 職 員

所	長	教授	工學部長	内	田	祥	三
專任助教	櫻	井	高	景			
同	石	黒	美	種			

七 研究概況

(イ)

綜合研究

微粒選別方法ノ研究 電子顯微鏡ニ關スル研究 材料試験機ノ基礎的研究 各種パネノ基礎的研究 油壓傳動
並ニ壓力油ニ關スル研究 黒鉛刷子ノ製法及ビ整流子面ニ於ケル整流作用ノ研究 電氣的演算裝置ニ關スル研
究 アセチレン其他ノガス體ヲ使用スル内燃機ノ研究 木造家屋防火用壁材料ニ關スル研究 銅ノ品位ニ及
ボス酸素ノ影響 極硬ニ線ニ依ル機械材料檢査ノ研究 高周波振動力ニ對スル材料ノ性能 人造及合
成纖維ノ紡糸ニ於ケル化學的及機械的處理 吸着劑ノ研究 硝子窓ノ耐爆風對策ニ關スル研究 氣流中ノ各種
蒸氣含量ノ精密測定法

(ロ)

受託研究

高速ダイヤモンド機械ビストン用輕合金ノ研究 珪酸苦土質耐火物ノ研究 カルシウム・カーバイドニ關スル基礎
的研究 金屬材料トシテノ含ニツケル、クロム、コバルト、ルテチウムノ適性並ニ利用方法ノ研究 合成樹脂ノ研
究 鐵ト水素トノ關係ニ關スル研究 精密工作ニ關スル研究 有機高分子物質ニ關スル研究 寫真用ゼラチン
製造ノ研究 バガス、リグニン利用ノ研究 一酸化炭素ガスノ質純ニ及ボス影響 爐内ガスノ流動ニ就テノ基
礎的研究 其他二十六項目

(ハ)

文部省科學研究費ニヨル研究

國產アルミニウムニ關スル基礎的研究 電路開閉現象ニ關スル研究 坑道掘採油ニ關スル基礎的研究 火器ノ
性能及其ノ利用ニ關スル基礎的研究 高壓蒸氣機ニ關スル研究 高速度ニ於ケル翼ノ空氣力學的研究 傳爆ニ
關スル基礎的研究 輻射及電氣衝突ニヨル諸種氣體ノ電離及勵起確率ノ量子力學的研究 火花電極ノ消耗

八
X線ニヨル金屬内部測定法 X線分光分析法ノ研究 X線吸收スペクトル分光法、X線特殊廻折法ニ依ル金
屬材料時効硬化ノ研究 淺吃水船舶ノ基礎的研究 氫温ニ於ケル土木材料ノ研究 飛行機構造部分ノ彈性強度
及振動ニ關スル研究 極超高周波電氣振動ノ研究 金屬ノ光學的性質ノ研究 流體接手ニヨル傳動ノ研究 金
屬製鍊熔解爐築造用耐火物ニ關スル基礎的研究

